

休憩時間中にネフリユードフは、もう二度と法廷へはかへらぬ決心で廊下へ出た。彼等の好きなやうに裁判させて置けば可い。自分は、あんな恐ろしい、ぞつとするやうなお茶番の仲間入りはもう眞平だと思つた。

検事の部屋を尋ねて、検事に直接會はうとした。廷吏は、検事は忙しいからと云つて、取り次がともしなかつたが、ネフリユードフはそんなことには頓着なく、その戸口の所まで行くと、一人の役人に出會つた。で、自分は、陪審員の一人だが緊急な用事で検事に會ひたいから取次いで呉れるやうにと頼んだ。

公爵の肩書と、立派な服装とで大に助かつた。役人が検事に取り次いで呉れたので、うまく通されることになつた。検事は、執拗く面會を求められるのを困つたと云つた顔付で、立つたまゝで迎へた。

「何うした御用ですか」と、検事は、厳格な調子で云つた。

「私は陪審員の一人で、ネフリユードフと申しますが、折入つた用事で、女囚のマースロワに面會さして頂きたいので」と、ネフリユードフは、今や自分の生涯に大變動を來たさうとしてゐることを自覺して、顔を眞紅に染めながら、早口できつぱりと慥う云つた。

検事は、脊が低く色が黒くて、灰色の髪を短く刈り、突き出た下顔の濃い鬚をも短く刈り込んで、眼をきよろく／＼させてゐた。

「マースロワ、いや、知つてゐます。あの毒殺事件の」と、検事は、落ち付いて云つた。「だが、何う云ふ御用事で面會なさるのでですか」それから今度は更に調子を低くして訊ねた。「用事が判らないと

お許しする譯には参りませんが」

「實は少し込み入つた重大な用事があるんです」と、ネフリユードフは、眞紅になりながら云つた。

「さうですか」と、検事は眼を釣り上げて、ネフリユードフを睨と見詰めながら「その女の裁判の事はお聞きになりましたか、まだですか？」

「あの女は、昨日公判になつて、徒刑四年と云ふ不當な宣告を受けましたが、然しあれは全く冤罪なんです」

「さうですか？、昨日宣告されたばかりだとすると」と、検事は、ネフリユードフが、マースロワの冤罪を主張してゐるのには耳もがさず、「してみると、その女はまだ未決監に居る筈です——正式に宣告されるまでは。面會日は定つてゐますから、その目にお訪ねなされば可いんです」

「然し、實は一刻も早く面會したいんですが」と、ネフリユードフは次第に、最後の瞬間が近づいて來たやうに感じながら、顔をわな／＼慄はせて云つた。

「何うしてそんなにお急ぎになるんです」と検事は、氣短がさうに眉を釣り上げて云つた。

「あの女は罪もないのにひどい宣告を受けてゐるからです。罪は皆私にあるんです」と、ネフリユードフは、聲を震はせて云つた。そしてすぐその後から、何だか云ふ必要のないことを云つて了つたやうな氣がした。

「それは又何う云ふ譯ですか？」と検事は訊ねた。

「私が誘惑したのが原因で、あの女は、今のやうに墮落して了つたんです。もし私が、あんな事を

しなかつたら、あの女は墮落もしてゐまいし、又こんな告訴されるやうな事にもなつてゐなかつたと  
思ひます」

「それは同じ事です。だが、そのために女に面會したいと有仰るのは、少し私には了解出来兼ねま  
すが」

「それは何です、實は、あの女に隨いて私も西伯利亞へ行きたいんです……あの女と結婚したいと  
も思つてゐますので……」と、ネフリユードフは、吾から涙ぐんで、口訥りながら云つた。

「えッ、あなたが？」と、検事は驚いて云つた。「それは飛んでもない事です。あなたは、儲かクラ  
スノペールスタ郡會の議員でしたね？」と、彼は、今、妙な事を云つてゐるこのネフリユードフは、  
以前は多分さうだつたと聞き覚えがあつたのを思ひ出して、それを尋ねた。

「失禮ですが、それは、私の御願ひとは別に何の關係もありませんまい。」と、ネフリユードフは、腹立  
たしさうに顔を赧くして答へた。

「勿論、ありません。」と、検事は、一向平氣で空々しく微笑しながら云つた。「たゞね、あなたの有  
仰ることが餘り意外で、餘り常識に外れてゐますもので。」

「ですが、面會を許して頂けますか？」

「面會ですか？え、今直ぐ面會認可の命令書を書いて差し上げます。どうかお掛け下さい。」検事は  
テーブルへ行つて、腰掛けて書き始めた。

「何うぞお掛け下さい。」

ネフリユードフは、尙ほ突つ立つたまゝであつた。

検事は、面會認可の命令書を書き上げると、それをネフリユードフへ渡して、不思議さうにその顔  
を見てゐた。

「もう一つ私は、以後陪審員として出廷致し兼ねることを申して置きます。」

「それは、然る可き理由を具して、法廷へ御届けにならねばいけません。勿論、御存じでも御座い  
ませうが。」

「理由と云ふのは、人を裁判することは無用なばかりでなく、却つて不道德なことと考へたからで  
す。」

「左様。」と、検事は、例の空々しい微笑を浮べながら、そんな説は、誰でも知つてゐる笑止千萬な  
ことだと云はぬばかりに云つた。

「なる程御尤もですが、然し私は検事の職として、そのお説には御同意出来ないことを御承知下さ  
い。ですから、法廷の方へ御届け下さらねばなりません。法廷では、その理由が正當か不正當かを考  
へて、もし不正當と認められた場合には、罰金を科しますよ。まあ法廷の方へ御届け下さい。」

「いや、あなたにお話しました以上、もう他の所へ届け出る必要はありません。」と、ネフリユード  
フは、腹立たしさうに云つた。

「ぢや、宜しい、さやうなら。」と、検事は此の妙な來訪者から一刻も早く通れようとして頭を下けた。

「今、君と話したのは誰だい。」と、丁度ネフリユードフがその部屋を出た後へ這入つて來た一人

の同僚が検事に尋ねた。

「ネフリユードフさ、君も知つてゐる。あのクラスノペールスクの郡會で、いつも變な説ばかり持ち出してゐた男だよ。随分變つてゐるね。陪審員になつてゐるんだが、昨日徒刑に宣告された囚徒の中に、それは自分で話したんだがね、自分が昔騙した女とか娘とか云ふのがあるんださうで、今になつてその女と結婚しようとするんだよ。」

「そんな莫迦な話があるものか。」

「だつて、本人がさう云ふんだもの。そして實際あの通り夢中になつてゐるんだからね。」

「フォーム。一體現代の青年には、何處か非常識なところがあるね。」

「然し、あの男は、もう青年ぢやないぜ。」

「さうだね。然し、あの有名なイワシェーニコフ君のしつこいものにも弱つたね。何うも／＼毎日困らせられる。のべつに、饒舌るとも、饒舌るとも。」

「あんな人間は、頭から叩きつぶすんだね、でない、本當に社會の妨害者になつて了うよ。」

### 三六

検事のところからネフリユードフは眞直ぐ未決監へ行つた。然し、其處にはマースロワは居なかつた。多分古い假監獄の方にあるだらうと、典獄は教へて呉れた。

未決監と假監獄との間は、道が大分離れてゐたので、ネフリユードフはやつと日暮れ方其處に着い

た。大きな陰氣臭いその監獄の門を這入らうとすると、門衛が引き留めて、ベルを鳴した。すると、それに應じて看守が出て來た。ネフリユードフは、面會認可の命令書を見せたが、兎に角典獄の許可がなくては差入れる譯には行かないと看守は云つた。で、典獄へ會ひに行つた。階段を上つてゐると、何處からか、錯綜した節の面白いピアノの音が聞えて來た。それは片眼に繻帯をした女中が、部屋を開けた時、そこから洩れて來たものゝやうであつた。曲は、誰でもよくやる、リスツの狂躁曲で中々手際に弾いてゐたが、それはたゞ或一節だけであつた。切りまで來ると又同じ節が初めから繰り返されてゐた。ネフリユードフは、典獄は在宅か何うかをその繻帯の女中に訊ねた。すると不在だと、女中は答へた。

「すぐお歸りになるかしらん？」

其の時曲はまた止んで、再び初めから繰り返され、さつきの美妙な箇所へと、また音色高く鮮かに弾き進められて行つた。

「何つて参りませう。」と云つて、女中は去つた。

曲は丁度高調に達してゐたが、突然その最後の美妙な箇所へ行かない前に、ハタと止んで、その代り誰かの聲が聞えて聞た。

「お不在で、今日は何時歸るか判らないツて云つておやり。訪問にお出掛けなんだからね。本當に邪魔ツけだよ。」と、戸の背後から女の聲がした。そして、曲はまた始つたが、すぐ止んで、今度は聲子を押しやる音が聞えた。それは云ふまでもなく、氣短かなビヤニストが、時ならぬ時分に訪問した

厄介客に當てつけて、ぶり／＼怒つてゐるのだつた。

「お父さんはお不在です。」と、縮れ毛の、どんよりとした眼の縁の黒い、顔の蒼褪めた、弱々しい娘の子が、腹立たしさうにかう云つて、次ぎの室へ現れて来た。すると、立派な扮装をした若い紳士がゐるので、俄かに柔しく更つて、「何うぞ御入り下さい……何麼御用で御座いますか。」

「私は、この監獄に居る囚人に面會がしたくて参りましたが。」

「國事犯の方でせうね？」

「いえ、國事犯ではありません、検事の認可書を持つてゐます。」

「ですけど、私には判りません。お父さんは出掛けてゐますもので、でも、何うぞ御這入り下さいまし。」と、彼女は再び云つた。「何でしたら副典獄に御話しなまつて御覽なさいまし、まだ役所に居りますから、あちらで御尋ねなさいまし。あの御名前は？」

「有り難う。」と、云つて、ネフリユードフは娘の問ひには答へないで、さつさと出て行つた。お客が去つてからも戸は尙ほ開けつ放しのまゝで、またさつきと同じ陽氣な調子が始められた。それは、こんな場所柄にも、またそれをおさらひしてゐる病身らしい顔色の娘にも不似合な調へであつた。廣庭のところ、ネフリユードフは、短い口髭を生やした一人の役人に出會つたので、副典獄の所在を尋ねた。と、その男が副典獄であつた。認可の命令書を見せたけれども、未決盤への認可書では許す譯には行かないと云つた。それにもう時間が遅かつた。

「何うか明日又いらしつて下さい。明日の十時からなら誰にでも許します。その時來て下さると典獄も居りますから、さうすれば、普通面會室でなり、或は、もし典獄が許せば、事務室でなり、面會が出来ます。」

こんな鹽梅で、ネフリユードフは、其の日は到頭面會が出来ないで、家へ歸つた。マースロワに面會しようと云ふ考へばかりで一杯だつたので、歸る道すがら、裁判所のことなどは少しも念頭になく、検事や副典獄と交渉した事ばかりが憶ひ出された。

マースロワに面會したいばかりに、検事と問答したり、二個所の監獄を歩き廻つたりしたので、すつかり充奮して丁ひ、容易には落ち付かれなかつた。歸ると直ぐ、長いこと手に觸れなかつた日記を開いて、二三頁読みながら、纏て次ぎのやうに書きつけた。

「二年間自分は日記を書かなかつた。そして、再びこんな兒戲をなすまいと考へた。然し日記は兒戲ではない。すべての人の、その心内にある眞聖な眞我と、自己とが談話するのである。」

この二年間、自分の眞我は眠つてゐたので、何も語ることがなく過して来た。然るに自分は、この四月二十八日、陪審員として、裁判所に出頭すると、端なくも、意外な出來事に出會つて覺醒した。昔自分が手籠めにしたカチューシャが、獄衣を着て、被告席にゐるのを見た。妙な誤審からではあつたが、彼女は遂に徒刑に處せられて了つた。

これと云ふのも皆自分の罪である。自分は検事を訪ねて、それから監獄へ行つたが、面會を許されなかつた。然し自分は、あの女に會つて、罪を懺悔し、結婚しては罪を償ひ、出来るだけの事をしなければならぬと決心した。神よ、お助け下さい。自分の心は平和だ。そして今自分は歡びに充ちて

その夜マースロワは眼が冴えて睡就かれないので、教會の執事の娘が、往つたり來たりしてゐる入口の方をじつと見詰めながら、色々考へ込んでゐた。此の後は、どんなことがあつてもサガレンの囚徒と結婚したりするやうなことはしまい、出来るなら、監獄の役人で、書記なり、看守なり、さもなくば看守見習でも可いから、そんな人達と一緒に暮らさうと考へた。

「みんながそんな風になつて了ふのぢやないかしらん。でも私だけは、よしや死んだつてそんな惨目なことになつてはならない。」

マースロワは、自分を受け持つた辯護士が自分の顔を見てゐた事、それから裁判長初め多くの人も自分を特別に見てゐた事、中には自分を見たいばかりに態々法廷へ來た者さへあつた事などを憶ひ出した。又、監獄へ會ひに來て呉れた、朋輩のベルタが、自分が、キターエワにゐた時の馴染客の或學生が、自分の安否を問ひ、ひどく氣の毒がつてゐると、傳へて呉れた事や、それから、赤毛の女と喧嘩して、終ひにはその女が氣の毒になつて來た事、麵麩屋が、卷麩麩をまけて呉れた事など、様々な記憶を呼び起したが、ネフリユードフの事だけは、少しも憶ひ出さなかつた。尤もマースロワは、子供時代の事や、娘盛りの事や、ネフリユードフと戀に陥ちた事などは、これまでも憶ひ出さうとしなかつた。それは皆、餘りに悲痛な事であつたからである。之等の憶ひ出は、魂の何處か深い所に、

そつと隔らぬやうに藏ひ込んでゐたので、全く彼の事は忘れ果て、ツイゞ憶ひ出した事もなく、夢にさへ見た事もなかつた。マースロワが最後にネフリユードフに會つた時は、彼は軍服を着てゐて、腮鬚などはなく、たゞちよほしくと口髭が生えてゐただけで、頭の毛も短く刈り込んであつたが、濃くて房々してゐた。然し今のネフリユードフは、頭が禿げ上つて、腮鬚が伸びてゐた。

だが、マースロワが、今日法廷で彼に氣のつかなかつたのは、そればかりではなく、實は、んで彼の事を考へてゐなかつたからであつた。ネフリユードフが、出征軍からの歸路、伯母さん達の家へは立ち寄らずに、汽車で眞直ぐ素通りして了つたあの眞暗な恐ろしい晩以來、マースロワは、ネフリユードフの記憶をすつかり過去に葬つて了つてゐた。あの時彼女は、既に妊娠してゐるのに氣がついてゐた。ネフリユードフが歸つて來るのを待つてゐる間に、時々不意に腹の中の柔かい塊が動き出すのを感じても、不思議に思ふばかりで、少しも苦にはしなかつた。所が其の晩から總てが一變して、腹の子供が荷厄介でならなくなつた。

伯母達も、ネフリユードフを待つてゐて、歸路には、是非立ち寄つて呉れるやうにと云つてやつたが、此の度は、指定の時間までにホテルブルグに行つてゐなければならぬから、立ち寄ることは出来ない、電報を打つてよこした。それを聞くとカチニシヤは、ステーションまで出掛けて行つて彼に會はうと決心した。汽車は夜の二時に其處を通るのだつた。二人の老主人を寢床へ就かせてから、賄方の娘のマーシユカを連れ出し、古靴を穿いて、肩掛を頭から被り、裾を端折つて、ステーションへと駆け付けた。

生温い雨空の、風のある秋の夜であつた。生温い大粒の雨が、一としきり降つては又止んだ。野を横切つた小徑は、辛つとわかるかわからない位で、森の中はまるで漆のやうに眞暗だつた。それで、よく知つた徑ではあつたが、カチユーシヤはつい踏み迷つて、たつた三分間しか停車しないその小さなステーションへ、あたふたと駆けつけた時には、豫定した時間よりは遅れて、もう發車を知らせる第二のベルが鳴つてゐる所だつた。

カチユーシヤはあはてムブラットホームに駆け込み、すぐ一等室の窓の所へ行つて、ネフリエードフを見附け出した。その車室内には、燈火がテカ／＼照らしてゐた。二人の士官が互に天鵞絨張りの椅子に腰掛けて、じゝと燃えてゐる太い三本の蠟燭を立てたテーブルを中にして、差し向ひになつてトランプをやつてゐた。ネフリエードフは、きつちりしたツボンを穿き、白いシャツを着、腕を椅子に凭せて、後ろへ倚り掛つて何か笑つてゐた。その顔を見るや否、カチユーシヤは、凍んだ手で東側の窓をコツ／＼と叩いた。すると、その途端、最後のベルが鳴つて、列車がガタリと一と揺れ後へ下つて、しづ／＼と一車宛順々に進行し始めた。

トランプの札を握つたまゝ一人の士官が立ち上つて、外を見た。カチユーシヤは顔を車窓に押しつけて、再びコツ／＼と叩いたが、列車は段々進行するので、彼女は車窓を覗き込みながら、それにつれて歩き出した。士官は窓を下さうとしたが、中々下りなかつた。ネフリエードフは、その士官を押し除けて、自分が代つて窓を下ろし始めた。汽車は次第に早くなるので、カチユーシヤも愈々駆け出さねばならなかつた。尙ほどん／＼早くなつて行つた時、やつと窓が下りた。と、丁度その時、車掌が

カチユーシヤを押し退けて、飛び乗つた。カチユーシヤは、ムブラットホームの雨に濡れた板敷に沿つて駆けながら、その端に來て、そこを走り下りた時、危く轉ぼうとした。今度は線路に沿つて走り出した。けれども、その中に、一等客車はちらと過ぎ去つて、二等客車が一層はやく滑り過ぎ、——と、すぐ三等客車が、尙ほ一層はやく通り過ぎた。それでもまたカチユーシヤは走り續けてゐたが、愈々背後にランプをつけた最後の車が通り越して了つた時、彼女はいつか機關に水を供給する水槽の傍まで來てゐた。風がひゆう／＼吹きつけて、肩掛は、たみき、裾は足に纏はりついた。肩掛はたうとう頭から吹き飛ばされたが、それでも尙ほ彼女は駆け續けてゐた。

「カチユーシヤ、ハイロウナ、それ肩掛が飛んでよ。」と、カチユーシヤに追ひ付かうとしてゐた小娘は叫んだ。

カチユーシヤは立ち止つて、振り返り、両手で肩掛を拾ひ取ると、わつと泣き出した。

「行つて了つた。」と、彼女は叫んだ。

「あの人は、あんな立派な一等車に乗つて天鵞絨の眩掛椅子に腰掛けて、戯談云つて、酒なんか飲んでゐるのに、私は此處で、泥に塗れ眞黒闇に雨風にさらされて、立つて泣いてゐる。」と、心の中で思ひながら、地面にしやがんで、大聲あけて泣き上げた。小娘は驚いて、びしょ濡れになつてゐるカチユーシヤに抱き付いた。

「さあ、もう歸らうね。」と、カチユーシヤは云つた。

「今度汽車が通つたら、いつそ僕れて死んで了はうか。」と、實は、小娘のことなんか考へないで、

こんな事を考へてゐるのだつた。

そしてさうしようと決心したが、丁度その時、ひどく昂奮した後の落ち着いた瞬間にはよくあることだが、腹の中の兒が、突然身慄ひして、そつと押すやうに、徐かに伸びをし。そして又、何か細くしてしなやかな、尖つたやうなもので、お腹の中を突いた。すると、ツイ今しがた迄、生きる瀬もなくネフリュードフが怨みに怨まれて、面當てにいつそ死んで了はうかとさへ思つたその苦しい心が、すつかり消え去つて了つた。段々心が落ちついて來たので彼女は立ち上つて、肩掛を頭に被り直して歩き出した。

濡れて泥まみれになり、疲勞れ果て、家へ歸へつたが、其の日からカチューシヤの魂の中には、一種の變化が起つて、遂に今日のやうな境遇になつたのであつた。その怖ろしい夜の事があつてからは、神や善を信する事を止めるやうになつた。それまでは、自分も神を信じ、他の人達も亦神を信じてゐるものだと思つてゐたが、その眼からは、唯一人本當に神を信じてゐる者はない事、又神や神の掟などに就いて色々云はれてゐることも、悉く皆瞞着虚偽であると思ひ込んで了つた。自分でも戀し、向ふでも戀して、互に思ひ思はれてゐるに違ひなかつたのに、その人は、一旦自分を慰んだ後は見捨て、了つて、自分の大切な戀愛を踏みつけにした。然もその人は、自分が知つてゐる多くの人々の中では最高級の人であつた。その外の人は總て尙ほ一層邪惡であつた。それから後の事は、事毎に益々この確信を強めて行くばかりだつた。ネフリュードフの伯母の、信念深い老婦人達さへもカチューシヤが今迄通りに働く事が出來なくなると、暇を出して了つた。それから後に會つた女といふ女は、皆カチ

ューシヤを金儲けの道具に使ひ、男と云ふ男は、好い齡をした警察官を初め監獄の看守に至るまで、彼女を快樂の目的物と考へた。なほ、世の中には一人として、快樂の外に心を用ひる者はなかつた。この確信は、嘗てカチューシヤが獨立生活の第二年目に同棲してゐた老文學者に依つて、一層強められた。老文學者は、人生の幸福を形造るものは快樂であつて、それを詩的又は美的生活と云ふのであると、露骨にカチューシヤに話して聞かせた。

人は皆誰でも、たゞ自分の爲、自分の快樂の爲に生きてゐるのであつて、神又は正義に就いての種々な説はすべて偽瞞であると考へた。そして、何うかした時、彼女の心に疑ひが起り、世の中のすべての事は、何故こんなに間違つてゐて、お互に害ね合つたり、苦め合つたりするのかと不審に思はぬでもなかつたが、そんな時には、餘り深く考へないが一番だと思つた。もしまた、憂鬱を感じる時には煙草を喫むか、酒を飲むか、でなければ、何よりも誰か男と好い仲になつて、何も彼もすつかり忘れて了へば可かつた。

## 三八

日曜日の朝五時、婦人監房の廊下に、笛が響き渡つた時、早くから目を覺ましてゐたコラブリヨウは、マースロワを呼び起した。

『あゝ！私はもう罪人なんだ。』と、マースロワは、心中ぞつとして、朝方と云ふのもうひどく汚れて來た室内の空氣を呼吸した。モウ一度ぐつすり睡り込んで、忘却の境へ戻つて行きたかつたの

だが、怯氣の癖がついてゐて、もう眠れなかつたので、起き直つて、足をうんと伸ばしながら、四邊を見廻した。女達はみんな起き上つてゐたが、たゞ年上の小兒だけがまだ睡つてゐた。酒の密賣で捕へられてゐる女は、小兒の枕に敷いてやつてゐた自分の上衣をそつと目覺まさないやうに抜き取つた。路番の婢は、赤坊の襦袢に使つてゐた襪を乾さうとして吊し上げてゐたが、その間、碧い眼のフィヨードシヤは、ヒリつくやうに泣き叫ぶ赤兒を抱へてやへて、柔しい聲で懐してゐた。肺の悪い女は、兩手を胸に當て、顔を眞顔にして、咳き入つてゐたが、その途切れ目には、殆ど泣きながら大きな溜息をついてゐた。肥つた赤毛の女は、膝を折り曲げて仰向けになつて、大聲で面白さうに、何か昨夜の夢を話してゐた。放火犯の婆さんは、聖像の前に立つて、十字を切つて、跪拜しながら、同じ言葉を幾度もくく繰り返してゐた。教會の執事の娘は、床の上に坐つて、だるさうな睡さうな顔付をして、前の方を見てゐた。お洒落さんは、黒い油氣のある硬い髪の毛を指に巻きつけてゐた。上靴を穿いた蹠音が廊下から聞えて來たかと思ふと、戸がどんと開いて、何れもジャケツを着、足首までもない短い鼠色のヅボンを穿いた二人の囚人が連れ込まれた。二人ながら、難しい掣め面をして、臭い桶を持ち女と喧嘩を始めた。またしても毒づくやら叫ぶやら泣き言やらである。

「獨房へ行きたいのか。」と、老看守は赤毛の女を怒鳴りつけて、その露はな肥つた脊中を、廊下に反響する程ひどくびしやりくと殴つた。「大抵でやめないとひどいぞ。」

「まあ、お爺さんのいたづらつたら。」と、女達は調戲けたのだと思つて云つた。

「さア、愚圖くしないで、お参りの仕度をしないか。」

マースロワが着物を着更へて頭髮を繕ふ間もない中に、典獄が副典獄を連れてやつて來た。

「さア、檢閲だ、出る。」と、看守が叫んだ。

方々の檻房からぞろぞろ女囚達が出て來て、廊下に二列に並び、後列の者は各自前列の者の肩へ手を掛けた。そして點呼された。

點呼が濟むと、女の取締が一同を連れて禮拜堂へ行つた。マースロワとフィヨードシヤとは、方々の檻房から集つた百人以上の女囚の行列の真中のところゐた。皆、白いスカートに、白いジャケツを着て、頭にも白いハンケチを巻いてゐた。中に僅かばかり、各自思ひくの色物の衣服を着てゐるのは、兒供を連れて、西伯利亞の良人のところへ行く女房達であつた。階段は女囚の行列で一杯であつた。軽い上靴のパタパタと云ふ音と話聲とがごつちやに入り交つて、時々笑ひ聲さへ聞えた。階段の中段を曲る時、マースロワは、不圖前の方に敵のボーチコワが行くのを見附けて、俄かに怒つた顔になりフィヨードシヤの方を向いた。階段を下り切ると、女達はハタと話聲を止めて、各自十字を切つて頭を下けながら、まだ一人も這入つてゐない、鍍金でびか／＼光つてゐる禮拜堂へ入つて行つた。女囚の席は右側だつた。彼等はドヤ／＼と押し合ひ突き合ひして這入つた。女囚の後から、鼠色の獄衣を着た男囚達、即ち流刑囚、收監人、教會破門者等が、大きな駭拂ひをしながら、禮拜堂の真中と、左側とに席を取つた。

廻廊の一方には、眞先きに禮拜堂へ入れられた西伯利亞へ流刑の囚徒達が立つてゐた。此等の囚徒



は流刑の印に何れも頭を半分だけ剃り落されて、足には鎖をがら／＼引き摺つてゐた。

その反對の側には、鎖も付けられない、頭も剃られてない、未決犯人の群れが立つてゐた。

此の監獄の禮拜堂は、或富豪の商人が數萬ルーブリをかけて改築し裝飾したもので、豊麗な色彩と黄金とで輝き渡つてゐた。

暫くの間禮拜堂の内は寂と静まつて、たゞ、咳拂ひと、赤兒の泣き聲と、そして、時々鎖の音などが聞えるばかりだつた。すると、やがて中央に立つてゐた囚徒達が動き出し、互に押し合ひ壓し合ひして、禮拜堂の真中に一條の道を作つた。そこを通つて典獄が一同の正面の本堂に設けられた自分の席へと進んで行つた。

## 三九

儀式が始つた。次ぎのやうな順序であつた。

一種妙な格好の、如何にも勝手の悪さうな、金欄の法衣を着た司祭は、一風違つた昔の聖達の名や祈禱文を繰り返しながら、細く切つて、皿に並べた麵麩片を、葡萄酒の這入つたコップの中へ、大部分摘み入れた。その間に、助祭は、ますスラブ語の祈禱文を読んだが、元來これは中々難解なものであるのに、おまけに非常な早口で讀まれたので、愈々何のことやらさつぱり解らなかつた。それから司祭と助祭とは、代る／＼に囚徒と一緒に歌つた。祈禱文の内容は、主に皇帝と皇族との安泰を祈つたものであつた。

之等の願文を、一つ／＼別々に、又は他の祈禱文と一緒に、幾度となく繰り返したが、其の訓會衆は皆跪いてゐた。此の他尙ほ助祭は、使徒行傳中から色々の文句を讀み上げたが、殊更ら緊迫めたやうな聲を出すので、何を讀んでゐるのだから、少しも解らなかつた。司祭は、馬可傳の第十六章を極めて明瞭に讀み上げた。その章には次ぎのやうなことが語られてあつた。基督は死から甦つて、天に昇つて父なる神の右に坐るに先だつて、まづマグダラのマリヤに現れて、七ツの悪魔を追ひ出し、更に十一人の弟子に現れて、此の福音を遍く全世界に宣べ傳へよと教へた。即ち信せざる者は亡び、信じてバプテスマを受くる者は救はると宣べ、更に又、人々から悪魔を追ひ出し、手を觸れたゞけで人の病を醫し、異邦の言葉を話し、蛇を掴むことが出来、若し毒を飲むことがあつても決して死なぬいと誓つた。

此の儀式の根本は、司祭が斷つて葡萄酒の中に入れた麵麩片が、或方法で手品を行ひ、且つ祈禱をするると、神の血と肉とに變化するといふ假定から成立つたのである。

この手品は司祭が行ふので、金欄の法衣が邪魔さうに纏はる兩腕を、規則的に高く上げたり、宙に支へたりして、それから兩膝をついて、祭机と、其の上に載せてある祭具に一ツ／＼接吻する。然し最も大切なのは、兩手で布巾の兩端を摘んで、銀の皿と金のコップの上で、それを徐かに拍子を取つて波打たせることである。其の瞬間に麵麩と葡萄酒とが肉と血に變つて了ふのださうである。それで、儀式の中でもこのことが、最も嚴かに行はれた。

「さア、恵みある、最も純潔な、最も神聖なる神の母に。」と、司祭は、金色の中仕切りの奥から聲をかけた。すると、唱歌隊は、處女の操を失はないで、基督を生んだのだから、處女マリヤを、あらゆる諸天

神女よりは更に尊く、更に譽ある者として讃へるのは、最も正しい務めであると云ふ意味の歌を歌ひ始めた。この間に手品がすつかり施されて了ふのださうで、司祭は、皿から布巾を取り去り、麴麴を真中から四片に断り、それをまづ葡萄酒の中に漬け、それから自分の口に入れた。つまり彼は、神の肉を一片食べ、神の血を少々飲んだつもりである。それから司祭は、カーテンを引き、中仕切りの中央にある扉を開けて手に金のコップを持つて其處から現れ、望みの人は出て来てそのコップの中にある神の肉と血とを受けよと招いた。四五人の子供が出て行つてそれを願つた。

子供達の名前を訊いてから、司祭は葡萄酒に浸した麴麴の片をコップの中からそつと匙ですくひ出して、それを一人の子供の口の奥へ押し込んでやつた。それから一人一人に皆の子供の口へ入れてやつた。助祭は夫等の子供達の口を拭いてやりながら、これで子供達は、神の肉を食べ、神の血を啜つたのだと云ふ意味の歌を面白く歌つた。これが済むと、司祭は再び、そのコップを持つて、中仕切りの奥へ這入り、残りの血を飲み乾し、残りの神の肉を食べ盡して了ひ、念入りに口髭を甜ぶり、それから口とコップとを拭いて、積の皮の靴の薄い踵を鳴しながら、元氣よくまた現れて来た。宗教上の主要な儀式はこれで終つたのだが、司祭は尙ほ不幸な囚徒を慰めようとして、普通の儀式の外にもつと別な儀式をつけ加へた。それは次ぎのやうにして行はれた。司祭は、自分が作つた、神に像つたと考へてゐる、多くの蠟燭で照された、顔と手の黒い、鍍金の鍍金像の前へ出て行つて、唸るか、歌ふのか解らないやうな、一種妙な、調子外れの聲で、次ぎのやうな文句を列べ立てた——

「聖徒の最も美はしき禁あるイエスよ、殉教者によつて願へられた全能の主イエスよ、私を助け給へ。わが救世主イエスよ。最も美はしきイエスよ、あなたを救世主イエスと呼ぶ者に恵みを與へ給へ。祈禱に生れ給ふイエスよ、總ての聖者よ、總ての豫言者よ、助け給へ。彼等囚人も天の歡びを受けるに値ひする者と認め給へ。人類を愛し給ふイエスよ。」

司祭はこゝで言葉を切つて、息をつき、十字を切つて、地に叩頭した。一同——典獄も、看守も、囚人達も——皆それになつた。そして、そのために、鎖の音が前よりは一層激しく何時止むともなく響いた。司祭は更に祈り續けた。「あらゆる神の使たる造物主よ、あらゆる權威の神よ。」

「神の使を驚嘆させたる最も不可思議なイエスよ、吾々の祖先の罪の贖ひ主なる、最も權威あるイエスよ、教長達の讚美となれる最も美はしきイエスよ、國主達の力となれる最も譽あるイエスよ、豫言者達の論證となれる最も善なるイエスよ。殉教者達の力となれる最も驚嘆すべきイエスよ、修道者達の喜びとなれる最も謙遜なるイエスよ。僧侶達の極美となれる最も慈悲深きイエスよ。持戒者達の自制となれる、最も寛仁なるイエスよ、正義の喜びとなれる最も崇高なるイエスよ、獨身者達の節操となれる最も純潔なるイエスよ。あらゆる時代の、あらゆる罪人の救ひ主たるイエスよ。神の御子なるイエスよ。我等を恵ませ給へ。」イエスの名を繰り返す毎に、司祭の聲は益々かすれて行つた。やがて、云ひ終ると、絹裏の法衣を捧げて、片膝を折り曲げて地にひれ伏した。唱歌隊はまた「神の御子なるイエスよ、恵ませ給へ」と、云ふ言葉を、幾度も繰り返して歌ひ始めた。囚人等は、跪拜したり、立つたりしてゐたが、その度に、刈り残された頭の毛を背後へ振り、瘦せた裸に食ひ入る鎖をチャラ／＼響かせた。

この儀式は、中々長い時間かゝつた。最初は「恵ませ給へ」と云ふ言葉で結ぶ讚美歌をやり、それ

915—

から、更に「ハレルヤ」で結ぶ讚美歌を歌つた。囚人達は、最初は一章毎に十字を切つて禮拜してゐたが、二章毎に一度、三章毎に一度と、段々それが減つて行つて、遂に讚美歌が終りとなり、司祭がほつと嘆息をついて本を閉ぢ、それから仕切りの彼方へ這入つて行くと、一同は大喜びであつた。が、最後にも一つ仕殘されてゐる事があつた。司祭はやがてまた、端に七寶の飾りのついた大きな鍍金の十字架をテーブルの上から取り上げて、禮拜堂の中央へそれを持つて出て來た。まづ典獄が進み出て、それに接吻すると、それに續いて、看守、それから囚人達が小聲で何か罵り合ひながら、押し合ひ壓し合ひしてやつて來た。司祭は、典獄と何か話をしながら、その十字架を、あなたこなたへと囚人の鼻先へ突きつけると、囚人達は各自に争ひながら、十字架と司祭の手に接吻した。かくて、邪道に踏み迷つた同胞達を慰め導かうとする宗教の儀式は終つたのであつた。

四〇

此處に集つた者は、唯一人として、典獄からマースロワに至るまで、司祭が幾度もその名を繰り返して、あらん限りの一種不可思議な最高の詞を以て賞め稱へたイエスその人が、實はかうした儀式を禁じてゐたと云ふ事には氣がつかないらしかつた。イエスは、麵麩と葡萄酒を種として此の無意味なる事なども、不敬な化身説を排したばかりでなく、他の者をわが師と呼んだり、禮拜堂で祈禱したりする事なども、極めてはつきりと禁じてゐる。人は誰でもたゞ自分一人で祈らねばならぬと教へてゐる。人間は、禮拜堂の中に於ては、精神又は眞理に於て神を崇めねばならぬもので、自分はそ

の禮拜堂を壊すために生れて來たのであると揚言して、禮拜堂を建てる事を禁じてゐる。殊にイエスは、自分は、囚はれ人に自由を與へるために生れたのだと云つて、此處で行はれてゐるやうな人間同士で裁判したり、禁錮したり、拷問したり、處罰したりすることを禁じたゞけではなく、すべて暴虐的のことは皆禁止さへしてゐる。然しこんなことには、誰も氣がつかないやうである。尙ほ、此處に行はれてゐる總ての事は、極めて演神的な事で、キリストの名によつて行はれてゐても、それは却つてキリストを罵つてゐるに等しいと云ふことなどには、皆は矢張り氣がつかないらしい。又、司祭が、會衆に接吻せよと持ち出した、七寶の浮彫のついた金の十字架は、キリストがかうした種類の儀式を非難したために處刑された時の刑具に型どつたものにすぎないと云ふ事が、誰にも判つてゐないやうであつた。又、キリストの肉と血とを麵麩と葡萄酒の形で、食つたり飲んだりしてゐると想像してゐる僧侶達は、單に葡萄酒や麵麩の破片のやうなものばかりでなく、基督の生ける分身に「これ等の可憐な人々」を籠絡したり、大なる祝福を彼等から奪つたり、最も慘酷な苦痛を彼等に與へたり、そして、キリストが齋らした大なる喜びの福音を却つて押し隠したりすることによつて、實際にキリストの肉や血を、食つたり飲んだりしてゐるのである——こんな考へは此處に列席した人々には誰の心にも這入つて來なかつた。

然し司祭は子供時代から、かうする事が眞の信仰であつて、昔から總ての聖者達がこれを行ひ教會はこれを保持し、國家も之を要求して來たのだと思ひ込んで育てられて來たので、全く自分の良心に従つてゐるやうに、平然として自分の務めを行つてゐた。彼も有繋に麵麩が肉に變ると云ふことや、色

々と澤山な言葉を繰り返すのが靈魂に必要であると云ふことや、實際自分が神の一片を飲み込んだのだと云ふ事などを信じてゐるのではなかつた。誰にも亦こんなことを信じられるものではなかつた。けれども、信じねばならないことだと云ふことを信じてゐた。殊にこの信仰を彼に最も強めさせた原因は、これを信仰してゐると、此の十八年の間一家を支へて、悴を高等學校に、娘を牧師の娘の通ふ女學校に通はせる事が出来る収入が得られたからである。助祭もそれと同じ意味で、司祭よりはもつと確固と信じてゐた、と云ふのは、此の男は、信仰個條の實質などは忘れて了つて、たゞ葬式や集會の祈禱者は、アカシタス（讚美歌の一種）を歌つても歌はなくても、信者達が喜んで支拂ふ確かな御布施が得られると云ふことを知つてゐるだけであるからだつた。それで、非常に得意になつて『惠ませ給へ、惠ませ給へ』と喚き立て、恰も薪や麥粉や馬鈴薯を賣る者が此の世の中には必要であると同じやうな確かさで、指命されたものを讀んだり喋つたりしてゐた。典獄や看守なども、此等の教理や、目前禮拜堂で行はれてゐる色々な事の意味を、了解してゐるが、随つて又贊成してゐる譯ではなかつたが、高官の者や、又は皇帝自身が信じてゐるので、矢張り自分達も信じなければならぬと信じてゐたのである。のみならず、彼等は漠然とはあるが（彼等自身にも何う云ふ譯だか説明出来なかつたが）此の信仰に依つて、自分達の残酷な職業が護られてゐるのだと思つてゐた。此の信仰がなかつたら、彼等が今現に行つてゐるやうに、平氣で民を苦めるのに全力を擧げると云ふ事は、一層困難で、恐らくは不可能であるかも知れない。殊に典獄は非常に優しい心の人なので、もし右のやうな信仰で支へられてゐなければ、今生きてゐるやうに生きてゐることは到底出来ないのだつた。そ

れで彼は、身動きもせずじつと立つたまま、首を垂れて、そして熱心に十字を切り、天使の歌が唱はれると、ひどく感動したやうな様子をして、子供達が聖餐を受けた時には、その一人を抱へて、自分の手で司祭の方へ差し出してやつたりした。

囚徒の大多數は、これ等の鍍金の像や、法服や、蠟燭や、聖杯や、十字架や、『最も美はしきエス』とか、『惠ませ給へ』とか云ふ、譯の判らぬ言葉の繰返しなどをしてゐる中に、現世及び來世に於て得らる可き澤山の御利益があるものと信じてゐた。たゞ二三の人だけが、此の信仰の歸依者の上に施された欺瞞を明かに見抜いて、心窃かに笑つてゐた。が、多數の者は、祈禱とか集會とか蠟燭とか云ふものに依つて、自分等の望む御利益を授けて貰はうと、種々の考へをし、然もその御利益が得られななくても、（祈禱には何時も何の御利益もなかつた）御利益のないのは偶然の事で、教育のある人達や、僧正などが有り難がるこの儀式は、よしや此の世では御利益がなくとも、兎に角來世の功德になる重大な大切なものだと思つてゐた。

マースロワも亦そんな風に信じてゐた。そして他の者と同じやうに、敬虔と退屈とが一緒になつたやうな氣持を感じてゐた。始めは、勾欄の背後の群集の中に立つてゐたので、自分達の仲間の外誰も見えなかつたが、やがて聖餐を受けるために群集が動き出した時、ファイヨードシャと一緒に前へ進み出ると、二人は不圖典獄を見たが、その背後にまた、看守等の中に交つて、極く僅かの顎髯を生やした、髪ちうほの美しい矮小ちうせうな百姓が立つてゐた。

これはファイヨードシャの亭主であつたが、彼は、自分の妻の顔にじつと眼を据ゑて見詰めてゐた。ア

カシタスを歌つてゐる間、マースロワはその男をしほくと眺めて、小聲で何か、フイヨードシャツと頻りに私語してゐたが、それでもみんなが十字を切つた時には、叩頭して十字を切つた。

## 四一

ネフリユードフは、朝早くから家を出た。近在から出た百姓達が歩道に沿ふて、荷馬車を賑らせながら、一種妙な商賣聲を上げて、「牛乳、牛乳、牛乳」と呼び歩いてゐた。

昨日始めて生暖い春雨が降つたので、敷石の敷いてない地上には何處にでも、草が青々と萌え出し、庭の樺の樹はさながら緑の綿を撒き散らしたやうに見え、山櫻や白楊樹はその長い芳ばしい葉を開き、そここの店や住家などの窓々は、二重の窓枠を取り外して、綺麗に拭いてあつた。通り道のトルクウチイ市場まで行くと、立ち並んだ露店に沿うて、夥しい人の群れが波打つて、汚い扮装の人々が、兩脇に飾靴を抱へ、肩には火熨斗のかゝつたズボンや胴衣を懸けて、それ等を競賣つて廻つてゐた。

丁度日曜日なので、工場を休んだ男達は、瀟洒とした着物に、テカテカと光る長靴を穿き、女達は、華美な絹の手巾を頭に巻き、黒玉で縁飾りをした羅紗のジャケツを着て、もう居酒屋の入口のあたりにそれ等がうろ／＼と集つてゐた。黄色い飾紐の附いた制服を着て、ピストルを佩けてゐる巡查達は、何か退屈まぎらしの出来事でも起らないかと、探し廻るやうにして警戒してゐた。並樹通りの小路や、新しく萌え出た草地には、子供や犬が戯れながら駆け廻り、附添ひの保母達は、傍の椅子に凭つて樂しさに喋つてゐた。日陰の方はまだなま／＼と湿つてゐるが、中央のもう乾き切つてゐる街路

には、重い荷馬車が、絶え間なく駛けて行き、馬車は縦横に馳せ違ひ、鐵道馬車は鈴を鳴らして過ぎてゐた。鳴り響く教會の鐘の音は、空氣を顛せて、今丁度監獄でも行はれてゐるやうな禮拜式に、人々を招き集めてゐた。そして、日曜日の晴衣を着飾つた人々は、思ひ／＼にその所屬の教會へと道を急いでゐた。

ネフリユードフを乗せた辻馬車は、監獄までは行かずに、監獄へ行く最後の曲り角で駐まつた。

種々な人々——男や女が——大方皆、小さい包を小脇に抱へて、監獄から百歩ばかりの此の曲り角の所に立つてゐた。右側には、低い木造の家が數軒建ち並び、左側には、看板をかゝけた一軒の二階家があつた。そして正面に宏大な煉瓦造りの聳えたのが即ち監獄であつた。けれども、面會人は、すぐ其處へ近づいて行くことを許されなかつた。門衛が始終その前を往つたり來たりしてゐた。通り抜けようとする者があると叱り飛ばしてゐた。

右側の木造家屋の門の所には、丁度衛兵と向ひ合つて、金筋の入つた制服を着て、手に手帳を持つた一人の看守が椅子に腰掛けてゐた。面會人達がその男の傍に行つて、會ひ度いと思ふ人の名前を告げると、彼はそれを書き付けてゐた。ネフリユードフもその傍へ行つて、カテリーナ・マースロワの名前を告げた。看守はその名を書き附けた。

「何故まだ面會を許されないのです」とネフリユードフは訊ねた。

「今禮拜があるので、濟んだらすぐ許されませう」

ネフリユードフは、待ち疲れてゐる多くの面會人から離れて立つてゐた。皺になつた帽子を被り、顔一杯斑點のある、汚い扮装をした、跣足の男が、ふと、群集から離れて監獄の方へと歩み寄つた。「コラッ何處へ行くのだ？」と、銃砲を持った衛兵が叫んだ。「何をほざきやがるんだ」今のごろつきは衛兵の言葉位には少しも驚かないで、然し後戻りしながら答へた。「いゝよ、入れなきや、待つてゐるばかりさ。だが、何も、御大將にでもなつた氣ではざく必要はないんだ」

群集は態を見ろと云ふやうにとつと笑つた。面會人等は、大方皆みすほらしい扮装をした者ばかりで、中には、襪襦を着たものさへあつたが、また中には、尊敬されるやうな扮装をした男や女もあつた。ネフリユードフの次ぎには、顔を綺麗に剃つた、がつしりした、赤ら顔の男が、何か下着らしいものを包んだ小包を抱へて立つてゐた。ネフリユードフは、此處へは初めて來たのかとに訊ねた。するとその男は、日曜日毎に來ると答へた。それをきつかけに二人は、色々話を交し始めた。或銀行の門番で、貨幣贋造で捕縛された兄弟に會ひに來るのだつた。お人好しの此の男は、自分の色々な身の上話をすつかりネフリユードフに語つて、それから今度は、ネフリユードフに訊かうとした時、一人の學生らしい男と、覆面紗を被つた若い貴婦人とが、筋骨逞しい純血種の馬を驅つて護謨輪の馬車に乗つて來たので、二人の注意はそれに引きつけられて了つた。この學生は、大きな包みを抱へて來た。ネフリユードフの傍へ近づいて來て、何うしたら四人一同へ此の持つて來た麵麩を差入れることが出来るかと訊ねた。

この學生の約婚の女が（一緒に乗つて來た貴婦人は彼の許婚であつた）それを望み、又その女の両親も四人に卷麵麩を差し入れるやうにと忠告したのであつた。

『私も初めて此處へ來ましたのですから』と、ネフリユードフは云つて「よく存じませんが、あの人にお聞きになつたら判ります」と、金筋入りの制服を着て手帳を持つて、右手の方に腰掛けてゐる看守を指さした。恚う話してゐる中に、小窓のついてゐる大きな鐵の扉が開いて、制服を着た一人の士官が、他の看守を連れて出て來た。手帳を持った看守は、これから面會人の入監を許すと皆で云ひ渡した。衛兵が傍へ寄ると、すべての面會人は、さながら遅れてはならぬと心配するかのやうに、れ先きにと争つて扉の方へ押し進んだ。扉の傍にも一人の看守が立つてゐて、面會人が這入つて來るのを一つ一つ數へながら、十六、十七、云々と聲高に叫んでゐた。建物の内側にもモウ一人看守が立つてゐて、面會人が第二の扉を這入つて行く時、一つ一つそれに手を觸れて數へてゐた。それで、面會人は一旦這入つても、再び皆が出る時は、一人でも居残る者があつたらすぐ判るし、又その時、一人の囚人も逃げ出すことは出来なかつた。看守は、別に顔を見ることなしにたゞ手を觸れるだけであつたが、ネフリユードフが這入つて來た時も、同じくその肩を叩いた。ネフリユードフは、その看守の手で觸られた時、何となく厭やな感じがした。然し、彼が此處へ來た理由を考へると、不満に感じたり立腹した事を深く耻ぢ入つた。

入口の扉の陰の最初の部屋は、鐵格子の篋つた小さな窓の幾つもある大きな圓天井の部屋であつた。集合室と呼ばれてゐる此の部屋に、大きな十字架の基督の像があるのを見てネフリユードフは喫驚し

た。

『どうして恁麼繪を此處に飾つて置くのだらう』と、彼は思つた。恁うした題材の繪を見ると、何うしても自由の聯想が起るばかりで監禁囚縛と云ふやうなことは結びつけて考へられなかつた。

彼は、急ぎ周章てる面會人達を先きへやつて、その後から徐かに従いて行つたが、此の建物の中に收監されてゐる罪人の怖ろしさや、カチユードフや昨日の青年のやうに罪なくして、囚はれねばならぬ人に對する憐憫や、それからやがて愈々カチユードフと面會するのだと思ふと、恐ろしいやうな恥かしいやうな感情が湧き出て来て、それ等が混雜こまじになつて、胸がワク／＼するのを覺えた。集合室の彼方の端に立つてゐる看守が、多勢の通る時、何か言つたやうであつたが、自分自身の考へに氣を取られてゐたネフリユードフはそれには別段注意もせず、たゞぞろ／＼と崩れ行く面會人の中に交つて押され／＼して、ツイうっかり女囚徒の方へは行つて了つた。

愈々夢中になつて争つてゐる面會人達を遣り過して置いて、ネフリユードフは一後番から面會室へ這入つて行つた。彼が此の部屋の扉を開けると、一時にワツと叫ぶ數百の聲が耳を聳せんばかりに喚き立つたので喫驚してたが、一體何のことだかすぐには理由も判らなかつた。然し、近づいてよく見ると、其處に集つたすべての者はさながら砂糖に集つた蠅のやうに、此の部屋を二分してゐる金網に、びたりと喰附いてゐるのだつた。それで始めて意味が判つた。彼が這入つて来た戸口の向ふ側には幾つかの窓があつたが、部屋の中は二分されて、床から天井へ張り詰めた二枚の金網で區劃されてゐた。そしてその二枚の金網の間は、七尺ばかり隔つてゐて、その間を數名の兵士が行つたり來りして

歩いてゐた。あちらの金網には囚人達が喰附いて居り、こちらの金網には面會人が喰附いてゐた。彼等の間には、二重の金網があつて、それが更に七尺も隔つてゐるので、お互に物を手渡しすることも出来なければ、近眼の者ならば、向ふ側の者の顔をはつきり認めることも出来なかつた。互に話するのも困難で、よく判るやうに話すには、大きな聲で叫ばねばならなかつた。

兩側には、金網にびたりと顔を押しつけて——妻、良人、父、母、子供、などの顔が、互に姿を見ようとし、又何うかしてよく判るやうに用談を話さうとあせつてゐた。

然し、各自に皆、その話しかけてゐる相手に判らせようとし、その隣りの者もまた同じやうにするので、彼等は勢ひ、出来るだけ聲を張り上げて、他人の聲を消さうとするのだつた。ネフリユードフが最初這入つて來た時、驚かされたのは、つまり恁うした叫び聲が湧き起つてゐたので、そのため誰の言葉も何が何やら薩張り判らなかつた。で、皆は相手の云つてゐることをよく聞き分けるのが、實際不可能であつたから、たゞその顔と相手との關係によつて、大方恁うだらうと推測するだけであつた。ネフリユードフの隣りには、頭にハンケチを卷いた老婆が金網にびたりと喰附いて、顔を震はせながら、髪を半分削り落した蒼緹めた顔の若者に何か頻りと叫びかけてゐた。若者は眉を上げながら熱心にそれを聽いてゐた。その老婆の傍には、百姓服を着た一人の若者がゐて、何だか不満さうにかぶりを振りながら、自分と同じ年頃の男囚と云ふことに耳傾けてゐた。その次ぎには、襤褸を纏つた男が、腕を振つたり笑つたりして叫んでゐた。その隣りには、立派な羊毛の肩掛カシマをかけた女が、前膝に赤坊を抱へたまゝ、床の上に崩れるやうに坐つて泣いてゐた。女は慥か、始めて面會に來て彼方側

に獄衣を着て、髪を削り落してゐる變り果てた男の姿を見付けたのらしかつた。その女の次ぎには、屋外でネフリユードフに話しかけた銀行の門番がゐた。その男は向ふ側の灰色頭の囚人に精一杯の聲で何か叫んでゐた。

ネフリユードフは、自分もかゝる状態のもとに話さなければならぬかと思ふと、かゝる状態を作り、且つこれを強ひる人々に對する反感がむら／＼と起つて來たが、然し憚うした恐ろしい状態に置かれても、なほ誰一人として、この人情に對する暴虐を憤つてゐるらしい風も見えなかつたので、彼は更に驚いた。兵士も、廷吏も、そして囚徒自身ですら、さながらこれは當然であるかの如く振舞つてゐた。

ネフリユードフは、つくづく自分の力の頼みがたないこと、世の中と相容れざることなどを思つて、妙に氣が減入り込むやうに感じながら、約五分間ばかり此の部屋に留つてゐた。丁度船に酔つたやうな一種不思議な道徳的な感覺にフラ／＼と眩暈がするのだつた。

四二

「だが、此處へ來た用事は濟まさなければならぬし」と、彼は元氣を引き立てゝ云つた。  
「ところで何うすれば好いかな」

彼は、誰か廷吏はゐるかとおたたりを見まはした。すると士官の制服を着た一人の瘦せた小柄な男が群集の背後を往つたり來たりしてゐるのを見附けたので、それへ近づいて行つた。

「少々御訊ねしますが」と、彼は、非常に丁寧なものごしで云つた。「女囚はどちらに置いてありますか？ それから面會は何處で許されませう？」

「女囚の方へ被來るのですか」

「えゝ、女囚の一人に會ひ度いのですが」と、ネフリユードフは、尙ほ丁寧な様子で云つた。

「それは最初此處へ御這入りになる前に仰有ればよかつた。然し誰です、御會ひになり度いと云ふその女は」

「カテリーナ・マースロワと云ふのです」

「國事犯ですか？」

「いえ、たゞ——」

「そして、宣告済みですか」

「えゝ、一昨日宣告されましたのです」

ネフリユードフは、親切らしいこの獄吏の機嫌を損ねまいとして、物柔かに答へた。

「では、女囚の方へなら何うが此方へ」と、その獄吏は、ネフリユードフの様子から推して屹度人派な人に相違ないと心に決めながら云つた。「シードロフ君、この方を女囚の方へ案内して呉れ給へ」と、彼は胸に勳章をつけた鬚のある伍長の方を振り向いて云つた。

「はア、承知しました」

この時、金網の傍から、胸の裂けるやうな聲で、誰か歎息り上げてゐるのが聞えて來た。



ネフリユードフには、此處の何も彼もが一種異様なものに思はれるのだつたが、就中、自分でも最も不思議に感じたのは、典獄や看守長を初め——即ちこの建物の中で残酷な行ひをしてゐるすべての者へ、手敷をかけた義務を感じ、且つ御禮まで云はねばならぬと云ふことであつた。

伍長は、ネフリユードフを案内して、男囚の部屋から廊下へ出て、それを真直ぐ通り越して、向ふ側の扉を開け、女囚の面會室へと導いて行つた。

この部屋も、同じく二重の金網で區劃されてゐたが、男囚の面會室よりはすつと手狭であつた。そして、面會人や囚徒の数も遙かに少なかつたが、叫びたてる騒ぎは、男囚の面會室と同じであつた。金網の間は、矢張り同じやうに看守が歩いてゐたが、然しこゝのは、袖に金筋の入つた青い縁付きのジャケットを着て、青い帯を締めてゐる女看守であつた。此處でも、男囚の面會室と同様、面會人と囚人とがその兩側の金網にびたりと密着してゐた。こちらの金網には、色々な扮装をした町の人、彼方の金網には、白い獄衣を着たのや、色物の娑婆の衣服を着た囚人がゐた。金網は、それに密着してゐる入々で、もうすつかり場所を塞がれてゐた。で、中には、他の者の頭越しに怒鳴らうとして爪立つてゐる者もあり、床に蹲踞んで話してゐる者もあつた。

女囚の中で一番目に立つたのは、キイ／＼聲を上げる妙な風采の、瘦せこけて髪を振り亂したジブシーであつた。その女は縮毛の頭からハンケチをすり落して、囚人側の中央の柱の近くに立ちながら、面會人側の、腰の下に緊く帯を締め、青い上衣を着て、目眩らしい身振りをしてゐるジブシーの男に何か叫んでゐた。ジブシーの男の次ぎには、一人の兵士が蹲踞んで何か囚人と話をして居た。その兵卒

の次ぎには、金網にびつたり身を寄せて、綺麗な髭をはやし、顔をほつと染めた若い百姓が、涙をじつと耐へながら立つてゐた。髪の方々した、美しい顔の女囚が輝いた青い眼をして、彼に話しかけてゐた。此の二人は、即ちフィヨードシャと、その良人とであつた。彼等の次ぎには、一人のごろつきが顔の大きい女と話してゐた。その次ぎには二人の女、その次ぎは男、それからまた女で、各自の前には、一人宛の囚人が向ひ合つてゐた。マースロワはその中にはゐなかつた。然し囚人の背後の窓際に誰かしら立つてゐたが、ネフリユードフは、それが彼女であることを直ぐ知つた。彼はどきりとして心臓が早鐘のやうに打ち出し、そして息が塞まりさうに覺えた。愈々絶對絶命の時が近づいて來たのであつた。彼は金網の所まで行つて彼女を見た。彼女は、フィヨードシャの背後に立つて、フィヨードシャが何か話してゐるのを聞きながら、につこり笑つてゐた。彼女は、今日は獄衣を着ないで腰のあたりを帯で確り締め、胸を一杯ふくらました白い衣服を着てゐた。そして、ハンケチの下からは、法廷で見た時と同じやうに、眞黒な縮れた前髪がこぼれてゐた。

『さア今すぐ決めて了はねばならぬ』と、彼は思つた。『こちらから呼ばうか、それとも向ふから聲をかけるかしら？』

マースロワはベルタを待つてゐるのだつた。それでネフリユードフが尋ねて來ようなどは思ひもしないことであつた。

『あなたは、誰にお面會なさるのですか』と、金網の間を歩いてゐた女看守がネフリユードフの傍へ來て訊ねた。

「カテリーナ・マースロワ」と、ネフリユードフはもじくして答へた。

「カテリーナ・マースロワ、面會の人だよ」と、女看守は叫んだ。

マースロワはあたりを見廻して、頭を仰向きやうに上げて、胸を突き出し、よく見覚えのあるイッくとした表情をして、二人の囚人の間へ割り込んで、金網の傍にやつて来たが、喫驚したやうな、不思議さうな顔をして、じつとネフリユードフを見詰めた。然し、その服装から推して、彼が金持ちであることと云ふことを知ると、彼女はにつこりとした。

「私に會ひ度いと有仰るのはあなたですの？」と、彼女は、金網の近くへ、少し斜視の眼をした笑顔を突き出して訊ねた。

「僕だよ。僕が會ひたいんだ、僕は本當に會ひたかつた。僕は……」と、彼は、常のやうに大きな聲では話さなかつた。

「馬鹿を云ふないッ」と、彼の隣りに立つてゐるごろつきが叫んだ。「取つたのか、取らねえのか」「ひどく弱つて、死にかゝつてるんだよ」と、彼方側から誰か他の者が叫んでゐた。

マースロワは、ネフリユードフが何を云つてゐるのだから判らなかつたが、然し、彼が言つた時のその顔の表情は、彼女がこれまで思ひ出すまいとしてゐた或事を、不圖思ひ出させたのであつた。すると彼女の顔からは微笑が忽ち消え去つて、深い苦悶の皺が顔に現れて来た。

「何を有仰つてるのか判りません」と、彼女は更に一層眉を擧めながら叫んだ。

「會ひに来たのだ……」と、ネフリユードフは云つた。

「さうだ俺は自分の義務を果してゐるのだ。懺悔をしてゐるのだ」と彼は思つた。そしてかう思つて来ると、涙が込み上げて来て、咽喉が塞るやうに感じた。で、両手で金網をしつかり攫んで、涙を落すまいとした。

「あの女が壯健なら来やしねえよ」と、こちら側の向ふの方でまた誰か叫んだ。

「神様が證人だよ、妾ア何にも知らないよ」と、あちらの網の中から一人の女囚が叫んだ。マース

ロワは、ネフリユードフの亢奮した容子をじつと見てゐる中に、男が誰であるのかやつと氣がついた。

「あなたは、あの……いゝえ、わたし誰方だかちよいと思ひ出せませんもので」と、彼女は、ネフ

リユードフを見ないでかう云つた。そして、彼女のほんのりと赤かつた顔は次第に曇つて行つた。

「僕はお前に許して貰ひに来たんだ」と、彼は、日課を暗誦するやうに、高いが然し素氣ない聲で云つた。

が、此の言葉を云ひ終ると、何だかどきまぎして、彼はあたりを見廻した。然し直ぐとまた、自分が恥を感じるのは當然の事だ、自分はしみじみと恥を感じねばならぬと云ふ考へになつて、彼はやはり聲高く叫び續けた。

「何うか許して呉れ、僕はお前の身を飛んでもなく誤らして了つた」

マースロワは、身動きもせず立つたまゝ、斜視の眼でじつとネフリユードフを見詰めてゐた。ネフリユードフは言葉を續けることが出来なかつた。それで金網から離れて歩み出しながら、こみ上げて来る獻敵の聲を抑へようとした。

ネフリユードフを女囚の面會室の方へ案内させて置いて、それに興味をそゝられたらしい典獄と士官とが其處へ這入つて來たが、ネフリユードフが金網の傍にゐないのを見ると、何故面會を請求した女に話しかけないのかと訊ねた。ネフリユードフは涙を飲んで、身震ひをし、それから靜かに落ち着いた様子を、云つた――

『この金網が邪魔になつて、何も聞えませんが――』

すると、典獄はちよつとの間考へてゐるが『では、少しの間でしたら、此處へ呼び出してかまいません……マリヤ・カルローウナ』と、彼は女看守を振り返つて、

『マースロワを外へ出せ。』

## 四三

間もなくマースロワが横開の戸口から出て來た。徐かに歩んで、ネフリユードフの傍まで來ると立ち止まつて、眉の下からじつと彼を見上げた。二日前と同じやうに、彼女の眞黒な髪は顔のところ縮れて蔽ひかゝつてゐた。

顔は、病人らしく腫くんでゐたが、如何にも魅力に富んで落ちつきがあつて、輝かしい黒い眼は訝しげに張れほつたい眼瞼の下から光つてゐた。

『此處で御話しなさい。』と云つて、典獄は傍へ退いた。ネフリユードフは、壁際の座席の方へ行つた。

マースロワは、怪訝な顔付をして典獄を見送り、それから、喫驚して肩をすくめ、ネフリユードフに跟いて腰掛の方へ行き、裾を捌いて彼の傍に腰を下ろした。

『助辨し難いのは判つてゐるが……』と、ネフリユードフは云ひかけて口を噤んだ。涙がこみ上げて來たのだつた。『過ぎ去つた事は、もう何うにも出來ないが、これからは自分に出來る限りのことはしようと思ふが、何うだね――』

『何うしてわたしを見附けなさいました。』と、マースロワは、ネフリユードフの言葉には答へないで、斜視の眼で男の顔を見るでもなく見ないでもないやうにしてかう云つた。

『お、神よ、私を助け給へ、何うすれば宜いのか教へて下さい。』と、ネフリユードフは、變り果てた、そして、今でも、少しも楽しさうな様子の微塵もない女の顔をしげくと見守りながら、心の中と思つた。『僕は一昨日陪審員として出てゐるが。』と彼は云つた。『お前は氣がつかなかつたかい？』

『え、氣が付きませんでした。氣の附く暇もありませんでしたもの。まるでお顔も見ませんでした。』と、彼女は云つた。

『お前には子供があつたんぢやなかつたかい？』と彼は訊ねながら、ほうつと自ら顔のほてるのを感じた。

『え、ありませんけど、幸ひなことに、すぐ死んで了ひました。』と、マースロワは、外方を向いて、突慳慳に毒々しく答へた。

『何うして、何故だい。』

「あの時は、私がもう死にさうな病氣でしたもの。」と、彼女は矢張り眼を伏せたまゝ云つた。

「伯母達は、何う云う理由でお前に暇を出したのだい。」

「誰だつて、お腹のふとい奉公人をかゝへては置かないでせう。あの方達は、それが判るとすぐ暇を下さいました。ですけど、もうこんな事、話す必要はありませんわ、わたし何も彼もすっかり忘れてしまいましたの、みんな済んで了りましたことですもの。」

「いや、まだ済んで了らない。僕は自分の罪の償をしたいと思つてゐる。」

「何もそんな償つて頂くやうな罪はあなたにありませんわ、あつたことはあつたことで、それはもう過ぎ去つて了りました。」と、彼女は云つた。そして、思ひがけなくも、彼女はじつとネフリユードフを見て、不気味なそゝのかすやうな、そして憐みを乞ふやうな微笑を洩らした。

マースロワは、二度と再び、ネフリユードフと邂逅はうとは夢にも思はなかつた。然も今日、かう云ふ所で遣はうとは尙更考へつかないことだつた。所が彼女は、最初ネフリユードフだと氣が附いた時、思ひ出すまいと願つてゐた其の記憶を何うしても抑へ止めることが出来なかつた。その最初の瞬間に於て彼女は、直ちに混亂しながら、昔互に思ひ思はれた美しい青春によつて開かれた、あの新しい不思議な情と義理の世界を思ひ浮べて、それから、男の思ひがけない、解し難ない無情な残忍と、あの怪しい夢のやうな悦びなどが續々續いて流れて來た、長い、憂き艱難とを憶ひ起した。そして胸が張り裂けるやうに覺えた。けれども何故さうだか、それを解くことも出来ないで、彼女はいつも爲慣れて來たやうに、此等の憶ひ出を、墮落した生活の霧の中に封じ込んで了つて、その追憶から身を脱

れようとした。初め彼女は、今自分の傍に腰掛けてゐる此の男と、嘗て戀した青年とを結びつけて考へようとしたが、それも彼女には矢張り苦痛に思はれたので、再びそれを引き離して全く別な人間にして了つた。今此處に、鬚香水を匂はして、寸分の隙もなく、立派に着飾つてゐる此の紳士は、彼女が嘗て戀したネフリユードフと云ふあの純な美しい人ではもうなかつた。今はたゞ、彼女自身のやうな動物を必要とする時、それを使用する人間の一人であつた。その代りこちらでも、此のやうな人間に對しては、彼女自身のやうな動物は、出来るだけお金を絞り取るために相手を利用しなければならなかつた。で、今彼女が、媚びるやうな微笑をもつて彼を見たのは、そのためであつた。彼女は、何うしたら最もよく彼を利用することが出来るかと云ふことを考へながら黙つてゐた。

「もうすつかり何も彼も済んで了つたことですよ。」と、彼女は云つた。「わたし西伯利亞へ遣られま

すのよ。」この恐る可き言葉を云つた時、彼女の唇はふる／＼と震へた。

「さうだつたね、お前に罪のないことも僕はよく知つてゐるんだ。」とネフリユードフは云つた。

「罪ですつて！無論わたしには、盗人や追剥ぎのやうな罪なんかありません、辯護士さんに頼めば何うにかなるつて云ひますけれど。」と、彼女は續けた。

「控訴もきくさうですけど、たゞお金が大變要るつてますから。」

「むゝ、それは確かにさうだよ。」と、ネフリユードフは云つた。「それで、僕はもう辯護士にその事を頼んで置いた。」

「お金を取らなくても可いんでせうか、屹度その方は善い人ですわね。」と、彼女は云つた。

「僕は出来るだけの事をするんだよ。」

二人は黙つてゐたが、やがて彼女は、再び前と同じやうな笑ひ方をした。

「それからわたし、あなたに御願ひがあるんですが……もし何ならお金を少し……澤山ぢやありません……十ルーブリ。」と、彼女は唐突に云つた。

「よし、く。」と、云つて、ネフリユードフは、ドギマギしながら紙入れを捜した。

此の時マースロワは、部屋の中を住つたり來たりしてゐる典獄をじろりと見た。

「あの人の前で出さないやうにして下さい。取られつちまいますから。」

ネフリユードフは、典獄があらを向くや否や、紙入れを取り出したが、すぐ又こちらを向き直つたので、紙幣を渡す暇がなくて、そのまゝ手の中に握り込んで了つた。

「この女はもう死んでゐるのだ。」と、女の顔を見ながら、ネフリユードフは思つた。昔ては美しくつたその顔も、今は汚れて脹んで、黒い斜視の眼の中には、怪しげな光がきらめいてゐる。

ネフリユードフの手の紙幣と、典獄の容子とをかたみはりにキョロ／＼見てゐるのだつた。ネフリユードフは暫くの間ためらつてゐた。昨夜彼の耳に囁いた誘惑者が再び聲を上げて、内生活の世界から、外生活の世界へ——つまり、偽なければならぬと云ふ問題から、その結果は何うなるか、何うするのが實際的であるかと云ふ問題へ彼を誘き出さうとした。

「恚麼女と、何もしてはならない。」と、その聲は云つた。「たゞお前の頸に石を結び付けるやうなものだ。その石は、お前を溺らせ、他の者へもつと有益なことの出来るお前を妨げるだらう。お前が其

處に持つてゐる金をすつかりその女に與つて了つて、別れて、永久に手を切つて了つたがよくはないか。」と、その聲は囁くのだつた。

けれども彼は、尙ほその瞬間に、彼の靈魂には、最も重大な成事が起つてゐることを感じた——つまり彼の内生活は、平衡に動いてゐたので、それがため、極めて微かな努力を加へても、それはすぐ何方へか傾くのであつた。で、彼は、昨夜その出現を感じた神の助けに依つて、此の努力を爲しようと

した。神は立所に答へた。それで彼は、今直ぐ何も彼も一切彼女に打ち開けて了はうと決心した。

「カチユーシヤ、僕はお前に勘辨して貰ひに來たんだが、お前は何とも云つて呉れないね。許してお呉れかい？それとも、今でなくとも何時かは許して呉れるのかい？」と彼は訊ねた。

マースロワは、それには耳をかさずに、ネフリユードフの手元と、典獄の様子とを見詰めてゐた。

そして、典獄があらを向いた時、素早く手を伸ばして紙幣を引奪り、それを帯の間に隠して了つた。

「可笑しいのね、何を有仰つてゐるんだか。」と、彼女は莫迦にしたやうな笑ひ方をして云つたやうに、

ネフリユードフには思はれた。

ネフリユードフは、彼女の魂の中には、飽まで自分に敵対しようとするもの、現在の如き淺ましい彼女自身をかばはうとするもの、そして彼女の心の中に深く食ひ込まうとする自分を寄せつけまいとするものなどのあることを知つた。けれども、不思議なことに、それは彼の勇氣を挫かないで、却つて或新しい特殊な力で愈々彼女の方へ引き入れさせるのであつた。彼は、カチユーシヤの心を覺ま

つて或新しい特殊な力で愈々彼女の方へ引き入れさせるのであつた。彼は、カチユーシヤの心を覺ま

させてやらねばならぬと云ふこと、またそれは怖ろしく難しいと云ふことを知つてゐた。けれども、その難しいと云ふことが、愈々彼に勇氣を振り起させた。彼は、これまで彼女に對しても、又他の何んな人に對しても決して感じたことのない程のものを、今の彼女に對して感じるのであつた。此の感情の中には、少しも利己的な心はなかつた——彼は、自分自身のために、彼女から何も求めてゐるではなかつた——彼は、たゞ、彼女が今のやうな状態から遁れ、再び眼を覺して昔のやうな女になつて呉れることをのみ願つてゐたのであつた。

『カチューシャ、何故お前はそんなことを云ふのだい。僕は、よく覺えてるよ。バノーヴォー・ネフリフの伯達(領地の名)の昔のことを。』

『そんな過ぎ去つて了つた事なんか思ひ出しなすつて、何うなさいますの?』と、彼女は素氣なく云つた。

『お前の一生を取りかへしたいと思つてさ。罪を償ふために。』それから尙ほ彼は、彼女と結婚して可いと云はうとしたが、その時、ふと彼女の眼と出合ふと、その中に恐ろしい、陰險な、反抗的な何物か見えたので、彼は、もう後を云ひ續けることが出来なかつた。

此の時、面會人達は、そろ／＼歸りかけた。典獄はネフリウドフの傍へ来て、もう時間が切れたと云つた。

『さやうなら。まだ話したいことが澤山あるが、もう時間が切れたさうだから駄目だ。』と云つて、彼は手を出した。

『俺はまたくるよ。』

マースロワは、徐かに立ち上つて、其處を立ち去るやうな命令の來るのを待つてゐた。

『すつかり御話しになつたぢやありませんか。』

彼女はネフリウドフの手を握つたが、それは力強くではなかつた。

『いや、今度は何處か二人で話されるやうな所で、もう一度會はう。もつと／＼、是非云はねばならない肝腎な大切なことがあるんだ。』

『では、また被<sup>おと</sup>來い。かまはないことよ。』と、彼女は答へた。そして、お客の機嫌を取る時のやうな愛想笑ひをした。

『お前は私の妹以上なんだ。』と、ネフリウドフは云つた。

『何だか可笑しいわね。』と、彼女は再び頭を振りながら云つて、金網の陰へ這入つて了つた。

四四

面會する前までは、彼女が久しぶりに自分と會つたら、そして自分が彼女を救ひ出さうとする意志のあることを知つたら、彼女は、何處にか喜び、感動して、再び昔のカチューシャに立ち歸るだらうと、ネフリウドフは思つてゐたのであつたが、然し怖るべきことには、カチューシャはもう存在せず、その代りにマースロワがゐるのであつた。これが、ひどく彼を驚かし怖れさせたのである。

殊に最も彼を驚かしたのは、カチューシャが、自分の境遇を、それは囚人としての境遇ではなく(彼

女はこれを恥ぢてゐた。醜業婦としての境遇を、少しも恥ぢてゐないことであつた——彼女は、それに満足し、却つてそれを誇りにさへしてゐるやうであつた。尤もそれは無理もないことではあつた。誰でも、働くからには、自分の職業を大切な善良なものと思へなければならぬからである。それで、如何なる職業の者でも、一般に自分の職業を最も大切な善良なものと思はせるやうな人生観を作るのである。

盗賊や、殺人者や、間諜や醜業婦などは皆、自分等の職業を悪いものと認めて、心にはそれを恥ぢてゐるやうに、想像するのが普通である。然し事實は全くそれに反してゐる。一般の人間は、その運命や、又實際自分の犯した罪のために、如何やうな墮落した境遇に落ちようとも、尚ほ自分のその境遇を善良なもの、許す可きものと思はせるやうな人生観を作つて、その中に住んでゐられるものである。そしてその人生観を保つために、彼等は本能的に彼等の人生観や及び彼等自身の人生に於ける位置に對する見解を同じうする人々と一緒に結合する。盜賊がその機敏を誇り、醜業婦がその自墮落を鼻にかけ、或は殺人者がその残酷を自慢にすると聞いたら人々は驚くかも知れない。然しそれは、たゞ彼等の住んでゐる社會即ち空氣と云つたやうなもの、範圍が限られてゐるからで、そして殊にその主なる原因は我々がその圏外にあるからである。けれども我々は世の富豪がその富強——強奪を誇り、軍司令官がその戦捷——殺人を鼻にかけ、貴顕紳士がその権力——壓制を自慢する時、我々は矢張りそれと同じ現象を見ないであらうか。我々が此の人達の懐いてゐる人生観を少しも怪まないのは、たゞ彼等が形作つてゐる社會がより大きくて、我々自身もそれに屬してゐるからである。

マースロワが、彼女の人生観、彼女自身の境遇観を作つてゐるのも矢張りこれと同じ譯であつた。彼女は西伯利亞へ流される醜業婦ではあつたが、然も尚ほ彼女は、自分自身を満足させ、且つその境遇を誇りさへするやうな、人生に對する考へを持つてゐた。

彼女の考へに依ると、總ての男子——老人、青年、學者、將軍、教育ある者、無教育な者など——にとつて一番好いことは、好いたらしい女との肉的交易である。それで、總ての男は、他の事に心を奪はれてゐるやうな風をしてゐる時でさへ、實は、決して他の者を望んでゐるのではない。マースロワは好いたらしい女であつたから、男達の慾望を満足させるさえないは彼女の心次第であつた。その意味で、彼女もまた大切な人間であつた。そして彼女の前半生及び現在の生活は、すべてこの考への正しいことを證明するものであつた。

過去十年間の彼女の生活に於て、彼女は到る所であらゆる男——ネフリユードフや警察附きの老士官を初め、監獄の押丁に至るまで——が、悉く彼女に媚びをつけてゐるのを見た。それと云ふのはまた、彼女が自分に媚びをつけないやうな男は、見もしなければ注意もしなかつたからである。それ故、此の世界は、彼女にとつては、肉慾に飢ゑた人ばかりの寄合ひで、それ等の人々が、出来る限りの方法——手管、腕力、金、悪計などで、自分を得ようとしてゐるやうに思はれるのだつた。これがマースロワの解する人生観であつた。そして此の人生観によると、彼女は決して低級な者ではなく、非常に重要な人間であつたのだ。で、マースロワは、此の見解を何物よりも尊重した。尊重しない譯に行かなかつた。此の見解を失うと、此の見解によつてつながられてゐる自分の價値が失くなるからであつた。そ

して、その生活の意義を失うまいとするには、勢ひ彼女は、自分と同じやうな考へを持つた連中と伍して行かなければならなかつた。ネフリユードフが別の世界へ彼女を連れ出さうとするのに氣附いて、彼女がそれを拒んだのは、もうすつかりそれに落ち着き切つてゐる、人生に於ける自分の位置を失はなければならぬと云ふ事を見越したからであつた。かうした理由で彼女は、その少女時代や、ネフリユードフと始めて關係した頃の思ひ出から遁れようとするのであつた。此等の思ひ出は、世間に對する彼女の現在の考へとは氷炭相容れないものであつた。それで彼女は、その記憶をすつかり叩き出して了つたのである。いや寧ろ、何處か觸<sup>さわ</sup>られない所にそれを埋めて、恰も蜂がその勞働の結果を保護するために、時とするとその幼蟲の巢を塗り籠めて了ふ如く、その記憶が出て來ないやうに、それを密閉し塗り籠めたのであつた。それで、今のネフリユードフは、彼女が嘗て、純な心で戀した人ではなくなつて、彼女が利用しまた利用せねばならぬたゞの金持ち紳士に過ぎなかつた。そして、彼との關係は、普通一般の男に對すると同じやうなものにすぎなかつた。

『失策<sup>しさく</sup>つた。大事なことを云ふのを忘れて來た。』他の面會人と一緒に出口の方へ行きながらネフリユードフは考へた。『彼女と結婚しよう<sup>おれ</sup>と云ふことを云はずに來た。云はずに來たが、然し何うしても結婚しよう。』彼は尙ほ恚<sup>いら</sup>う考へた。

戸口には二人の看守がゐて、一々手で叩きながら、再び面會人の數を數へて、外へ出してゐた。それで、餘分の人一人も外へ出ることも出來なければ、また一人も内に残ることは出來なかつた。今度は肩を叩かれてもネフリユードフは怒らなかつた。まるでそれには氣もつかなかつた。

## 四五

ネフリユードフは、彼の外部生活をすつかり改革する心算で、僕婢には暇を出し、大きな邸宅は人に貸して、自分は下宿に引き移りたいと思つたが、アグラフェーナ・ベドロウナが、冬にならないうちに手を着けても駄目だと思つて、色々その理由を指摘した。如何にも夏の間は、誰も市中の邸宅を借りる者もなく、また引き移るにしても、家具を入れる場所を捜さねばならなかつたので、折角生活様式を變へようとする彼の努力もすつかり無効になつた。(彼は理想生活のやうにもつと簡単に生活する心算であつた)。そして、すべての事が、まゝだつたばかりでなく、却つて家の内には突然新しい活氣が溢れて來た。羊毛や獸皮で作られた物などは、すつかり蟲干しをして塵拂<sup>はたき</sup>をかけるために持ち出された。門番や小僧や賄方や、コルネイ自身までが、手傳ひに出た。誰も用ひたことのない種々<sup>いろいろ</sup>な珍らしい毛皮や、禮服なども引き出されて、釣り紐にかけられた。それから敷物や家具類も運び出されて、門番や小僧などが甲斐なくしく袖をまくつて逞ましい腕を露はし、一齊に拍子をとりながら、これ等の物に塵拂をかけた。部屋はナフタリンの香ひで一杯だつた。

ネフリユードフは、庭へ出たり、室から覗いたりして、その光景を見てゐたが、殆ど無駄な我樂多道具の多いのに驚いた。實際それ等の道具は、アグラフェーナ・ベドロウナや、コルネイや、門番や小僧や、賄方などに、たゞ運動をさせるだけの役にしか立たないものばかりだと、ネフリユードフは思つた。



「だが、今自分の生活様式を變へてもつまらない、マースロワの事件が決らなくては。それにこれはちよいと中々難しい事だ。あの女が釋放されるか、それとも愈々追放されるかして、何れ自分が、あの女と進退を共にするやうになれば、自から生活は變つて行かう」と彼は考へた。

約束の日に、ネフリユードフは、辯護士フアナリーンのすばらしい構への邸宅に馬車を驅つた。邸内には、大きな棕櫚や、その他種々の植物が配置よく植え込んであつた。窓には目も綾な立派な帷帳が掛けてあつた。

實際、その高價な贅澤な品々を見ると、此處には澤山な遊金のある事や（勿論勞働に依つて得た金ではない）俄か分限者である事などが判る。應接間には、丁度醫者の玄關同様、心配さうな顔をした多くの人々が、接待の繪入り新聞を載せてある卓の傍に腰掛けて、辯護士に會ふ自分達の順番の來るのを待つてゐた。その部屋の高い机に向つてゐた書記は、ネフリユードフが這入つて來るのを見ると、すぐ取り次がうとして立ちかけた。そして、書記が屏の所まで行くと、その途端扉が開いて、高調子な活々とした聲が聞えて來た。それは、赤ら顔の鬚の濃い、そして仕立卸しの服を着た、巖丈な中年の商人と、フアナリー自身自身の聲であつた。二人の顔には、今丁度餘り性質のよくない金儲けの取引を済ました人によくあるやうな表情が浮んでゐた。

「それは君自身の失策だよ、判つてませう」  
フアナリーンは微笑しながら云つた。

「我々も天國には行きたいんだが、ツイ／＼悪い事がしたいんでね」

「さう／＼、誰でもよくそれは判つてゐるんだがね」と、二人は、態とらしく笑つた。

「やあ、ネフリユードフ公爵！さあ何うぞ御這入り下さい」フアナリーンは、彼を見ながら怒う云つて、もう一度商人の方へ會釋し、それからネフリユードフを自分の事務室へ案内した。事務室は隅から隅まで整然としてゐた。

「紙頁は如何です」ネフリユードフと差し向ひに掛けながら、辯護士は、包み切れぬ思ひ出し笑ひを無理に抑へて云つた。彼は、今済ましたばかりの取引がうまく行つたので、尙ほそれが嬉しくてたまらぬ様子であつた。

「有り難う、私は、あのマースロワの件で参りましたが」

「はあ、さうでした、すぐ始めませう。然し何うです、あの肥つた金袋の奴郎は、あなたも今御覽になりましたでせう。彼奴ね、千二百萬からの財産を持ちながら、口のきゝ方も何も知らない呆れた奴なんです。そしてあなたからもし二十五ルーブリでもゆすらうと思へば、彼奴は齒で嚙んでも搾り取る奴なんです」

「成程、あの男は、口のきゝ方も知らぬ奴かも知れないが、然し、君だつて二十五ルーブリゆするなんて云ふ言葉を云ふぢやないか」と思ひながら、ネフリユードフは、此の男に對して、たまたま嫌惡の情を感じた。此の男は、心易立てな氣輕るな様子をして、他の依頼人は皆別な階級に屬してゐるが、自分とネフリユードフは、同じ階級の者であることを示さうとした。

「飛んだ目に遭ひました、全く怖ろしい奴です。少し氣拔きをせねばたまらぬと思つてる所でした」  
 辯護士は、自分の職業に無關係なことを饒舌つたのを辯解するやうに慍う云つた。「ところで、あなたの事件ですな、あれは私も篤くと調べて見ました。然しツルゲーネフの詞ではないが、「それに就いて内容を否認す」ですな。青二才の辯護士先生、控訴に對する相當の理由を少しも残してゐないんです」

「では、何うしたら可いでせう？」

「ちよいとお待ち下さい、」かう云つて、辯護士は丁度其處へ這入つて來た書記の方へ向き「さう云ひ給へ。僕の云つた通りにするんだつて。それで承知なら可し、でなければ關はないつて」

「でも、なか／＼承知しませんか？」

「では、かまはない、勝手にするさ」すると、晴々としてゐた彼の顔は、俄かに青褪めて怒氣を帯びて來た。

「え」と、——ところで、我々辯護士は、たゞで金を儲けると思つてる奴があるんですね」

暫くしてから、再び以前の快活な笑顔に返つて、辯護士は云つた。「實は、或破産の宣告を受けた男を、免訴にしてやりましたのです。すると、多勢ぞろ／＼やつて來るんです。然し慍うした事件は皆中々骨が折れます。誰かど云つた通り、我々辯護士もまた「インキ壺に肉を削ぎ落してゐる」者ではないでせうか。

「ところであなたの事件は、イヤ、寧ろあなたが興味を持つてゐられる此の事件は、莫迦／＼しい

拙い事をやつてありますので、控訴す可き相當な理由がちよつとないんです。然し……」と、彼は尙ほ續けた。「兎に角宣告の取り消しをやつて見ませう。是は私が書いて置きましたのですが」と、彼は一杯書き散らしてある數枚の紙片を取り上げて、面白くもない法律上の詞のところははしよつて、或文句には特別に力を入れて、早口に讀み始めた。

「控訴院刑事部ニ控訴ス。云々。判決書ニ由レバ、云々。陪審院ノ裁決ニヨレバ云々。マースロワハ商人スメリコーフヲ毒殺シタル廉ニ依リ有罪ト認メラレ、刑法第一千四百五十四條ニ照シテ西伯利亞服役ノ徒刑ニ宣告サレタリ云々。」と、彼は此處で詞を切つた。始終馴れてゐるにも拘らず、彼は矢張り自分の文案を聞くのは愉快さうであつた。「此宣告ハ最モ明白ナル司法上ノ非違及ビ錯誤ニ直接原因ヲ有スルモノニシテ、」と、彼は少し力を入れて讀み續けた。「尙、再審ニ附スベキ充分ノ理由アリ。第一、裁判ノ初メニ當リテ、裁判長ハスメリコーフノ内臓解剖ニ關スル醫者ノ報告ヲ朗讀スベキコトヲ禁ジタリ。——これが第一の要求です」

「然しその朗讀を請求したのは檢事側でしたよ」と、ネフリユードフは喫驚して云つた。

「それは關いませぬ。辯護士側にも、その朗讀を請求すべき理由があつたかも知れませんでせう」  
 「ですけど、辯護士側には、何うもそんな理由はなかつた筈ですが」

「イヤ、それでも關いませぬ。控訴の理由にはなりません。ぢや續けますよ——第二、」と、彼は讀み出した。「被告マースロワノ辯護士ガ、辯論ニ際シテ、被告ノ墮落シタル原因ニ關シ、ソノ性格ヲ説明セントシタル時、裁判長ハ、直接ノ問題外ニ渡ルモノトシテ、ソレヲ中止セシメタリ。而モ、元老院

ニシテ屢々訓示サレタル如ク、罪人ノ性格及ビソノ一般道徳上ノ立場ニ關スル説明ハ、刑事上最モ重大ナル意味ヲ有スルモノニシテ、單ニ責任問題ヲ決定スル手引トシテモ、尙且重大ナル意味ヲ有ス。——これが第二の要點です」と、彼は、ネフリユードフの顔を見た。

「けれども、その時の辯護士は、實際下らない事を陳べ立てたのでした」と、ネフリユードフは愈々驚いて云つた。

「全く氣の利かない奴ですから、迎も巧いことなんか云へませんでしたらう」フナーリンは笑ひながら云つた。『だが、これも矢張り控訴の理由にはなりません、——第三、裁判長ハ、摘要ヲ陪審員ニ説明スルニ當ツテ、刑事訴訟法第八百一條第一項ノ趣意ニ反シ、犯罪ヲ構成ス可キ法律上ノ要點ヲ省キ、被告マースロワガ被害者スメリコーフニ毒ヲ與ヘタル事實ヲ承認スルモ、被告ガ被害者ノ生命ヲ奪ハントセシ意志ノ存在シタル證據ナキ時ハ、被告ヲ殺人犯トナス可キ權利ナク、只被告ガ思ハズモ被害者ノ死ヲ誘致シタルソノ不注意ニ對シテノミ、有罪ヲ宣告スベキ權利アル事、ソレヲ陪審員ニ注意スルヲ忘レタリ——これが一番肝腎な要點です。』

「さうです。然し、それは我々も知つて居なければならぬ筈だったので。それは我々陪審員の誤りでした。』

『それから今度は第四の要點』と、辯護士は續けた。『陪審員回答書ニハ明カナル矛盾ヲ含メリ。被告マースロワハ貪慾ナリシタメ、スメリコーフヲ故意ニ毒殺シタルモノトシテ求刑サレ、ソノ殺人ノ動機ハ只ダ此ノ一事ニアリトナセリ。然ルニ陪審員ハソノ裁決ニ於テ、被告ニ窃盜ノ意志ナキ事、及

ビ財寶ヲ盜取セントシタルノ意志ナキ事ヲ是認セリ。然ラバ彼等ハマタ、被告ニ殺人ノ意志ナカリシ事ヲモ是認スベキニ、只ダ裁判長ノ摘要説明ノ不完全ヨリ起リタル誤解ノタメ、コノ事ヲソノ回答書ニ書キ漏シタルモノナリ。依ツテ斯ノ如キ陪審員ノ回答書ハ、刑事訴訟法第八百十六條及ビ第八百九十八條ノ適用ト、ソノ誤謬ニ對スル裁判長ノ説明ト、更ニ囚人ノ犯罪ニ關スル討議ト裁決トヲ絕對ニ要求スベキモノナリ。』

『では、何故裁判長はその手続きをしなかつたのですか。』

『さア、それが私にも判らんです。』と、フナーリンは笑ひながら云つた。

『では、元老院は、無論此の誤りを正して呉れるでせうね』

『それも、その時の擔任者次第です。それで、尙ほ恠う書いて置きました。』と、彼は早速次ぎを讀み續けた。『如斯基裁決ハ、被告マースロワヲ罪犯者トシテ處罰シ、又、コノ被告ニ刑法第七百七十一條第三頁ヲ適用スベキ權利ヲ法廷ニ與ヘザルモノナリ。コレ明カニ我ガ刑法ノ根本原則ニ對スル一大違反ナレバナリ。』

『以上ノ理由ノ下ニ、余ハ刑事訴訟法第九百九條、第九百十條、第九百十二條、第二項及ビ第九百二十八條ニヨツテ、廢棄ノ控訴ヲナシ云々——更ニ此ノ件ハ同法廷ノ他部ニ移シ再審センコトヲ請求スルノ光榮ヲ有ス——さあ、これで書くことはすつかり書いた筈ですが、然し實を云ふと、勿論それは元老院の擔當者の如何によりますが、何うも成功の見込みがありませんね。だが、もし元老院にあなたが幾らか勢力でもおありなら、おやりになつて可いでせう』

「幾らか知つた人がゐます」

「それや好都合だ。一時も早い方が宜しいでせう、でない、先生方はみんな夏休みに旅行しますから、さうなると、歸つて来るまで三ヶ月も待たなければならなくなりますよ。で、これが失敗しましたら、尙ほ今度は皇帝陛下に上奏することが出来ます。これも矢張り或裏面の運動が必要です。その場合には又御力になります——尤も、裏面運動は私には出来ませんから、それはつまり上奏文の草案を意味して申し上げるのです」

「有り難う、それで、御禮はどの位差し上げませう」

「それは書記が草案をあなたに差し上げますから、その時御聞き下さい」

「もう一つ御尋ねしますが、検事は收監人に面會する許可書を呉れましたが、普通面會日以外に、」

「ええ、さうだと思ひます。然し知事は今居ません。代理に副知事が居ます。所で此奴しよ、うのない莫迦奴郎でね、御相談なすつても中々難しいでせう。」

「副知事は、マースレリコフでしたね？」

「さうです」

「彼なら知つてゐます」と云つてネフリユードフは起ちかけた。此の時、恐ろしく醜い、ごつくと骨立つた鼻の偏平い、顔の黄色い背の低い女が突然部屋に飛び込んで来た。

辯護士の妻君だが、自分では少しもその醜いことが苦になつてゐないらしい。

彼女は、ひどく凝つた扮装をしてゐた。黄と緑の絹の天鵝絨とで拵へた妙な物にくるまつて、そして薄い髪を縮らせてゐた。彼女は臆面もなく得々として部屋の中に這入つて来た。その後から脊の高い蒼味が、つた顔色の男が、にこ／＼しながら跟いて来た。この男は作家で、絹縁の附いた上衣を着て、白いネクタイを結んでゐた。ネフリユードフは此の男を見知つてゐた。

「アナトーリ」妻君は次ぎの部屋の扉を開けながら聲をかけて「あなたも被來いな。セミヨン・イワノウイチさんが、自作の詩をお読みになるんださうですから。あなたも是非被來らないといけませんよ。あなたもガルシンのものでも御読みになると好いわ」

そして彼女は良人の耳に何か囁いてゐたが、ネフリユードフは、確かに自分の事だと思ひながら其處を出て行かうとした。すると、突然妻君は彼を捉へて云つた。「あの御免遊ばせ、公爵。わたしよく貴郎を存じてゐますの。ですから面倒臭い御挨拶なんかよしにしまして、何うか妻共の文學會に是非被來つしつて下さいませんか。大變面白いで御座いますよ。良人はあれで中々朗讀が名人なんですの」

「どうです、私もこれで中々多藝多能でせう」と、ファナーリンは、にこ／＼しながら両手を擴げて、妻君を指さし、恰も、恚うした可愛い奴の云ふことには、到底逆ふ譯に行かぬと云はぬばかりの様子をした。

ネフリユードフは、何だかいやな氣がして来て、難しい表情をしたが、それでも招待されたのに対しては莫迦丁寧に禮を述べて、そのまゝ暇をひして出て行つた。

「何と云ふ氣取屋さんだらう」彼が部屋を出て行つて了つた後で、妻君は云つた。

待合室へ行くと、書記は控訴状を彼に渡し、一千ルーブリの報酬を請求した。そしてフナーリン先生は、平常はかう云ふ事件は決して引き受けないが、特にネフリユードフのために引き受けたのだと説明した。

「それから控訴状には誰が署名するのです？」

「被告自身がするので。然し、都合が悪ければ、本人の委任状さへあれば、フナーリン先生が署名なさることも出来ます」

「いやそれには及ばない。直接被告に署名させませう。」と、ネフリユードフは決まつた面會日が来ない前に彼女に會へる口實が見附かつたのを喜んで云つた。

## 四六

いつもの時間に、看守の口笛が監獄の廊下で響くと、各檻房の鐵の扉がゴト／＼鳴つて、素足の音がバタ／＼したり、靴の踵の音がゴト／＼聞えたりして来た。掃除番の囚人等は、厭やな臭氣をあたり一杯に漂はせながら廊下を通つて行つた。他の囚人等は頭を洗ひ、衣服を着更へて、黙呼に出かけ、それから茶をいれる湯を取りに行つた。

何處の檻房でも朝飯時の會話は非常に賑かであつた。この日は、今日管刑に處せられる二人の囚人に就いて話がはづんでゐた。一人は、ワシーリエフと云つて、相當に教育のある青年で、何處かの書記

をしてゐたのだが、嫉妬の餘り情婦を殺したのだつた。彼は、快活で、人がよくて、然も監獄の役人等に對しては強く當るので、囚人仲間からは好かれてゐた。獄則によく通じてゐて、役人共にその通りに實行せよと主張してゐた。だから役人等は、彼を嫌つてゐた。

三週間前、掃除番の一人の囚人が、看守の新しい制服に、何か汚い液をかけたと云ふので、その看守からひどく打ち殴られた事があつた。すると、その時ワシーリエフが掃除番の肩を持つて、囚人を撲るのは反則であると主張した。

「規則なら俺が教へてやる」と云つて、看守はぶり／＼腹立て、ワシーリエフを罵つた。けれどもワシーリエフは少しも恐れず、矢張りそれと同じ調子で返答するので、看守は愈々我慢が出来なくなり打つてかゝらうとしたが、するとワシーリエフは、素早くその看守の手を掴んで、二三分間じつと押へつけ、やがてそれを捻ぢ上げて、戸の外へ看守を突き出して了つた。看守は早速典獄へとれを訴へたので、ワシーリエフは到頭獨房へ押し籠められて了つた。

獨房は、外から鍵のかゝつた、一列の暗い部屋であつた。内には、寢臺もなければ、椅子もなく卓子もないので、そこに這入つた者は、汚い床の上に坐つたり寝轉んだりしなければならなかつた。すると、是等の檻房に棲んでゐる夥しい鼠が出て来て、身體の上を走り廻るのだつた。鼠は大膽にも囚人等の麵麩を竊みに来て、寢靜まつてゐる時は、彼等を襲撃することもあつた。ワシーリエフは、何も悪い事をした覚えはないから獨房に入れられる譯はないと云つてたてついたが、すると看守共は腕力で無理に入れようとした。それで掴み合ひが始まつて、他の二人の囚人がワシーリエフに加勢して

看守の手から彼を離さうとした。全監の看守が皆集つて来たが、中にベトロローフと云ふ鬪抜けて力の強い奴がゐた。そのために囚人等は撲りつけられて、遂に獨房へ投げ込まれて了つた。何か暴動でも起つたやうに知事の所へすぐ報告すると、知事からは二人の巨魁、ワシリーエフと、浮浪漢のネボームニヤシーとを管刑に處せよと云ふ命令書が下りて来た。二人とも赤楊の管で三十宛毆られることになつたのである。管刑は女囚の面會室で行はれることになつた。

前夜から此の噂が監獄内に知れ渡つてゐたので、今朝は各檻房ともその話で持ち切つてゐた。かうした鹽梅で朝飯が済むとすぐ二人の囚人は、刑の執行所に當てられた、丁度空いてゐる女囚の面會室へ連れ込まれた。

「何故立つてるんだ、腰掛けないか」

浮浪漢は、ズボンを脱いで床の上に投げ、スリッパも同じやうに脱ぎ捨て、腰掛の方へ近づいて行つた。

看守共は、彼の腕を掴んで腰掛へ掛けさせた。そして兩足が腰掛の片側へ垂れ下つてゐるのを一人の看守が出て来てそれを持ち上げ、腰掛の兩側へ跨がらせた。と今度は他の二人の看守が囚人の兩腕を捉へて腰掛に抑へ付けた。すると、四番目の看守が腰の上まで囚人のシャツを捲くし上げた。肋骨の露れた黄色い皮膚や、脊骨や、曲つた腰の格好や、彎曲した足の、丈夫な筋張つた股などがさらけ出された。

胸幅も肩幅も廣くて、逞しい筋肉を持つた看守のベトロローフは、そこに用意してある幾つかの杖の

中から、瘤のついたのを一本選び取つて、手に唾して、その赤楊の杖の太い端をしつかり握り、それをびゆつと打ち振りさま、囚人の裸の肉の上にピシッと食らはした。浮浪漢はあつと叫んで、一管毎に跳び上つたが、看守等はそれをしつかり抑へてゐた。ワシリーエフは、眞蒼な顔をしてその傍に立つてゐるが、時々その目の光景にちらりと眼を走らしては、すぐ又下を向いてゐた。浮浪漢の黄色い脊中には、もう幾つもの蚯蚓腫れの線が出来て、叫び聲は、呻き聲に變つてゐた。

ワシリーエフを獨房に入れた騒ぎの時に、侮辱されたと思つてゐるベトロローフは、その腹癢せに、管の先きが折れて飛んだ程、力委せに撲つた。浮浪漢の股や臀の黄色い肉は、眞赤な血で汚れ出した。

やがて、浮浪漢の番が済んで、彼がまた下臑を震はせながら、シャツの裾で血を拭いて、ごそ／＼としたズボンを穿きかけた時、看守長はワシリーエフの獄衣を掴んだ。

「脱け」と、彼は云つた。

ワシリーエフは、一種妙な微笑を浮べて、少しばかりある黒い鬚と口髭との間に白く光る齒を見せた。彼の聰明な負けぬ氣の顔は、全體に歪んでゐるやうに見えた。紐を引切つて、獄衣を脱ぎ、立派な、好い格好の、眞直ぐな、逞しい脛を出して、腰掛に跨つた。

「だけどそんなに……」と、呟いて、彼は何か云ひかけたが、急に止めて、齒をキツト喰ひしほりながら、撲られる用意をした。

ベトロローフは、折れた管を捨て、窓柵の上から、また新しいのを取り出して、再びまた拷問にが／＼つた。

ワシリーエフは、最初の一撃で、もう泣き聲を出した。

『あッ、あッ』かう叫んで、彼は藻掻きに藻掻くので、看守共は膝を突いて、顔が眞赤になる程力をこめて彼の肩にぶら下つてゐた。

『もう三十だ』と、典獄はまだ二十六の時に云つた。

『いえ、まだ二十六です』

『三十だ』典獄は眉を寄せ、鬚鬚を引張りながら云つた。

看守達は、ワシリーエフの身體を放してやつた。けれども彼は動けなかつた。

『立て』一人の看守が引き起しながら云つた。

ワシリーエフは辛つと起ち上つたが、よろ／＼とよろめいて、もし二人の看守が彼を支へなかつたら、打ち倒れるのだつた。彼は重苦しく、然も忙はしなげに息を吐いてゐた。蒼ざめた唇は、何だか赤坊をあやす時、大人がするやうな、一種妙な音を立て、震へてゐた。膝はガタ／＼打ち合つてゐた。

『看守の頭なんか手を上げやがつたら、それこそ今度はひどいぞ』ペトローフは、答を捨て、豪／＼な顔をしたり、自分を是認しようとしたりなどして恚う云つた。然し彼の心中は不安であつた。毛深な手首の所まで袖を引き下ろして、薄汚いポケットハンカチで額の汗を拭きながら、部屋を出て行つた。

『病院へ連れて行け』典獄は、掣め面をして、何か苦い毒のやうなものを飲み込んだやうな咳拂ひ

をしながら云つた。そして、窓框に腰を掛けて、紙莖に火を點けた。『家に歸るかな？』彼はかう考へたが、然し此の三日間、今日も朝の間ぢう、聞かされ通してあつたあのリストの作曲の、何かしらハンガリー舞踏曲らしいガラ／＼云ふ急調を思ひ出すと、氣が重くなつて來た。その時丁度、ネフリエドフが面會したいと云つてゐることを知らせて來た。

『はて、何の用だらう』恚う思ひながら、典獄は、深い太息を吐いて、訪問者に會ひに廣間の方へ出て行つた。

コラブリョーワ、お洒落さん、フィヨードーシアとマースロワの四人は、隅の方で茶を飲んでゐたが、實は、近頃マースロワはいつも懐中加減がよいので、他の者にもふるまつて、ウオーツカを一杯やつたので、それで皆赤い顔をして喋いでゐるのだつた。

『暴動だなんて餘り莫迦／＼しいぢやないかよ』と、コラブリョーワは、砂糖の塊を丈夫な齒でかり／＼と細く碎きながら、ワシリーエフの事に就いて云つた。『仲間に加勢したばかりぢやないか。囚人だからつて、さう無闇に打つ譯にはもう今日日はいかないからね』

『そして、ワシリーエフは、善い人だつて云ふことだよ』と、長い髪を編んで、ぐる／＼巻きにした頭に、何も被らないフィヨードーシアが、急須を載せた寝臺の向ふにある丸太に腰掛けながら云つた。

『それでね、あの方に云つておやりよ』と、線路番の娘はマースロワに云つた。(あの方と云ふのはネフリエドフの事である)

「話して見よう。あの方は私のためには何でもして下さるからね」マースロワは頭を振りながらにつこりして云つた。

「ただけど何時被來るだらう？。もう看守達は、あの人達を引つ張りに行つたのよ」と云つて、フィヨードーシアは、「あゝ、恐ろしい」と溜息ついて附け加へた。

「昔、妾は村で百姓が棒敲きにされるのを見たことがあるよ。良人のお父さんの使ひで村長さんの所へ行つた時にネエ。さうだよ、妾が行くと、丁度ネエ……」線路番の嬖は長物語を始めようとする頭の上の廊下から人の聲や登音がどやく／＼聞えて來たので、口を切つた。女達は皆押し黙つて聞き耳をたてた。

「あの男を引き立てゝるんだよ、畜生共が」と、お洒落さんが云つた。「屹度叩き殺して了ふよ、平常溫和しくないものだから、看守の奴郎共が狂人のやうになつて怒つてるんだからね」

二階が再びひつそりとすると、線路番の嬖は、村長の納屋に這入つたら、一人の百姓が棒敲きにされてゐて、それを見ると喫驚して膽が潰れて了つたと云ふやうな話を終ひまで語つた。お洒落さんは、シチエグロフが打たれた時は、少しも聲を出さなかつたと話した。やがてフィヨードーシアは茶道具を片付け、コラブリヨールワと線路番の嬖は、縫物を始めた。

マースロワは、慵さうに鬱ぎ込んで、兩腕で膝を抱へながら、寢臺に腰掛けてゐたが、やがて横になつて、睡らうと思つてゐると、女看守が事務所に面會人が來てゐると知らせて來た。「ねえ、ちよいと、忘れねエで俺達の事をあの方へ話してお呉れよ」と、メンシヨーフ婆さんは、曇つ

た鏡の前で、頭のハンゲチを繕つてゐるマースロワに云つた。「俺達が火イつけたんではねエ、あの畜生の奴郎が、自分でつけたんべエよ。彼奴の職工がそれを見てたんでねエか。その職工がへエ、偽べエついて、自分の魂を穢すやうなことはなかつべエだよ。兎に角悴のミトリに會つてよく聞いてくらしやらねエかと、お願いして呉らつせエ。ほしたらへえ、ミトリがあんでもすつかり、判るやうに申し上げるだんべエ。悪い事ちうたら夢にも覺えのねエ俺達が牢屋に打ち込まれて、あの奴郎はへエ、人の横取りイしたあの畜生はへエ、娑婆で平氣で調戲けてやがるツてこツでねエか。あんちうまアこツだんべエよ。考へて見てもくらツせエ」

「さうだとも、法律なんてそれぢや役に立たないやね」とコラブリヨールワが云つた。

「話して上げよう。本當に話して上げるわ」とマースロワは云つた。「もう一杯飲んで、元氣つけて行きたいな」彼女は隣きしてかう附け加へた。コラブリヨールワはコツプに半分ばかり注いでやると、マースロワはそれをぐつと飲みほした。それから口を拭いて、「元氣つけて」と云ふ言葉を繰り返しながら、頭を振つて、嬉しさうにこく／＼しながら、廊下を女看守の後について行つた。

## 四七

ネフリユードフは、玄關で長い間待つてゐた。

彼は監獄に着くと、入口のベルを鳴らし、出て來た當番の看守に檢事の認可書を渡した。

「誰に面會なさるんです」



「女囚のマースロワに」

「今直ぐは駄目ですよ、典獄は御用中ですから」

「事務所にもられますか」

「いや、この面會室に来てゐます」と云つて、その看守はどきまぎしてゐた。

「おや、面會日でしたか今日は？」

「いや、特別の用事でなんです」

「では是非典獄にお面會したいんですが、何うしたら可いでせう。」ネフリユードフは云つた。

「典獄が出て來ますから、あなたからさう有仰つて下さい。——少し御待ちなさい」と看守は云つた。此の時のつべりしたチカ／＼顔の、煙草の煙で口髭を燻ぶらした曹長が、軍服の金筋をびか／＼光らして、傍の扉口から出て來たが、厳格な調子で看守に云つた。

「何うして人なんか此處へ通したんだ？事務所——」

「典獄が此處にゐられると聞きました」

ネフリユードフは、曹長の様子までが何だかそは／＼してゐるのを見て驚きながら云つた。此の時、内側の戸が開いて、ベトローフが暑さうに汗を一杯かいて出て來た。

「今度は少しは骨に膺へたらしい。」曹長の方へ向いた彼は咳くやうに云つた。曹長は眼附きでネフリユードフのゐることを注意したので、ベトローフは、眉を擧めて、背後の扉から出て行つた。

「誰が骨に膺へたのだらう、何うして此の人達は怎麼にそは／＼してゐるのだらう。曹長は眼知ら

せなんかしたが、何故だらう。」とネフリユードフは考へた。

曹長はまたネフリユードフの方へ向いて「此處では御面會出來ません、何うか事務所の方へお出で下さい。」と云つた。

ネフリユードフは、云はれるまゝに行かうとした時、背後の扉口から、下役共よりは更に困つたやうな顔附きをして、頼りに溜息を吐きながら、典獄が出て來た。ネフリユードフを見ると彼は、看守の方を振り向いて

「フェドートフ、女囚權第五號室のマースロワを事務所へ連れて行け」

「さあ何うぞこちらへ」今度はネフリユードフの方へ向いて云つた。二人は、急な梯子段を昇つて、窓が一つ、書卓が一つ、そして椅子が幾つか置いてある小さな部屋へ這入つて行つた。先づ典獄が腰を下ろした。

「これで私の職業も大抵ではありませんよ、實に辛い職業です」彼は、紙莖を取り出しながらネフリユードフの方を向いて云つた。

「何うもお疲れのやうですね」とネフリユードフは云つた。

「もうつく／＼務めが厭やになりました。——何も彼も辛いことばかりです。人間は荷を軽くしようとするれば益々重くなるばかりですね。私はたゞ、何うかしてもう怎麼事から逃げ出したいと思つてゐるばかりです。本當に大變な職業ですからね」

ネフリユードフは、さう云ふ典獄の特別な苦惱が何であるかは知らなかつたけれども、兎に角今日

は、ひどくしよけて、心細い無情な感慨に落ちて、憫みを乞ふてゐるのだといふことだけは了解出来た。

『さうです、この職業は大抵ではありますまい。』と彼は云つた。『何うしてこんな事をなさつてゐるんです？』

『妻子がありましたね。と云つて他には何うしようもないものですから』  
『だつて、なれ程お辛いことなら……』

『それはさうですが、これでも尙ほ幾らか役には立つてゐますよ。私は出来るだけ優しくして來ました。私と同じ地位にある他の者のやり方は、全く違ひますからね。何しろ此處にも二千人から人間が居りますが、そのまた人間がね！兎に角その扱ひ方から知らねばなりません。云ふは易く行ふは難しと云ひますが本當です。何と云つても、奴等も亦人間なんですからな、憫れに思はない譯に行きません。』それから典獄は、此の間囚徒の間に喧嘩が起つて、一人は到頭殺されて了つたことをネフリユードフに語り出した。

そこへ看守に連れられて、マースロワが這入つて來たので、話は中途で止めになつた。

ネフリユードフは、其處に典獄が居るとはまだ氣附かないで、いそ／＼として戸口を這入つて來るマースロワを見た。顔をばつと赧らめて、にこ／＼しながら、頭を打ちふり／＼、快活に女看守の後から跟いて來た。が、典獄を見ると、急に顔色を變へて、憎えたやうな顔附をして彼をじつと見詰めた。然し、すぐまた氣色を取り直して、大膽に嬉しさうにネフリユードフに話しかけた。

『いらつしやいまし』と、徐かに云つて、につこりしながら男の手を取り、初めての時とは打つて變つて強く握つて振つた。

『今日は、控訴狀に署名して貰ひに來た』と、ネフリユードフは、今日のカチューシヤの挨拶しぶりの大膽なのに驚きながら云つた。

『これは辯護士が書いて呉れたんだが、お前が署名すればすぐベテルブルグへ送る心算だ』

『えゝ承知しました。何でもしますわ、あなたのお仰ることなら』と、彼女は瞬きしながらにつこりした。

ネフリユードフは、ポケットから疊んだ紙を取り出して卓の方へ進み、

『此處で署名させても構ひませんか』と、典獄の方へ向いて訊ねた。

『構ひません、さア御掛けなさい。此處にペンがある、お前書けるかい』と、典獄は云つた。

『昔は書けましたけど』かう云つてマースロワは、裾を捌いて、ジャケツの袖をまくし上げ、につこりしながら卓に向つて腰をかけ、小さな引き締つた手に、不器用にペン軸を持ち、笑顔でネフリユードフをちらと見た。

ネフリユードフは、書く可きことを教へて、署名する場所を指示した。

インキの中にペンを差し込みながら彼女は深い溜息をついて、注意深くペンの滴りを少し振り落して、それから自分の名を書いた。

『これで可いんですか』ネフリユードフと典獄との顔をじつと見詰めて、ペンをインキ壺の上に置

いたり、紙の上に置いたりしながら、彼女はかう訊ねた。

「それから僕は少しお前に話があるが」ネフリユードフは、女からペンを取りながら云つた。

「好いわ、何ですの」とマースロワは云つた。

と、急に何か思ひ出したやうに、でなければ睡氣でもさして来たやうに、彼女は眞面目な顔になつた。

典獄は、立上つて、ネフリユードフと、マースロワを後に残して部屋を出て行つた。

## 四八

マースロワを連れて来た看守は、二人から少し離れて窓框に腰を掛けてゐた。

愈々決断せねばならぬ時が来た。最初面會した時、最も大切な事を云はなかつたので、ネフリユードフは絶えずそれに責められてゐるが、今度こそは自分が彼女と結婚しようと思つてゐることを愈々打ち明けねばならぬと決心した。マースロワは、卓の向ふ側に掛けてゐた。ネフリユードフは、その反対側に差し向ひに掛けてゐた。部屋の中は明るかつたので、ネフリユードフは、初めの間は、近々と女の顔を見ることが出来た。女の眼角の皺も、口のまはりの皺も、腫れほつたたい臉もはつきりと見えた。彼は、以前より一層女を可哀さうに思つた。看守——灰色の頬髯を生やした猶太型の男——に聞かれないやうにと、卓の上のしかゝるやうにして、ネフリユードフは云つた。

「この控訴狀が駄目だつたら、今度は皇帝陛下に上奏しよう。出来るだけの事は何でもする心算

だ」

「最初から良い辯護士さんに頼んどゐたら好かつたわね」と、マースロワは口を入れた。「私の辯護士と來たら、全く駄目なんですからね。御愛想のやうな事ばかり云つてゐて」恚う云つて彼女は笑つた。「もしあの時、わたしがあなたと御懸意だと云ふことがみんなに知れてたら、こんなことにはならなかつたでせうけど。あの人は、人さへ見ると泥棒だと思つて了うんですからたまりませんわ」

「今日は何うも變だわい」ネフリユードフは恚う思つた。そして、愈々心に思つてゐることを云はうとすると、マースロワがまた口を出した。

「わたし聞いて頂き度いことがありますのよ、わたし達と一緒に一人のお婆さんがゐますの、それは本當に善い人で、みんな驚いてゐますわ。矢張り冤罪でその子供と一緒に入れられてゐるんです。放火犯だつてますけど、誰だつて皆そんなことはないつて云ひますの。わたしがあなたと御懸意なことを聞いてね、何うか倅に會つて頂いて、すつかり話を聞いて下さるやうに頼んで呉れ」つて云ひましたわ。恚う云ひ終るとマースロワは、頭を左右に振つて、ネフリユードフをちらと見た。「名前は、メンシヨーフと云ひます。ネエあなた、聞いてやつて下さいな、本當に善いお婆さんなんです。一度御覽になれば、すぐ判りますわ。ねえ、何うか叶へてやつて下さいな、彼女は媚びるやうに、につこりして、ちらと男の顔を見たが、やがて眼を落した。

『よし、よく聞いて見よう』ネフリユードフは女の打ち寛いだ様子に益々驚きながらかう云つた。

「然し、僕は、自分のことでお前に云ひ度いのだが、昨日僕が話したことをお前は覚えてるか  
『昨日は色々有仰いましたが、一體何處ことですか』彼女は始終にこゝししながら左右に頭を振つた。

『お前に許して貰ひたいと……』と、彼は云ひかけた。

『まあ、何の事ですよ、本當に！許せ！だなんて、許すも許さないも……そんなことはもう……』  
『いや口だけで罪を償はうと云ふのではない、その實を示さうと思ふのだ。僕はお前と結婚しよう  
と決心したんだが』

恐怖の表情が俄かにマースロワの顔に現れて来た。その斜視の眼はじつと男の眼に注がれてるだけ  
れども、然し男を眺めてゐるやうには見えなかつた。

『それは何うした譯で？』と、怒つたやうな顔をして云つた。

『さうするのが神様に對する僕の義務だと思ふんだ』

『今頃神様もありませんわ。あなたは御自分で想はないことを有仰つてるのよ。神様だなんて、本  
當に！何處神様ですか？あの時よく神様をお思ひ出しにならなかつたことね。』『焦う云つて彼女は、口  
を尙ほ開いたまゝ、黙つて了つた。此の時始めてネフリユードフは、女の息が酒臭いを知つた。そ  
して、女が昇奮してゐるのを尤もだと思つた。』

『まあよく氣を落ち着けなさい』と、彼は云つた。

『何うして氣を落ちつけなければならぬ？わたし酔つてると思つてらつしやるのね。酔つてま

すさ、だけど云つてる事は、はつきりしてますわ』彼女は眞赤に顔を染めて口早に云つた。『わたしは罪  
人で、淫賣ぢやありませんか、あなたは紳士で、然も公爵でゐらつしやいますよ。わたしなんかにか  
いづらつて、何も御自分を汚しなされることはないでせう。立派なお姫様を御貰ひなさいまし。わたし  
に御用の時は十ルーブリ札一枚頂けば澤山ですから』

『お前がどんなひどい事を云つても、今の僕の心は判らないんだ』と、ネフリユードフは身體中を  
震はして云つた。『お前に對して犯した罪を、僕が今どんなに責めてゐるのか、お前には判るまい』

『罪を責めるつて？』彼女は鸚鵡返しに、怒つたやうにかう云つた。『あの時には、さうお思ひには  
ならなかつたのね、たゞ百ルーブリ札を押しつけになつただけでした。あれは……わたしへの玉代では  
ありませんでしたか』

『さうだ、さうだ、けれども今更何うすることも出来ない。』と、ネフリユードフは云つた。『が、僕  
は決してお前を捨てまいと決心した。これは屹度實行する』

『だけど、わたしがもう厭やですわ』かう云つてマースロワは壁高（かほたか）に笑つた。

『カチューシヤ』、ネフリユードフは彼女の手を取つて云ひかけた。

『もう御歸りなさい、私は罪人、あなたは公爵、こんな所に御用も何もない筈ですわ』彼女は怒り  
に形相を變へて、手を振りもぎつて怒鳴つた。

『あなたは、私をダンにして、また御自分の罪を救はうとなさるのですわね』彼女は、心に湧き起  
つて來ることを、あせりながら云ひ續けた。『散三此の世で私を玩弄（あそぶ）にしておいて、又來世でも私をダ

シに自分の罪を逃れようなんて思つてらつしやるのね。私はもうあなたは大嫌いだ——眼鏡を見ても癪になるわ、そのぶく／＼肥つた汚い顔つたら、オ、嫌やだ。お歸りなさい、お歸りなさいよ。』

看守が驚いて二人の傍へやつて来た。

『何をバタ／＼するんだ、そんな事をする……』

『かまはないで置いて下さい』と、ネフリユードフは云つた。

『身の程を考へろ』看守は尙ほかう云つた。

『何うかまあ暫く待つて下さい』ネフリユードフがかう云ふと、看守は窓の所に歸つて行つた。

マースロワは眼を落して、小さな兩手をしつかり組み合せながら、再び腰を下ろした。ネフリユードフは何うして可いか判らなくなつて、女の上へ屈みかゝつた。

『お前は、僕を信じて呉れないのかい？』

『結婚なさらうと云ふことですか、その話なら眞平です、一層首縊つて死んだが増しですわ、何うかそのお心算で』

『さうか、よろしい。でも尙ほお前のために骨を折らうと思ふよ』

『それはあなたのお勝手ですわ、だけど、私は別にそんな御願ひなどは致しませんからね。これが本當の私の心です。』と云つたかと思ふと、『あゝ、何故あの時わたしは死ななかつたのだらう』と、云ひ足して、シク／＼泣き出した。

ネフリユードフは言葉が出ず、自分も涙が滲み出るのを感じた。女は眼を上げて、不圖男のその様子を見ると驚いて、ハンケチで自分の眼を拭き始めた。

看守がまたやつて来て、もう時間が切れたと知らせた。マースロワは立ち上つた。

『お前は大分昂奮してる。出来れば又明日僕は来るよ、——よく考へて置いてお呉れ』ネフリユードフはかう云つた。

女は返事もせず、又見向きもしないで、看守の後から跟いて部屋を出て行つた。

『ねエ、もうすぐ目出度い時が来るんだらう』

マースロワが檻房に歸ると、コラブリョーワが云つた。『あの方は大分あなたに御座つてるやうだね。今の中にうんと油をかけておやりよ、屹度助け出して呉れるから。お金のあつた人には何事でも出来るんだからね。』

『さうだとも、全くさうだよ』と、線路番の嬢が、例の好い聲を出して云つた。『貧乏人が婚禮する

には、中々すぐには盃事も出来ないけど、お金持ちだと、心さへ決まればすぐ出来るんだからね。俺はね、丁度そんな遊治郎を一人知つてるよ。』

『其奴が何をしたとお思ひだい。』

『おらのこと頼んでくらつしやれたかねエ、』と、婆さんが訊ねた。

けれどもマースロワは、これ等の仲間達には何とも返事をしなかつた。彼女は寢臺の上に横になつて、斜視の眼で部屋の隅をじつと見詰めて、日の暮れるまでさうしてゐた。

苦しい争闘が魂の中に喰ひ入つて行つたのだつた。ネフリユードフの言葉を聞いて、彼女は曾て自分が苦しんだ、そして判らなくなつてそのまゝ嫌つて捨て、了つてゐたあの恐ろしい世界をまた新に思ひ出したのであつた。彼女は自分が今まで浸つてゐた夢幻の境界から不圖眼覚めたのであつたが、然し、まざ／＼とはつきりした此の記憶を背負つて生きて行くといふことは、不可能であつた。それは、更に一層の苦痛であつた。それで日が暮れると、彼女はまたウォーツカを買つて、仲間の女囚達と一緒に飲んだ。

## 四九

「つまり、恚うなるのが當然なのだ——恚うなるのが」ネフリユードフは、監獄を出る時今更のやうにつく／＼と自分の罪の深いことを思つた。若し彼が自分の罪を償はうとしなかつたら、彼は決した自分の罪をそんなに深いとは思はなかつたらう。そればかりでなく、マースロワも亦、自分の犯されたことの恐ろしさを、それ程深いものとは感じなかつたであらう。ネフリユードフは、今始めて女の魂を漬したことの如何に恐ろしいかを知つた。マースロワも今始めて、自分の魂の犯されたこと、そんなにも恐ろしいものであるかを知つて、合點が行つた。今までネフリユードフは、徒らに自負心を弄んだり、自分の悔恨を誇つたりしてゐたのだつた。けれども、今はもうすつかり恐怖に満されて了つた。彼は愈々もう女を捨てる譯に行かないことを知つたが、然しまだ、これから先き、二人の關係が何うなるかは中々想像出来なかつた。

丁度監獄を出ようとしてゐる時、厭やに媚びるやうな顔付をした、胸に十字架とメダルとを佩けた一人の看守が、こつそり出て来て手紙を渡した。

「これは或者からの手紙です、閣下」と、封書を差し出しながら云つた。

「誰からです」

「御覽になれば判ります。或國事犯人からです。私はその檻房掛りでございますので、規則違反では御座いますが、矢張り氣の毒でも御座いますので……」看守は、わざとらしい様子をして云つた。

ネフリユードフは、國事犯人の收禁されてゐる檻房掛りの看守が、同じ監獄内で、然も多くの人の眼の前で、手紙の取次ぎをするのに驚がされた。彼はまだこの時此の男が看守でもあり、革命黨の間諜でもあると言ふ事を、知らなかつた。けれども、彼は手紙を受け取つて監獄を出てからそれを讀んだ。

大膽な書風で、次ぎのやうに書いてあつた。

「突然ですが御免下さいませ。私はあなたが監獄をお訪ねになつて、或刑事犯人の事件で御心配なすつてゐられることを承りましたが、私もお目にかゝりたくなりました。何うか御面會なすつて下さいませ。面會は許されると思ひます。あなたの保護してゐられる方や、又私達仲間の事に就いて色々申し上げたいことが御座います——あなたの徳を慕へるウエーラ・ゾーホーワ。」

ウエーラ・ゾーホーワは、ノーウゴロド縣の極く片田舎で女教師をしてゐたことのある女で、昔ネフリユードフは幾人かの友人と熊狩りに行つて其處に逗留したことがあつた。この女教師は尙ほ學問したいからと云つて、ネフリユードフに學資金の無心をしたのだつた。ネフリユードフは、承諾して

幾らかの金を與へたが、それ以來この女の事に就いてはすっかり忘れて了つてゐた。それが今國事犯人となつて、收監されてゐて（多分獄内でネフリユードフの噂を聞いたのであらうか）何か恩返しでもしようと思ふのらしかつた。あの時分は、何も彼もが單純で氣輕だつたが、今はもうすべての事が、小難しく混雜かつて仕様がなくなつた。

ネフリユードフは、うつとりとなつて、あの時分の事や、ウエーラ・ゾーホーワと知り合ひになつたことなどを思ひ起した。それは丁度斷肉祭の前で、鐵道から四十哩も奥まつた、片田舎であつた。獵は大成功であつた——二匹の熊を射止めたのだつた。それで一行は歸る出發前に祝宴を開いてゐた。所へ彼等が泊つてゐる獵小屋の主人が出て来て、村の助祭の娘がネフリユードフ公爵に面會したい事があると云つて來ましたと告げた。

「美人かい？」と、一人が訊ねた。

「そんなこと云ふな、よせ」ネフリユードフは恚う云つて、眞面目な顔になつて立ち上つた。口を拭いて、一體助祭の娘が獵に何の用があるのだらうと不審に思ひながら、主人私用の小屋へ行つた。そこには、羅紗の帽子を被つて、暖かさうな外套を着た娘が待つてゐた——がつしりした顔の醜い娘であつたが、ただ三日月形の眉の眼付だけが、美しかつた。

「さあ、お嬢さん、お出でになりましたよ」と、年老つた主婦さんが云つた。「この方が公爵様で、らつしやるよ、私やアちよつくら出て來べエ。」

「何麼な御用です」と、ネフリユードフは訊ねた。

「わ、わたくしは、私はあなたがお金持ちで、そして、あんなつまらない——獵なんかして、お金をお捨てになつてゐらつしやるのをお見かけ致しましたが……」と、ひどくどきまぎしながら娘は云ひ出した。「わたしは……わたしは一つ望みがあるんですが……人のためになることをしたいんです。けれども私は何も知りませんから、何も出來ませんので。」彼女の眼は如何にも正直に、如何にも柔しく見えた。そして、彼女の堅い決心の中にも尙ほ羞かんだ様子のあるのがネフリユードフを動かした。ネフリユードフは、今に始まつた事ではないが、俄かに又、彼女の身の上を察し——理解し、同情するのだつた。

「すると、何うして上げれば可いのです。」

「私は教師をしてゐますけども、尙ほ大學へ這入り度いのですが、さうもなりませんもので、實は許されないからではなく、お金がないからなのです。お金を借して下さいませんか、學校を出ましたら御返し致しませうから。私は、お金持ちの方が熊を殺して、百姓にお酒を飲ませるのは、みんな悪いことだと思つてゐます。何故あの方達は善いことをなさらないのでせう。私は、たゞ八十ルーブリあればよございます。けれども、あなたがお厭やならば決して御心配には及びません」彼女はきつぱりと恚う云ひ足した。

「いえ、何うして、こんな機會を與へて下さいましたことを深く感謝します。すぐお金は持つて参ります。」

ネフリユードフは、廊下へ來ると、其處で立ち聞きしてゐた仲間の一人に出會つた。けれどもその

男の調戯ふのには取り合はずに、彼は自分の小さな靴から金を出して来て、娘に與へた。

『イヤ御禮には及びません、こちらから御禮を申さねばなりません』と、彼は言った。

今、さうした其の事をすつかり思ひ出すのは愉快だつた。娘に金をやつたことに對して批難がましい戯談を云つた或士官と喧嘩をしようとしたことや、仲間の一人が自分の肩を持つて呉れた事や、そのために二人が、更に一層親密になつた事や、などを思ひ出すと、本當に愉快でならなかつた。あの時の出獵は、まあ全體に何と云ふ成功だつたらう。あの晩、停車場に歸る時の愉快さつたら何とも云へなかつたが……。

一列の櫓——一列の馬——は、森の中の狭い道に添うて速かに滑りながら、或は降り積つた雪の塊りの重さで、枝々を垂れ下けてゐる低い樅の木の間を走つた。闇の中に赤い松明が閃めく。誰か香ひの好い紙頁に火を點ける。熊追ひのヨセフは、膝までもある雪の中を櫓から櫓と廻つて、いろ／＼と整理しながら、今、深い雪の中を廢がうろつき歩いて、白楊の皮を嚙んでゐたから櫓のおほひの中に這入り込む。

總べてかうした事が、とりわけ健康や體力や煩ひのない自由さなどの愉快な感じが、彼の心に甦つて來た。肺は毛皮の外套が胸につきつちり密接する程、深く／＼凍つた空気を呼吸してゐた。綺麗な雪が、低い枝から、顔へ落ちた。身體は暖く、顔は活々として、魂は自由で爽快で、何の煩ひもなく、苦みもなく、恐れもなく、又慾望もなかつた……。

本當に愉快だつた。然し今は、あゝ何といふ惱ましきだらう。何と云ふ苦しきだらう。正しくウエーラ・ツーホーワは革命家であつて、今は收檻されてゐるのであつた。ネフリユードフは、是非彼女に會はねばならなかつた。殊に、マースロワのことに就いて云ひたいことがあると云ふのだから。

## 五〇

次ぎの朝早く眼覺めると、ネフリユードフは、昨日自分のしたことを思ひ出して、思はずぞつとした。

けれども、それにもかゝはらず彼は、一旦やり出したからには何處までも続けねばならぬと前より一層固い決心をした。

本當の人間の義務と云ふやうな事を考へて、ネフリユードフは、又家を出で、マースレニコフの所へ行つた。マースロワや、それから、マースロワが話したメンシヨーフ母子を訪ねる認可書を貰ふためであつた。尙ほ又、マースロワのためになるかもしれないので、ツーホーワとの面會認可書をも貰はうと思つた。

ネフリユードフは、マースレニコフとは永い前からの知り合ひで、一緒に同じ聯隊にゐたことがあつた。その頃マースレニコフは、聯隊の主計であつた。彼は氣質の柔しい熱誠な士官で、皇室と聯隊の事の外は、何も知らない又知らうともしない男であつた。彼は今、聯隊から行政官に移つて、行政官



となつてゐた。金持ちで氣性の勝つた女と結婚して、實は、その妻君に強ひられて職を變へたのであつた。妻君は、まるで手飼ひの動物かなんぞのやうに良人を可愛つて、玩弄にしてゐた。ネフリユードフは、冬の頃一度訪ねた事があつたが、夫婦とも餘り巫戯けすぎるので興ざめて了ひ、それなり彼は、二度と其處を訪れなかつた。

ネフリユードフを見ると、マースレニコフは、満面に喜色を湛へて喜んだ。彼は矢張り艶々しく張り切つた赤い顔で、軍隊にゐた時と同様、ふく／＼肥つて、立派な風采をしてゐた。元から彼は、何時も、最新流行型の、胸にも肩にもしつくりと合つた制服を、塵一つ附かないやうに綺麗に掃いて着るのだつたが、今でも、服こそ文官服に變つてはゐるが、矢張り肉附きの好い身體にキチンと合つて、廣い胸のあたりも立派な、最新流行型の服裝をしてゐた。年こそ違つてゐるが（マースレニコフは四十歳だつた）、二人はお互に非常に親しい間柄であつた。

『ヨウ暫くぢやないか、よく來て呉れたね、さア妻に會つて呉れ給へ。僕はもう十分ばかりしか會つてゐられないんだ。君も知つてる通り知事が不在なんで、縣廳の事務を僕が統轄してゐるんでね』と、彼は得意の色を隠しきれないで云つた。

『僕も、急用があつて來たんだが』

『何の用事だい』と、マースレニコフは、すぐ警戒しながら、氣遣はしさうに嚴肅な調子で云つた。

『僕と非常に關係のある者が一人監獄に入つてゐるんだ』(監獄と云ふ詞を聞くと、マースレニコフ

の顔は非常に唖しくなつて來た)『で僕は、普通面會所でなく事務所でそれに會ひたいんだが、そして時間も普通の訪問時間でなしにだ。これは君の職權で出來ると僕は聞いて來たが』

『宜しい、君のためになら何でもやらう』と、マースレニコフは威儀を和らげ心易けにネフリユードフの膝の上に兩手を置きながら云つた。『だがね、宜いかい。公けの事に就いては、ちつとの間だけ僕は主權者だよ』

『では、女に會へるやうに認可狀を書いて呉れるかね』

『女かい?』

『ウム』

『どんなことをしたんだい』

『毒殺だ、然しそれは不當な宣告なんだ』

『さうら見給へ。それが所謂君等の陪審制度なるものだ。要するにそんなことしか出來ないのさ。(何うした譯か、彼は此の詞を佛蘭西語で云つた)『僕の考へが君の考へと一致しないことは知つてるが、それは止むを得ないことだ。これは僕の定見なんだから』と、彼は、最近十二箇月間讀み續けた保守黨新聞の論説を受け賣りしつ附け加へた。『君が自由黨であることは僕も知つてゐるが』

『さア自由黨員だか何だか僕は知らないよ』と、ネフリユードフは、微笑しながら云つた。人は判決されない前によく調べられねばならぬ、審問されない前は皆平等である。虐待又は拷問は、絶對にしてならぬ。況して裁判の確定しない者を虐待することは出來ぬなど、説くと、すぐ政黨に關係してゐ

るものゝやうに見られ、そして自由黨だと呼ばれるので、ネフリユードフは何時もそれには驚いてゐた。

『僕は、自分が自由黨だか何だかは知らない、現在の陪審制度が如何に悪いにしても、昔の裁判制度よりは善いと云ふことだけを知つてゐる。』

『それから辯護士は誰を頼んだのだ。』

『ファナーリンに相談したよ。』

『なに、ファナーリン』マースレニコフはかう云つて顔を擧めた。彼は一年前、證人として法廷に召喚され、ファナーリンに散三、然も懇懇な調子で半時間も擲論された事を思ひ出したのだつた。

『僕は云つて置くがね、何處事でもモウあの男とは干係しないやうにし給へ。ファナーリンは悪い男だよ』

『もう一つ御願ひがある』ネフリユードフは、それには答へないでかう云つた。

『ずつと以前に、知つてゐた若い女があるんだ、女教師だつたが——本當に氣の毒で可哀さうな女でね——それも今收檻されてゐて僕に會ひたいと云ふんだ。それにも面會狀が貰へまいか』

マースレニコフは、頭を一方に傾けて考へた。

『その女は國事犯かい』

『さうだ、そんな話だ。』

『所がね、國事犯だと、たゞ親戚の者だけのほか會へないんだ。然し君には特別な認可狀をやらう。君なら濫用することはなからうから。その女の名前は何と云ふんだ。ゾーホーワ？美人かね。』

『素敵なものさ』

マースレニコフは、何だか怪しむやうに頭を振つて卓の傍へ行き、題字だけを印刷した一枚の紙に次ぎのやうに書いた——『此の書の持参者、ドミートリ・イワーノウチ・ネフリユードフ公爵に監獄事務室に於て、平民マースロワ及び看護婦ゾーホーワと面會を差し許すこと』それから彼は念入りに署名した。

『それでは、我々が監獄の秩序を何う保つてゐるか、君に解るわけだね。何さまあゝ澤山ゐるのを殊に流刑囚を取り締るのは實に大變なんだ。然し僕は、嚴しく警戒してもゐるし、又あの仕事が好きでもあるよ。囚人等が非常に喜んで満足してゐることは君に判るだらう。然し、彼等の取り扱ひ方はよく研究して置かんとナ、つい二三日前も、ちよつとした紛擾が——反抗があつたんだ。他の者ならすぐ暴動呼ばはりをして、多くの者をひどい目に遇はせるのだが、然し僕等は何事もなく穩かに濟してやつた。片手には慈悲を持ち、片手には決意と威力とを持つて彼等には臨まねばならぬ』かう云つて彼は、金の飾紐印の附いた糊の利いたシャツの袖口から、トルコ玉の指環を嵌めたむく／＼した眞白い拳を出して、『慈悲と威力だ』

『さうか、それは知らなかつた。僕は二度監獄へ行つたんだが、ひどく陰鬱な感じがしたね。』とネフリユードフは云つた。

『君はパーセック伯爵夫人を知つてゐるか。昵懇になつて置くが可いね』マースレニコフは、話に氣が乗りながら尙ほ云ひ續けた。『あの夫人は、此の種の事業に全く身を委ねてゐる。中々貢献する所が多いね。大に感謝せねばならぬよ——それから、實は謙遜ぬきの打ち明けた話だが、僕にも感謝せねばならぬぜ——何も彼も元とは變つて、昔のやうな残酷な事はすっかり失くなつて了つたんだからね。囚人は皆本當に愉快に暮してゐる。まあよく實際に就いて見て呉れ給へ。ファナーリンは、個人的にはよく知らないが——又、僕等とは社交上別方面でもあるが——あの男は、然し、悪い男だよ。それから法廷では、自分勝手に種々な莫迦けたことをよく云ふ男だね——あんな莫迦なことを』

『イヤ、色々有り難う』かう云つてネフリユードフは書附を取り上げた。そして、此の上話は聞き度くないので、それをきつかけに此の舊友に暇乞ひをした。

『然し君、妻に會つて呉れないのか？』

『イヤ失禮する、今日は時間がないから』

『イヤ、それでは僕が恨まれるぜ』

マースレニコフは、梯子の中段の所まで送つて來て云つた。これは、彼に取つて、一番大切な人に對する扱ひ方ではなく、等二番目の大切な人に對する接待法で、ネフリユードフは、此の第二番目の大切な人の仲間に入れられた譯であつた。『ちよつとでも可いから、會つて行き給へ』

けれど、ネフリユードフは何うしても聞かなかつた。家僕や玄關番が飛んで來て、ステツキと外套とを渡して、戸を開けた。外には巡查が立番してゐた。ネフリユードフは、何うも今日だけはゆつくり

してはゐられないと繰り返し／＼した。

『では、木曜日には是非何うか。妻の在宅日なんだから、君が來るとさう云つて置くよ』マースレニコフは梯子段から聲をかけた。

## 五

ネフリユードフは、マースレニコフの邸宅から眞直ぐ監獄へ馬車を走らせ、案内知つた典獄の寓居へ行つた。またも例の下等なピアノの音がしてゐたが、今度は、以前のやうな狂躁樂ではなく、クレマンチの練習曲であつたが、矢張り強い、冴え／＼した、早調子であつた。片眼を繙帯した女中が出て來て、典獄は在宅だと云つて、ネフリユードフを小さな應接室へ通した。一脚の長椅子があつてその前の卓の上には、片端の焼けた石竹色の紙笠を掛けた大ランプが、編物細工のランプ臺に載せて置いてあつた。典獄は例の悲しげな元氣のない顔附をして、這入つて來た。

『何うか御掛け下さい。何う云ふ御用件ですか。』彼は、制服の眞中の紐釦を嵌めながら云つた。

『只今副知事の所へ行つて、命令書を買つて來ましたが、マースロワに面會させて頂きたいので』

『マールコワ？』典獄は、音樂の音に紛れてはつきり聞きとれないのでかう問ひ返した。

『いや、マースロワです』

『あゝ、さうですか。典獄は立ち上つて、クレマンチの亂調が響いて來る扉口へ行つた。

『マールリヤ、暫く止めて呉れないか』さながら、その音樂のために自分の生命が取られでもするか

のやうな聲を出して云つた。『話が少しも聞えないんだ。』

ピアノはハタと止んだが、不承不承な蹙音が聞えて、誰か扉口から覗いた。

典獄は静かになつたので、氣が楽になつたらしく、軟い真の太巻に火を點け、ネフリユードフにも一本取つて薦めた。

ネフリユードフは辭退した。

『マースロワに面會したいのですが——』

『マースロワですか。マースロワに御面會になるのは今日は非常に都合が悪いんですが。』と、典獄は云つた。

『何うしてとす』

『それは、つまり、あなたの過失ですよ』

典獄は、軽い微笑をたゞへて云つた。『公爵、あの女にお金をおやりになつてはいけません。おやりになるなら、私に下さい。私が保管してやりませう。昨日あなたは、あの女にお金をお與りになつたに違ひない。あの女は酒を飲んだんです。(監獄内で酒を密賣する悪弊が何うも根絶出来ないんでね)そして今日あの女は非常に酔つ拂つて、亂暴までしたんです。』

『そんなことが?』

『いや、眞實です。止むを得ず、非常制裁を加へて、獨房へ入れました。平常は極く溫和しい女ですが。何うぞお金などやらないやうにして下さい。あゝ云ふ人間は!』

昨日起つたことがネフリユードフの心にはつきりと思ひ返されて來た。彼は再びぞつとした。

『それでは、國事犯のゾーホーワに面會出來ませうか?』

『えゝ、出來ます』と典獄は云つた。その時五つか六つ位の小さな女の兒が、部屋へ這入つて來てネフリユードフの顔をじつと見詰めながら、父親の傍へ近寄つて行つた。『おや、何しに來たの』かう云つた途端、小兒は、足許を見ないで駈け寄つたので、數物に躓いた。『ホラ、轉ぶよ』

『では、面會出來ますから、参りませう』典獄は、まだネフリユードフを見詰めてゐる小兒を抱き上げてそつと側へ置き、それから控室の方へ行つた。女中に手傳つて貰つて外套を着て扉口へ行かうとする時、またクレマンチの亂調のハツキリした響きがし出した。

『彼女は音樂學校にやつてゐましたが、校規が餘り亂れてゐましてな、中々器用ではありません』かう云つて典獄は梯子段を下りかけた。『音樂會で演奏するつもりなんです。』

典獄とネフリユードフとは監獄に着いた。二人の姿が見えると直ぐ扉が開かれた。看守達は擧手の禮をして、典獄の通るのを見送つた。頭を半分剃り落した四人の囚徒が、何か一杯這入つた桶を運んでゐたが、典獄を見るとすくみ上つた。けれどもその中の一人は、憤つた顔をして、眞黒い眼を光らした。

『勿論、あゝした才能は、よく育てゝやらねばなりません、埋れさしてはなりません、然し御存じの通りの、あの小さな住居では、何と云つても無理です』典獄は、囚人共には眼もとめないで、頗りに話を續けて、足を引き摺りながら、ネフリユードフの後に跟いて、元氣のない步調で玄關を這入つた。

「面會したいと有仰つたのは、誰でしたかね？」  
 『ゾーホーフです』

『さうだ、あの女は塔にゐます。少しお待ちにならねばなりませんよ』と、彼は云つた。  
 「その間に、放火犯の、メンシヨーフ母子に面會さして頂けませんか」

『ええ、可いですが、二十一號室です。今呼びにやりませう』

「然し、檻房で面會させて頂けませんか」

『面會室の方が氣持ちが好いでせう』

「いや、檻房にして下さい。その方が興味がありますから」

『はア、何か面白いことがあるのですね』

そこへ、小綺麗な扮装をした副典獄が、横手の扉口から這入つて來た。

「君、公爵をメンシヨーフの檻房へ案内して呉れ給へ、二十一號室だ、典獄は、副典獄に云つた。『それから事務室へ又お連れ申して呉れ、僕は行つて呼んで來よう——何と云ひましたかね、あの女の名は？』」

『ヴェーラ・ゾーホーフです』

副典獄は、口髭を染めたお洒落な若者で、オードコロンをブン／＼香はせてゐた。『何うぞ此方へ』氣持ちよい微笑をもらして、ネフリユードフは云つた。

『監獄に興味がおありなんですか』

「さうです。興味があります。それに私は、罪なくて收檻されてる者があると聞きましたが、そんな者を助けるのが自分の義務だと思つてゐますからね」

副典獄は肩をすくめた。『さうです、そんな例があります』と、彼は落ち着いて、丁寧に恚う云つて、片側へ身を寄せ、第一番目の臭い廊下へ、ネフリユードフを先立てゝ入れた。『然し又、彼等が嘘を云ふこともあります、さア何うぞ此方へ』

檻房の扉は何れも開かれてゐて、廊下へ出てゐる囚人もあつた。副典獄は看守達に軽く會釋して、びつたり壁に寄り添つたり、檻房へ逃げ込んだり、或は兵隊のやうに兩脇へ手を垂れて突立ちながら役人を見送つたりしてゐる囚人等を一々流盼に見てゐた。一つの廊下を通り過ぎると典獄は、それと鐵の扉で隔つた、も一つ左手の廊下へ、ネフリユードフを案内した。此の廊下は、第一の廊下よりは狭くて暗くて、更にひどい悪臭がたゞよつてゐた。廊下の兩側には扉があつて、それには、直徑一インチ許りの小さな穴が開いてゐた。此の廊下には、哀れつほい、皺苦茶顏の、年とつた看守がたつた一人ゐるだけだつた。

『メンシヨーフは何處にゐるか』と副典獄は訊ねた。

『左の八番の檻房です』

「所で、此等の檻房は皆塞つてゐるのですか」と、ネフリユードフは訊ねた。

『さうです、たゞ一つ空いてゐるだけです』

「覗いても可いですか」と、ネフリユードフは訊いた。

「え、可いですとも」と、副典獄は愛想笑ひをして云つた。そして看守の方を振り向いて何か訊ねた。ネフリユードフは、小さな穴から中を覗くと、黒い髭をチョンポリ生やした脊の高い若い男が下衣を着て、檻房の中を彼方此方と歩いてゐた。扉の傍に誰か立つたなど聞きつけると、その男は顔を撃つて探るやうな眼附をしたが、すぐ又歩き出した。

ネフリユードフはも一つ他の穴を覗いた。すると内側から大きな恐いやうな眼が此方を見てゐるのに衝突つたので、彼は急に脇へ飛び退いた。三番目の檻房には、非常に小さい男が獄衣を頭からすつほり被つて寝臺の上に眠つてゐた。四番目のには、蒼白い、廣い顔の男が、兩膝に兩肘を突いて、首を垂れて坐つてゐた。登音を聞きつけると、その男は頭を上げて眼を見張つた。その顔、殊にその大きな眼は、絶望した喪心の色をたゞよはしてゐた。誰か自分の檻房を覗いてゐるやうだが、それに注意を向けるだけの興味すら、モウないやうな容子である。誰であらうと、何れにしても好消息は聞かれないのだと諦めてゐるやうだつた。ネフリユードフはひどく怖氣がさして、もう他の穴を覗く事は止めて二十一號室のメンショーフの檻房へ行つた。看守が錠を外して扉を開けた。首の長い、筋肉のよく發達した、頭の小さい、そして柔しい圓い眼をした若い男が、寝臺の傍に立つてゐるが、新しい訪問者があるのを見ると、憎えたやうな顔附をして、あはて、上衣を着けた。ネフリユードフは、

殊にその圓い柔しい眼附に動かされたが、その男は、慄えるやうに、怪しむやうに、ネフリユードフや、典獄や、副典獄を順々に見廻した。

「此の御方が、お前の事件を調べたいと有仰るんだ」

「へえ、有り難う御産エます」

「僕は君の話を聞いたので」と、ネフリユードフは、檻房を横切つて汚い格子窓の近くへ寄つて云つた。「君の事件に就いて、君から直接聞きたいのだがね」

メンショーフも窓際へ来て、直ぐその事件の話をし出した。最初は副典獄の容子をおづく／＼見てゐるが、段々大膽になつて行つた。副典獄が、何か吩咐けるために廊下の方へ行つて了ふと、その男は愈々度膽が据つて來た。話はごく普通の善良な田舎者らしい調子や態度で語られた。監獄の中で、忌はしい獄衣を着た者から、こんな朴直な話振りを聞くことは、ネフリユードフには寧ろ不思議に思はれた。ネフリユードフは、話を聞きながらも、絶えず四邊を見廻してゐた。藁布團を敷いた低い寝臺や、太い鐵格子の窓や、汚い、ジメ／＼した壁や、獄衣を着て、牢屋靴を穿いた、不幸な見る影もないその百姓の哀れつほい顔や姿を見てゐた。すると彼は愈々可哀さうになつて自分でも悲しくなり、此の正直者の云ふことを信じないではゐられなかつた。自分が傷つけられる以外、別に何等の罪咎もなくして捕へられ、獄衣を着せられ、かゝる所に閉ぢ込められると云ふことが實際にあり得るとは、考へるだけでも餘りに怖ろしい事であつた。尙ほ又、こんな真正直な顔をして話すことを、作り話や虚言かも知れないと考へるのは、更に一層怖ろしいことであつた。話と云ふのは恠うであつた。メンショーフが

結婚すると聞もなく、その村の宿屋の亭主が女房を誘惑して了つた。メンシヨーフは度々所を變へて到る所へ訴へ出た。けれども、宿屋の主人はその度に役人に賄賂をつかつて赦された。一度などは、腕力で女房を連れ歸つたが、次ぎの日に女は逃げて行つて了つた。彼は又呼び返しに行つた。そしてその家に這入らうとする時丁度女房の姿を見た。所が宿屋の亭主は、白ばくれて女はゐないから歸れと云つた。けれども彼は、歸らうとしなかつた。すると、亭主とこの雇ひ男とが彼を袋叩きにして、血塗れにした。其の翌日、宿屋から火が出た。そして若者とその母親とが放火の嫌疑を受けて告發されたのであつた。が、火をつけたのは彼ではなく、彼はその時、友人を訪ねてゐたのだつた。

「で、君が火をつけなかつたと云ふのは眞實かね」

「そんねエ事全く考へもしねエこんで。火いつけたのは其奴に決つてやす。小ツとベエ以前に保険つけたツツエやすからね。あんでも、俺と阿母とが火いつけると嚇かしたから、俺達が火いつけたやうに吐してゐるツツてやす。奴等と喧嘩しやしたのは本當でやす——俺アもう口惜しくつてくんなねエもんで——だけんど、火いつけやしたのは俺ぢやねエでやすよ、汝が火いつけて置いて、俺に塗り附けたんでやすよ。俺ア火事の時其處には居合せねエから知んねエが、あんでも、俺と阿母とが其處に居合せた時イ火イ出たやうにたくんだんでやすベエ」

「全くさうかね」

「神様が證人でやす。何うか、旦那様」彼は、ネフリユードフが止めるのもきかず床の上に叩頭いた。「御願エでござエます。あにも悪い事した覚えもねエのに殺されやすのでがんす」彼は俄かに顔

を震はせて、上衣の袖をまくつて、汚いシャツの袖で涙を拭きながら泣き出した。

「もう可いんですか」と、副典獄は云つた。

「え……まア元氣を出しなさい。出来るだけのことはしてあげるから」ネフリユードフはかう云つて出て行つた。メンシヨーフは、扉口の所にびたりと寄り添つて立つてゐたが、看守は邪慳に容赦もなくばかりと彼に扉を叩きつけるやうに閉めた。それでも男は、看守が扉に錠をかける間も尙ほ、小さい穴から覗いてゐた。

## 五三

ネフリユードフは、廣い廊下を通つて歸りながら、薄黄色い上衣に、短いダブ／＼したズボンを着けて、牢屋靴を穿いた囚人等が、頻りに自分を見詰めてゐる傍を過ぎると（丁度晝飯時なので、各様房の扉は皆開かれてゐた）彼等に對する同情と、彼等を權禁してゐる者等の行爲に對する憎悪と困惑の念とが相錯綜して妙な感じがした。そして尙ほ、何故か解らないが、それを平氣でたゞじつと視察してゐる自分自身を恥かしく思つた。

或廊下へ來ると、靴音魂消しく響かして一人の囚人が檻房内へ駈け込んで行つた。すると、數人の囚人がその内から出て來て、ネフリユードフの行く手に立ち塞がつて、びよこ／＼と頭を下けた。

「何うか旦那——誰某かは存じませんが——俺達のことを何とか御定め下せえまし。」

「俺は役人ぢやないよ。そんな事は俺には判らない」

「でも、あなたは外から御出でになりました方ですから、誰かにさう云つて下せえまし——何なら其の筋の人に何うか」憤つたやうな聲で云つた。「同じ人間ですもの、同情して下せえまし。何の罪もねえのに二ヶ月も此處に投り込まれてるんでけす。」

「何うしたつて？何うして？」ネフリユードフは云つた。

「何うしてだか？私達にもそれは判りませんが、兎に角二ヶ月の間かうして投り込まれてるます。」  
 「さうです、全くそれは本常なんです。ほんのちよつとした偶然な事からなんで——」と、副典獄は云つた。「旅行券がないために拘引されましたので、本籍地へ送り返してやる筈なんです。生憎其處の監獄が焼けましたものですから、送つて呉れるなど向ふから頼んで来たんです。それで、同じ旅行券のない者でも他の縣の者にそれ／＼本籍地へ送り還しましたが、此の連中だけはまだ留置してあるんです。」

「驚いたね。たゞそれだけの理由でなんですか？」と、ネフリユードフは、扉口に立ち止つて叫んだ。

すると、何れも皆獄衣を着けた四十人ばかりの群集が、彼と副典獄とをぐるつと取り圍んで、わい／＼と喋り出した。副典獄はそれを制し止めて、

「誰か代表者が一人出て云へ。」

脊の高い、奸人物らしい五十年配の一人の石工が皆の中から進み出た。その男がネフリユードフに話すところによると、彼等は皆、故郷へ歸るやうになつてゐたのが、旅行券がないために收監されて

ゐるので、それも、全然旅行券がないと云ふのではなく、たゞ二週間前にその期限が切れてゐたからであつた。かう云ふ例は毎年よくあつたことで、彼等は、期間が切れるまで、旅行券の書き換へを忘れてゐることが屢々あつたが、これまで、何ともそれを咎めるものはなかつた——所が、今度は突然拘引されて、まるで囚人のやうに二ヶ月間も收監されてゐるのであつた。

「私達は皆石工でやして、同じ労働組合の者でムえやす。私達の田舎の監獄が焼けたつて工事は聞きやしたが、それは何も、私達のせむぢやムえやせん、何うかお助けなすつて下せえまし。」

ネフリユードフはじつと聞いてゐたが、然し、此の奸人物のおやぢの云ふことがよく了解めなかつた。彼はこの男の頬を這つてゐる、大きな暗灰色の脚の澤山ある風に注意を奪はれてゐた。

「何うしたんでせう。それだけの理由で、そんなことが出来ますかね」ネフリユードフは副典獄を振り返つて云つた。

「さうです、皆故郷へ歸してやらなければならぬのですが。」副典獄はたゞ平氣な顔で云つた。

「何でも忘れてるか何うかしてゐるんですよ」副典獄が云ひ終らないうちに同じく獄衣を着た一人の小柄な神経質らしい男がまたその群れの中から出て来て、妙に口を歪めて、何の理由もなく虐待されてゐることを訴へ始めた。

「犬よりひどいんで……」と彼は云ひ出した。

「おいこら、餘計なこと云ふな、黙つてろ、黙らないとひどいぞ……」

「ひどいが何でえ」小柄な男は自棄氣味になつて叫んだ。「俺達に何の罪があるんでえ？」



「静かにせんか」副典獄は怒鳴つた。すると小男は黙つて了つた。

「だが、これは一體何うした譯なんだらう」ネフリユードフは檻房を出ながら獨りで考へた。檻房の穴から數百の眼で見詰められたり、また囚人等と出會つたりすると、彼は鞭打たれるやうな感じがした。

「全然冤罪な者をよくまあ懲處所に投り込んで置かれたものですね、廊下を離れた時ネフリユードフは聲高かに云つた。

「では、何うしろと有仰るのですか、彼奴等は中々虚言を云ひますからね。彼奴等の云ふことばかりを聞いてゐたら、皆無罪ですよ。」と、副典獄は云つた。「尤も、中には全く冤罪で收檻されてゐる者もあります。」

「所で、今の石工等は冤罪ですね。」

「え、彼奴等はまあさうです。だが囚人の中には恐ろしく心の曲つた奴がゐます。中には嚴重に監視しなければならぬやうな、無茶な、亂暴な奴がゐます。昨日も丁度そんな奴が二人罰されました。」

「罰、何處罰です？」

「命令によつて、棒の筈で打つたのです。」

「然し、體刑は廢止されてゐますが。」

「いえ、權利を剝脱されたものに對しては可いのです。彼等には尙ほ適用されるのです。」ネフリユードフは、昨日玄關で待つてゐる間に見た光景を思ひ出して、あの時は、丁度その刑罰が行はれてゐた

のだなと始めて事情を知る事が出来た。すると、奇怪な、陰鬱な、惑亂した、そして身體がフラフラして吐氣を催すやうな、ごつちやになつた感じが前よりも一層強く彼を捉へた。

副典獄の話には耳もかかず、あたりを振り向かうともしないで、彼は急いで廊下を出て、事務室へ行つた。典獄は、その事務室で他の仕事に取り紛れて、ゾーホーフを呼びにやることは忘れてゐた。ネフリユードフが這入つて行くと、すぐ彼女を呼びにやる約束だつたことを思ひ出した。

「どうぞ、御掛け下さい、すぐあの女を迎へにやりますから」と、彼は云つた。

## 五四

事務室は二室からなつてゐた。最初の室には、大きな古びたストープと、汚い二つの窓とがあつて、一方の隅には、囚人を檢べる黒い臺があるかと思ふと、他の隅には、人間を苦める場所にはお定りの大きなキリストの聖像が掛けられてあつた。此の室には、幾人かの看守が立つてゐる。次ぎの室には二十人ばかりの男女が幾人か輪になつたり、二人相對ひになつたりして掛けながら、互に皆低い聲で語り合つてゐた。窓際には書卓が置いてあつた。

典獄はテーブルに向つて腰掛けてゐるが、自分の傍にある椅子をネフリユードフに薦めた。ネフリユードフはそれに腰を下ろして、室の中の人々を見廻した。

一番最初に眼についたのは、短いジャケットを着た嬉しさうな顔付きの若者で、その男は、眉の黒い中年増の女の前に立ちながら、始終手模様して、何か熱心に語つてゐた。その傍には青眼鏡をかけた一

人の老人が腰かけてゐて、何か頼りに話しかけてゐる、獄衣を着た若い女の手を取つてゐた。恐れずくんだやうな顔付をした小學生がその老人をじつと見詰めてゐた。一方の隅には、戀人同志が差向ひに腰掛けてゐた。女は短い綺麗な髪の活々とした表情の小粋な扮装をした、まだほんの裏若い美人であつた。男は上品な顔だちで、髪を縮らし、護謨織りのジャケットを着てゐた。二人は隅の方に腰かけてひそ／＼と語り合ひながら、戀に餘念もない様子であつた。テーブルの一番近くには、黒い衣服を着た白髪交りの女がゐた。これは同じくゴムのジャケットを着てゐるすぐ傍の肺病患者らしい若者の母親と見えて、その男の肩に頭をのせてゐた。何か云はうとしては涙で聲を曇らしてゐた。幾度も云ひ出さうとしては止めて了つた。若者は、手に紙を持つてゐたが、當惑し切つたやうに、氣難しい顔附をして、それを疊んだり、顔に押し當てたりしてゐた。その傍には、髪を短く刈つた健全さうなほんのりと色艶の好い、眼のぱつちりした小娘が、鼠色の衣服に肩衣をつけてゐた。泣いてゐる母親の傍に腰掛けて柔しく慰めてゐた。この小娘は、何かから今まで美しかつた。むつくりした眞白い手、短い縮れた髪の毛、キーンとした鼻筋、それから唇。だが分けてもその顔だちの中で一番人を惹きつけるのは、柔しい、素直さうな茶褐色の眼であつた。ネフリユードフが部屋に這入つて行くと、その美しい眼はちよつとの間母親から外れて、彼の視線と出合つた。然しすぐまた母親の方へ振り返つて何か話しかけた。戀人同志から餘り遠くない所では、黒い髪をボヤ／＼させた陰気な顔の男が、スコブツイ宗（去勢する宗旨）の者らしい、髯のない訪問者と、何かブリ／＼憤りながら話をしてゐた。ネフリユードフは獄獄の傍に腰かけて、非常な好奇心を以つてあたりを見廻した。毬栗頭の小さな

男の兒が彼の所へやつて来て黄色い聲で話しかけた。

「あなたは誰を待つてゐるの？」

此の質問には、ネフリユードフも喫驚させられたが、子供をじつと眺めて、さかしさうな注意深い眼で彼を見詰めてゐるその眞面目な顔を見ると、自分もつい眞面目になつて、知り合ひの女を待つてゐるのだと答へた。

「その方はあなたの妹さんの？」と、子供は尋ねた。

「いや、妹ぢやない」ネフリユードフは益々驚きながら答へて、「だけど、君は誰と一緒に此處にゐるの？」と、子供に問ひ返へした。

「僕ですか——お母さんと一緒です、お母さんは國事犯なの」子供はかう答へた。

「おい、マリーヤ・バヴローヴナ、コーリアをそつちへ連れて行け」此の子供とネフリユードフとが話をするのは違法だと考へて、典獄はかう云つた。

マリーヤ・バヴローヴナは、ネフリユードフの注意を惹いてゐた美しい小娘で、彼女はスツクと立ち上ると、確りした、殆ど男のやうな足取りでネフリユードフと子供との方へ近づいて來た。

「何を御尋ねしましたのでせう。誰方だか御伺ひしてましたのでムいいますか」小娘はニッコリ微笑んで、優しいぱつちりした眼に親しげな色を浮べて、ネフリユードフの顔を眞直ぐ見入りながら訊ねた。非常に無邪氣で、自分の身が何であらうと少しも介意はずに、誰とでも皆兄妹のやうに馴れ／＼しくせずにはゐられない性質らしかつた。

「この兒はそれは何でも聞きたがるのでムいますよ」と、女は、こぼれるやうな美しい柔しい愛嬌を含んで子供を見ながら云つた。子供もネフリユードフも微笑ますにはるれなかつた。

「誰に會ひに來たかつて尋ねられてゐたのです」

「マリーヤ・パウロヴナ、知らない人と口を利くのは規則違反だよ、知つてゐたらう」と典獄は云つた。

「はい、承知致しました」と、云つて女は、ムツクリした眞白な手で、コリアの小さい手を取りながら、肺病らしい若者の母親の所へかへつて行つた。ネフリユードフはじつとそれを見送つてゐた。

「あの小さな子供は誰の子なんです」と、ネフリユードフは典獄に尋ねた。

「あれの母は國事犯ですが、あの兒は此の監獄で産れたんです」と、典獄は、自分の監獄が他と何

麼に違つてゐるかを指摘して誇るかのやうに、嬉しうな調子で云つた。

「そんなことが出来るのですか」

「え、出來ますとも、それから、あの兒も今度、母親と一緒にシベリアへ行くことなにつてゐます。」

「そして、あの若い女は何です？」

「その御質問にはお答へ出來ません」典獄は肩を揺つて云つた。「やア、ゾーホーワが來ましたよ」

五五

室の後ろの扉を開けて、よろ／＼した足附きで、瘦せた黄色い顔色をしたウエーラ・ゾーホーワが、大きな柔しい眼をして這入つて來た。

「よく來て下さいました」彼女は、ネフリユードフの手を取つて云つた。「あなたは妾を覚えてらつしやいますか、さあ腰を掛けませう」

「こんな所で、お會ひしようとは、思ひがけないことでした」

「だけど、妾は大變幸福ですよ。本當に愉快で愉快で、此の上何も望まうとは思ひません」と、ウエーラ・ゾーホーワは見すほらしい、皺苦茶になつた胸衣のカラーに巻れた瘦せこけて筋張つた頸を振りながら、大きな柔しい圓い眼に驚いたやうな色を浮べて、ネフリユードフをじつと見詰めて云つた。

何うして監獄に入れられたのかとネフリユードフは、彼女に尋ねた。

すると彼女は非常に興奮して、入獄の顛末を語り始めた。彼女の話には、主義の鼓吹とか、階級打破とか、社會的團結とか、本部とか支部とかいふやうな特種の詞が澤山交つてゐた。彼女はそんな詞は誰でも知つてゐるやうに思つてゐるらしくたが、ネフリユードフには、新しい詞であつた。彼女はネフリユードフは屹度興味を以て聞くに相違ないと思ひ込んで、革命運動の秘密をすつかり話して丁つた。ネフリユードフは、彼女のみじめな小さな頸筋や、薄い亂れ髪などを見詰めながら、一體何の爲

めにこの女はそんな突飛もない事をしたのだらう。そして又、何のためにそれを自分に打ち明けるのだらうと不審に思つた。彼は、彼女を哀れに思つたが、何等犯せる罪もなく檻禁されてゐる百姓のメンションを哀む程ではなかつた。彼女の心が混乱し切つてゐるのは不憫であつた。彼女が自らも丈夫を以て任じ、主義の遂行のためにはいつでも生命を捨て得ると考へてゐることは明かであつた。然し彼女は、その主義が何であるか、若しくは、それは何うすれば貫徹出来るかと云ふことは、殆ど説明は出来なかつた。

ゾーホーワがネフリユードフに面會を求めた用件と云ふのは、次ぎのやうなことであつた。彼女の友達であるシューストワと云ふ娘が、彼女の云ふ所によると、その娘は支部にすら屬してゐないのに、たゞ他の者から預つてゐた或秘密の書籍や書類を持つてゐるのを発見されたために、五ヶ月間、彼と一緒に捕縛されて、ペトロパーウロフスキの城砦監獄に收檻されてゐるのだつた。ウエーラ・ゾーホーワは、その友達の捕縛されたのに就いては、自分も多少の責めを感じてゐた。それで、上流社會に交際のあるネフリユードフに、何とかして、友達が放免になるやうに盡力して貰ひたいと懇願するのだつた。

尙ほ又、ゾーホーワは、もう一人の友達の、グイルケーウツチ（これも同じくペトロパーウロフスキ城砦監獄に收檻されてゐた）と云ふ男が、その親に面會が出来るやうに、そして、その男の研究に必要な學術書を手に入れることが出来るやうに、許可を願つて見て呉れないかと頼んだ。ネフリユードフは、ペテルブルグへ行つたら出来るだけの盡力をしようと約束した。彼女が自身の

ことに就いて語つたところはかうである。彼女は産婆學校を了つてから、革命運動に熱中してゐる一團と關係するやうになつた。最初はすべてがうまく行つた。所が、急に宣言書を書いて、各工場で主義の鼓吹を始めると、忽ち頭領株は捕縛されて、書類が押収されたので、随つて關係者は皆逮捕されて了つた。

「妾もそれで捕まつたんです。流しになるんです。ですけど、そんなこと何でもありませんわ。妾は全く幸福なんです」彼女は、それでも寂びしげに微笑みながら語り終つた。

ネフリユードフは、眼のぼつちりした小娘のことをちよつと訊ねて見た。するとゾーホーワは、あの娘は、或將軍の娘で、長らく革命黨に關係してゐて、憲兵を狙撃した罪で入獄したのだと語つた。彼女は同志の人達と一緒に或家に住んで、其處で秘密出版をしてゐた。と、或晩、警吏がその家を探索に來たので、居合はした連中は各自に防禦しようとして、燈火を消し、證據物を破壊し始めた。警吏は突入して來た。すると、同士の中の誰かが發砲して、憲兵の一人に致命傷を負はした。審問が開かれた時、この娘は、發砲したのは自分であると云つた。實はピストルなんか一度も手にしたこともなく、蛇一匹傷付けようとしたこともなかつたのであるが、彼女は飽までも云ひ張つて、そして今は、西伯利亞へ服役すべき宣告を受けてゐるのであつた。

「犠牲的な、實に立派な人格ですね」と、ゾーホーワは、稱讚するやうに云つた。

第三の用事は、マースロワに就いての話であつた。彼女はマースロワの生活と、ネフリユードフと彼女との關係に就いての話を——この話は、獄内ではもう誰も彼も皆が知つてゐたので——知つてゐた。

それで、マースロワを國事犯人の室へ移すか、でなければ、今丁度監獄病院には澤山の患者がゐて、臨時看護婦が要るから、その方へ廻して貰ふように手続きされたがよからうと忠告した。ネフリユードフは、この忠告を非常に喜んで感謝した。そして、その通りに必ずやつて見ようと思つた。

五六

やがて典獄が立ち上つて、もう時間が切れたから、囚人も面會人も別れねばならぬと云つたので、一同は皆話を止めた。ネフリユードフは、ゾーホーワに別れて扉口の所へ行き、ふと立ちどまつた——眼前の光景を眺めて。

『皆さん、時間です、時間です』と、典獄は、立つたり坐つたりして云つてゐた。典獄のこの命令は、その部屋にゐた囚人等に、却つて強い興奮を呼び起させたので、誰一人歸らうとする者はなかつた。或者は立ち上つたまま、で立ち話を續けて居り、或者は尙ほ腰掛けたまま、話し込んでゐた。僅か二三人だけが泣きながら暇乞ひをしてゐた。中で最も哀れに思はれたのは、肺病患者の母子であつた。息子は、紙の一端を頻りに捻りながら、難しい顔をして、母の悲みに動かされまいと一所懸命にじつとこらへてゐた。母は、愈々別れの時間が來たと聞くと、頭を息子の肩にあて、咽び泣きしながら、あたりに響く程鼻を擧げた。大きなぼつちりした眼の娘——ネフリユードフはこの娘を見守らずにはゐられなかつた——は、泣いてゐる母親と向ひ合ひに立つて、柔しい調子で何か云つて頻りと慰めてゐた。青

眼鏡をかけた老人は、自分の娘の手を握つたまま立つて、娘の云つてゐる詞に一々頷いて答へてゐた。若い戀人同志は、起ち上つて、手を握り合ひ無言でじつと互の眼を見入つてゐた。

『あすだけは、樂しかりさうなことをしてゐるな』と、ネフリユードフの傍に立つてゐた、短い上衣を着た若い男が、矢張りこの別れの光景を見てゐて、戀人同志を指しながら云つた。

ネフリユードフと若い男とが自分達の方をじつと見てゐることに感附きながら、その戀人同志は——護謨の上衣を着た青年と美しい娘とは——腕を伸ばして、互に抱き合つて、再びぐる／＼と踊り廻つた。

『今夜あの二人は監獄で結婚して、女は男に従いて西伯利亞へまで行くんださうです』と、若い男が云つた。

『何ですあの男は？』

『流刑の宣告を受けた囚人です、少しは樂しませてやらなければね。餘りに可哀想なんですから』若い男は、肺病患者の母親の咽び泣きの聲を聞きながら、つけたした。

『さあ、皆さん、何うか歸つて下さい、でないと、止むを得ず厳しい處置をしなければならなくなりますよ』と、典獄は幾度も／＼同じことを繰り返しながら云つた。

『さあ、何うぞ』彼は、氣弱な愚圖ついた調子で云つた。『もう本當に時間は切れて了ひましたよ。判りましたかね、もうこれ以上は絶対に猶豫出來ませぬぞ……さあ最後のお頼みです』と、彼は紙袋を取り出してそれに火をつけながら、弱り切つた調子で繰り返した。

監獄の制度は、何等の責任を感じずに、他の者を苦めても可いやうに工夫されてゐて、それがもう長い間の不自然な習慣となつてゐるのであるが、それでも追に典獄は、眼前にその哀れな別離の有様を見ると、自分もその悲みを起させる罪作り役の一人だと思はずにはゐられなかつた。典獄がそれに依つて自らひどく苦められてゐるさまは、はた眼にもあり／＼と見えた。

遂に、囚人と面會人とは別れ始めた——一方は内側へ、一方は戸の外側へ。護謨織りのジャケットを着た男達は出て行つて了つた。肺病患者の若者も、ボヤ／＼した髪の毛の青年も、マリーヤ・バヴローヴナも、監獄で産れた子供を連れて出て行つた。

面會人達もまた出て行つた。青眼鏡をかけた老人は、重さうに足をひき摺つて行き、その後からはネフリユードフがついて出た。

『實に奇怪至極なことだ』と話好きな青年は、ネフリユードフと並んで階段を下りながら、前の話の續きのやうに云つた。『でも、典獄には感謝せねばなりませんね、あの男は、親切な好人物で、無闇と規則にばかり拘泥はせず、幾らか大目に見てくれたのですから、少しでも餘計話がしてゐれば、みんなはどれだけ慰めになるか知れませんか』

自分からメジーンツェフと名告つたその青年と語りながら、ネフリユードフは玄關へ出た。其處へ典獄が草臥れたやうな足取りでやつて來た。

『マースロフに御會ひになりたいのでしたら何うか明日來て下さい』と、彼は殊更ネフリユードフへは丁寧にしようと思つてゐるらしい様子で云つた。

『承知しました』と答へて、ネフリユードフは急ぎ足で其處を出て行つた。實際罪もなく捕へられてゐるメンシヨーフの苦みは、本常に恐ろしい事に思はれた。何等の理由もなく自分を苦める人達の慘酷さを見て、是非信じなければならぬ神や善に對して、不信や疑惑を懐くやうになつたら、それこそ身體の苦痛より更に戦慄すべきことになるのだ。

又、單に旅行券の日限が切れてゐたといふだけの理由で、監獄に放り込まれて、不面目と苦痛とを受けると云ふことも恐ろしいことである。同胞を苦めることを職業としながら、それが大切な有益な義務を果してゐるのだと信じてゐる慘酷な獄吏の存在せねばならぬことも恐ろしいことだ。然も、何よりも、あの病身らしい、年とつたお人好しの典獄が、自分の家族と比べて同じやうに思はれる母や子や父や娘などが名残りを惜んでゐるのを、職業柄とは云ひながら、無理に引さ裂かねばならぬと云ふのは最も恐ろしいことだ。

『一體あんな制度は何のためになるんだらう』と、ネフリユードフは自問した。が、いつも監獄を訪問する毎に生ずる精神的眩暈から肉體の苦痛となつて行く變化の度合が、今日は常よりも一層ひどく感じられたので、自分からのこの質問に答へることが出来なかつた。

五七

翌日ネフリユードフは、辯護士をたづねてメンシヨーフの事件を語り、その辯護を引き受けて呉れないかと頼んだ。辯護士は免に角その事件を調べて見ようと約束した。そして、多分間違ひもなから

うが、果してネフリユードフが云つた通りであつたなら、無報酬で辯護を引き受けようと云つた。それからネフリユードフは、石工が百三十人、過失のために收監されてゐることを語つた。「これは一體誰の責任にあるのです。誰の過失でせう？」

辯護士はそれに對する判然した返答に困つたらしく、暫く黙つてゐたが、

『誰の過失？誰の過失でもありませんね』と、やがてきつぱりと云つた。『検事に訊けば、知事の過失だと云ひます、知事に訊くと検事を責めるんです。つまり誰の過失でもないのです』

『私は、丁度これから副知事の所へ行きますから、話して見るつもりです』

『やア、それや駄目です』辯護士は微笑しながら云つた。『あの男は實にどうも。(あなたの御親戚でも御朋友でもありませんまいな。)—露骨に云へば、まア歿分曉漢ですよ。それでゐて、狡猾いと來たら御話しになりませんね』

ネフリユードフは、副知事のマースレニコフの方でもこの辯護士の悪口を云つてゐた事を思ひ出したので、それには返事もしないで、そのまゝ暇乞ひして、マースレニコフの宅へ出掛けた。彼は二つの事件を頼まねばならなかつた。監獄病院へマースロワを移すこと、旅行券がないと云ふだけで、他に何の罪もなくして收監されてゐる百三十人を救はねばならぬと云ふ事とであつた。ネフリユードフは、自分の尊敬しない人にこんなことを頼むのは、嫌やであつたが、他に手段もないので、止むを得ずさうすることにしたのである。

ネフリユードフは馬車を驅つてマースレニコフの家に行くと、玄関前に澤山な馬車が屯ろしてゐる。

のを見て、成程今日は、自分も招待されてゐた此の家の妻君の在宅日であることに気がついた。やがてネフリユードフの馬車を玄関先きへ驅つた時、一人の婦人が禮帽禮服の家従に送られて、入口の階段を下りて來た。婦人は、後ろの裳を掲げて、細い足首と、黒い靴下とを見せながら、滑かな足附きで歩んで來た。澤山な馬車の中には、ネフリユードフに見覚えのあるコルチャーギン家の幌馬車もあつた。灰色の頭の、頬の赤い駟者が見知りの紳士には何時もするやうに、ネフリユードフにも帽子を取つて丁寧に、然し馴れくしい容子で腰を屈めた。ネフリユードフがまだ案内を乞はない中に、マースレニコフが、大切なお容、即ち階段の中途まで、はなく、すつかり下まが送つて來ねばならない所のお容と連れ立つて、敷物を敷いた廣段まで出て來た。その非常に大切なお容の軍人は、今度市に建てられる育兒院の慈善金を募るために企てた富鐵の事を佛蘭西語で話しながら、これは婦人に取つては非常に善い仕事であると云ふ意見を頼りと説明してゐた。『婦人達の慰みにもなれば、金も遣入るんだ、婦人達には慰みをさせて置くが好い、すると自然お利益にもなるんだからね』

『やあ、—ネフリユードフ君、御機嫌好う。一向お目にかゝらなかつたが何うしたんだね。』と、彼はネフリユードフへ挨拶した。『さあ、當家の夫人に挨拶して來給へ。コルチャーギンの令嬢も、ナヂーンの令嬢も見えてるよ。市内の美人がすつかりお集りだぜ』と、その大切なお客は、立派な禮服を着た自分の従者へ、肩を軽く突き出して、軍服の外套を掛けさせながら云つた。

『では、さやうなら』そして彼は、マースレニコフの手を握つた。

『さあ上り給へ、よく來て呉れたね』マースレニコフは興奮した調子で慇懃云つて、ネフリユードフ

の手を取った。デブ／＼肥つてゐるにも拘らず、マースレニコフはバタ／＼急ぎ足に階段を駆け上つた。今日は貴族の訪問を受けてゐるので、殊に彼は上機嫌なのであつた。貴族の訪問を受けると、彼はこの上もなく嬉しがるので、それは丁度、人馴れた犬が、主人に撫でられたり、叩かれたり、耳を引張られたりする時と同じやうに、尾を振つたり、蹲つたり、跳ね上つたり、耳を擦りつけたり、有頂天にぐる／＼跳ね廻つたりするのだつた。で、彼は、ネフリユードフが生真面目な顔をしてゐるのに向頓着なく、何を云つても碌々耳にも入れず、無理やりに客間へ引張つて行くので、ネフリユードフも仕方なしにその後から跟いて行つて引き摺り込まれるより外なかつた。

「用事は後の事にし給へ、何でも君の云ふ通りにしてあげるよ」と、マースレニコフは舞踏室を通り抜けながら云つて、「おい、ネフリユードフ公爵が見えたお知らせなんだ」と、立ち停りもせず、一人の家従に怙／＼云ひつけた。家來は急いで彼等の傍を通り越して、飛んで行つた。

「何でも君の云ふことには盡力するよ、だがまづ妻に會つて呉れ給へ。丁度それ、此の前は到頭妻に會はせずに歸して了つたんだからね」

二人が客室へ入つた時には、己に家従が、ネフリユードフの來た事を知らせてゐたので、そこに並んだ色々なボンネットや東髪頭などの間から、副知事夫人の、アンナ・イグナチエウナのにつこりと微笑んだ顔が、ネフリユードフの方へ眼を輝かしながら待つてゐた。

客間の片隅の方には、數人の貴婦人が、茶卓を圍んで腰を掛け、そしてその近くには幾人かの軍人や文官が立つてゐた。男女の笑ひ聲が絶えず起つてゐた。

「まあお珍らしいこと、もうすつかりお見限りかと思つてました。何か失禮なことでもしたのではないかと、それは／＼心配してましたのよ」と、これまでさう親しくもなかつたのに、餘程の馴染みでもあるかのやうな、馴れ／＼しい詞をかけて、イグナチエウナは此の新しい客人に挨拶するのだつた。

「皆さんおちかづきでゐらつしやいますか。チリヤーエウサヤカ夫人、チエルノーフさん。さあもう少し此方へ寄つて頂きませう。ミツシーさんもネ、此の卓へいらつしやいます。お茶を差し上げますから、それからあなたも」と、ミツシーと話してゐた軍人に、その名前をちよつと忘れたらしい様子で云つて、「さア此方へいらつして下さい……公爵お茶を差し上げませうか」

「わたしは、何うしても、何うしてもあなたに御讚成することは出来ません、それはごく簡単なことよ、あの方は少しも愛してゐらつしやらないんですから」と、一人の婦人が慥懣事を云つてゐるのが聞えた。

「でも、あの方は、タート(果物入りの菓子)を愛してらつしやるわ」

「まあ莫迦／＼しい、そんな調戲じやうだんばかり有り仰つて」と、金や寶石をびか／＼光らした、絹物づくめの、もう一人の婦人が、笑ひながら云つた。

「タートも、ビスケットも可いけど、少し軽すぎますわ。わたしはもつと他の物を愛したいと思ひますのよ」

「あなたは、すぐ田舎へいらつしやるのでせう」



「えい、今日限りでお別れですの、だからわたし參上つたのがすわ」

「さうですか、田舎は本當によございますのね。そして今は春の眞盛りですもの」  
よく似合つた黒い縞縞の衣服を着て、帽子を被つたまゝのミツシーは、いつもより今日は非常に美しく見えた。

彼女はネフリユードフを見ると、さつと顔を赧らめた。

「おや、あなたはもうお出發になつたかと思つてゐましたわ」と、彼女は云つた。

「出發たうとしてゐたんです。所が急に用事が出来てまだ愚圖ついてゐるんですが、今日もその用事で此處へ來たんです」

「では、母の所へも少しは御出で下さいましな。母はあなたへ御目にかゝりたいと云つてますのよ」と、彼女は好い加減な處言を云つたが、ネフリユードフがそれに感付いたと知ると、尙ほ一層顔を眞赧にした。

「お伺ひせねばなりませんので、何分時間がありませんもので……」と、ネフリユードフは、彼女が顔を赧らめたのには少しも氣附かない様子をして、暗い顔をしながら云つた。

ミツシーは、ぴくりと眉を立て、肩を揺つて、洒落れた風采をした士官の方へ振り向いた。その士官は、ミツシーが持つてゐた空の茶碗を掴んで、椅子の角にちやりと剣を打突けながら、男らしさを見せるやうな風をして、空のコップを他のテーブルに持つて行つた。

「あなたも本當に育兒院へ御寄附なさらないけりやなりませんよ」

「お断りはしません。然し私は、富籤の方にだけ寄附したいと思ひます。その方を十分に景氣づけたいんです。」

「併し、大丈夫ですか」と、容笑ひしながら他の一人が口を入れた。

アンナ・イダナチエーウナは、自分の「在宅日」が非常な成功だったので、林頂天に喜んでゐた。

「ミツシーが申しましたが、あなたは監獄のことに大變御盡力なすつてゐらつしやいますさうですね、あなたの御心持は私によく判りますの」と、彼女はネフリユードフに云つた。ミツシー（彼女は自分の肥つた夫の「リースレンニコフ」の事をかう呼ぶのである）にも色々過失はありますけど、御存じの通り、根は非常に柔しい男なんで御座いますよ、可哀相な囚人等を皆自分の子供のやうにして、少くも陰日向なく痛はつてゐます。本當にあの人の親切つて云つたら……」

と、彼女は云ひかけたが、夫が囚人達を苦刑にするやうに命令したことがあるのを知つてゐるので、その親切を何う證明したら可いか、ちよつと思ひつかないので、言葉を切つた。そして丁度そこへ、弓形にライラック色のリボンをつけた小皺の寄つた老婦人が入つて來た方へ微笑みながら急に顔を向けた。

義務や習慣上云はなければならぬことになつてゐる無意味な世辭や挨拶を一通り陳べて了ふと、ネフリユードフは、リースレンニコフの方へ行つた。

「少し折入りつて話したいんだが」

「さうか。で、何の話だね。まア此方へ來給へ」

二人は、狭い日本式の客室に入つて、窓際に腰掛けた。

五八

『さあ、何でも聞くよ。煙草は何うだ。が、ちよつと待て、そこらを灰だらけにしてはならんから』と、云つて、マースレンニコフは、灰皿を持つて來た。『さあよし』  
『御願ひしたい事が二つあるんだ』

『うム』

マースレンニコフの顔には、忽ち困つたやうな暗い表情が現れて、犬が主人から耳裏を引張られた時のやうな嬉しさうな有頂天な容子は、すつかり痕形もなく消えて了つた。いろ／＼な聲が客間の方から聞えて來る。一人の女の聲で、『そんなこと信じません、何うしたつて信じません』と、云つてゐるのが聞えた。一方では、男の聲で、ウオロレット・伯爵夫人や、ウキクトル・アブラクシンの名を度々引き合ひに出して何か話してゐた。又別な方から笑ひ聲に交つてがや／＼云ふ聲が聞えて來た。マースレンニコフは客間の話し聲とネフリユードフの話とを一緒に聞き取らうとして耳を立てた。  
『矢張り例の女のことでもまた來たんだがね。』と、ネフリユードフは云つた。  
『あゝ、さうか、判つた。冤罪で宣告を受けてゐるあの女のことだらう』  
『あの女を、監獄病院の方で働くやうにして貰ひたいんだよ。これは、君の命令で出來るとの事だから』

マースレンニコフは唇をキツと結んで考へた。

『それはちよつと難しいやうだね。』と彼は云つた。『然し、出来るだけ盡力はするから、明日電報で返事することにしよう』

『患者が澤山あつて、手傳ひの看護婦が要るやうな話だつたよ。』

『よろしい、承知した。何れ明日通知しよう』

『何うか頼むよ』

面白さうな多勢の笑ひ聲が客室から聞えて來た。

『ウキクトールだな、機嫌の好い時には、あの男は中々氣のきいた事を云ふからね』と、マースレンニコフは云つた。

『それから一つ御願ひがあるんだ。』と、ネフリユードフは云つた。『旅行券の日限が切れたと云ふだけで、石工が百三十人收檻されてるが、もう一ヶ月以上もそのまま放擲してあるんだよ。』彼は、その事件の顛末を語つた。

『何うして君はそれを知つたんだ。』とマースレンニコフは、一種不安な不快な顔色をして訊ねた。

『或る囚徒に會ひに行つたら、歸りがけにその連中が出て來て、廊下で僕を取り巻いて頼んだんだよ。』

『何と云ふ囚徒に會ひに行つたんだい。』

『冤罪で收檻されてると云ふ百姓にだが、その事件は辯護士に頼んで置いた。然し石工の方は、まだ

そのまゝだ。旅行券の日限が切れたと云ふだけで、他に何も罪のない者を禁錮して宜いものかね、それから——」

「それは検事の關係區域だよ」と、マースレンニコフは少しむつとした様子で遮つた。「そこでさ、君等が公平無私と稱する裁判組織が何處ものであるかと判るだらう。一體検事の職責は、時々監獄を訪ねて、囚人等が果して法律の條文通りの刑に就いてゐるか何うかを調べねばならないんだ。所が彼奴等は骨牌遊びばかりやつてるよ。それが彼奴等の仕事なんだからね。」

「すると、君には、今の一件は何うすることも出来ないのかね」と、ネフリユードフは、辯護士が副知事にきけば屹度検事の責任にすると云つたのを不圖憶ひ出しながら、落膽したやうな調子で云つた。「いや、僕に出来ないこともないさ、早速調べて見よう」

「それぢや愈々彼の女のためによくないわ。お氣の毒ね、人身御供に上つたんだわ」と、一人の女の聲が客間から聞えて來た。すると、それには全く無頓着な調子で、

「益々結構至極だ。僕も矢張りこれだ」と、一人の男の聲が別の方から聞えた。それに續いてまた一人の女が何か持つてゐるものを男に取られまいとしながら、笑ひ巫戯けてゐる聲がした。「いけません、いけません、何うあつてもいけませんてば」と、女の聲が云つた。

「では宜しい、承知した。盡力しよう」と、マースレンニコフは繰り返した。そして、トルコ玉の指環をはめた白い手に持つてゐた紙巻を消した。「では婦人の仲間入りをやらう」

「ちよつと待つて呉れ」と、ネフリユードフは、客室の扉口に立ち止つて云つた。「昨日監獄では、體

刑になつたものがあつたと云ふことだが、本當かね」

マースレンニコフは、さつと顔を赤めた。

「君は色々なことを探してゐるんだね、いや、そんな風だと、もう君を監獄に出入り出来ないうやうにするよ。さあ來給へ——アンナが呼んでるよ」と、彼はネフリユードフの腕を取りながら言つた。そして再び、大切な貴いお客の訪問を受けた時と同じやうに喋り出した。然し、今度は嬉しいからではなく、不安な氣分を紛らさうとするためであつた。

ネフリユードフは、捕へられた腕を振り拂つて、誰へも一言の暇をひも云はず、たゞ體ぎ込んだ顔で、客間を素通りしながら、そのまゝ玄關へ下り、飛んで來た家礎には目も呉れず、さつさと邸内を出て行つて了つた。

「あの方は何うなさいましたの、何を話してらつしやいましたの。」と、アンナは、夫に尋ねた。

「あれが佛蘭西流なんですわ」と、誰か云つた。

「佛蘭西流——あれが——まるで阿弗利加風ぢやなくて？」

「だけど、あの方は、いつもあんな風なのよ」

歸る者があつたり、新しく入つて來る者があつたりして、お饅舌は、何時までも續いた。そして丁度都合が好いので、それから後の話題は、ネフリユードフのことで持ち切つてゐた。

その翌日、ネフリユードフは、絛章つきの地厚なすべくした紙へ、綺麗なしつかりした書風で認め、封臘で堅く封をしたマースレンニコフからの手紙を受け取つた。監獄病院へマースロッツを引き取

つて呉れるやうに、その院長に手紙を出して置いたから、多分ネフリユードフの希望は達しられるであらうと云ふ文意であつた。その末に『君の親愛なる舊友マースレンニコフ』と、太いしつかりしたしやれた花文字で書いてあつた。『馬鹿』と、ネフリユードフは、思はず口走らすにはゐられなかつた。殊にそれは『舊友』と云ふ文字を見ると、マースレンニコフが、道徳上から云つて汚らしい耻づ可き位置にありながら、尙ほ自分を重要な人物だと心得、そして又、實際はネフリユードフに諛る譯ではなく、少くとも、ネフリユードフを舊友と呼ぶのは餘り誇りでもないと云ふことを示さうとして、殊更ネフリユードフに卑下してゐるのが感ぜられたからであつた。

## 五九

最も廣く世間に行はれてゐる迷信の中で、人間は皆それ／＼一種特別な偏固な性質を持つてゐるものだとしてゐることも、その一つである。例へば、あの人は親切だとか、薄情だとか、伶俐だとか、馬鹿だとか、熱心だとか、冷淡だとか一概にかう決めて了ふことである。なる程、あの男は、薄情な所より寧ろ親切な性質が多く、馬鹿な所より伶俐な點が多く、冷淡な所より熱心な性質が多いなどは云へるかも知れない。然し、あの男は親切で伶俐だが、あの男は馬鹿で悪い根性だなど、はつきり善惡の二種に人間を區別して了ふのはよくない。所が、我々はそれをよくやるのだ。實に間違つた話だ。人間は川のやうなものである。互に同じ水だ。皆同じ性質だ。然し、或水は細流となり、或水は早瀬となり、或水は靜かな流れとなり、或水は廣い川となり、そして又、澄み透つてゐたり、冷くなつて

ゐたり、温くなつてゐたり、濁つてゐたりすることはある。人間もそれと同じである。各種各様のさまざまな性質の萌芽を、すべての人間は皆一身に具備してゐる。そして、或時は一つの性質が濃厚に現はれ、或時は他の性質が際立つて現はれて、同一の人間でありながら、全く矛盾した性質を屢々現はすことがある。

人に依つては、此の變化が殊に甚だしいが、ネフリユードフも、その種の一人であつた。彼の性質のかうした變化は、肉體上精神上の二方面から來てゐた。今も丁度その變化が彼の心に起つてゐたのである。

裁判があつた後、またカチューシャと初めて面會した後と云ふものは、新しい生活の勝利と歡喜の感情は全く消え去つて了ひ、殊に最後にカチューシャと會つてからは、恐怖と嫌忌の情とが起つてゐた。何うしても彼女とは離れまい、先方で望むならば彼女と結婚しても可いと云ふ自分の決心を決して變へまいと、彼は覺悟してゐたのであるが、然しその實行は中々困難であつて、それを考へると彼は苦しくてならなかつた。

マースレンニコフを訪問した翌日、彼はまたカチューシャに會ひに監獄へ行つた。

典獄は面會を許した。が、面會室は、事務室でも辯護士室でもなく、婦人面會室であつた。

親切ではあるが、典獄は以前のやうに親しくはしなかつた。昨日ネフリユードフがマースレンニコフに色々話をしたので、その結果、屹度特別注意の嚴命が來たのに相違なかつた。

「御面會になつても宜しい」と典獄は云つた。然し先日御話しましたやうに、金は何うか與らな

いで下さい。それからマースロワを病院の方へ移すことは、知事からもさう云つて参りましたし、病院長も同意しましたから御望み通りになります。たと然し、あの女がそれを望まないんです『あんな汚い乞食の看護なんかいやなことだ。』と云つてますよ。あなたは病院へ入つてゐる患者を御存じないでせうが、それは全くひどいのです。』と、云ひ足した。

ネフリユードフは、それには答へず、兎に角面會を求めた。典獄が看守を呼ぶとネフリユードフは、その男の後から跟いて、マースロワがたつた一人で待つてゐる婦人面會室へ入つた。彼女は金網の背後から出て来て、靜かにおづ／＼した様子でネフリユードフの方へ近づいて、額をうつむけたなりで、『あの堪忍して下さいませ。ドモトリー・イワーノヴィチ様、一昨日はあんなひどいことを申し上げまして』

『堪忍など、そんなことはないよ』と、彼が云ひ出さうとするので、『ですけど、兎も角あなたは、わはしをお見捨てにならねばなりませんワ』と、彼女は遮つた。そして、恐ろしい斜視の眼でじつとネフリユードフを見詰めたが、その中には、尙ほ前日のやうな打ち解けない、いら／＼した氣持もが讀まれた。

『何故見捨てなければならぬんだい。』

『何故でもお見捨てなさらないでやしません。』

『何故だい』

マースロワは、いら／＼するやうな容子で、再びネフリユードフを見上げた。

『何故でもありません』と、彼女は云つた。

『兎に角お見捨てなさらないければいけません。わたしは本當に眞面目で申してゐるんで御座いますよ——何うしても出来ません。何うしたつてお諦めにならねばなりません』彼女は唇を顫はして、

暫くの間黙り込んでゐたが、『全く本當ですの、そんなに有仰るとわたし一層首を掻つてしまひますわ』飽くまで拒絶するマースロワの詞の中には、昔の憎しみと忘れられぬ怨恨とがあるやうにネフリユードフは感じたが、然しそれには又何か他に、立派な考へがあるやうにも思はれた。酒に酔つてゐた前は兎に角、今冷靜になつてゐても尙ほ拒絶してやまない女の心を確めると、ネフリユードフの胸に縋つてゐた色々な疑惑は急にすつかり消え去つて了ひ、カチューシヤに對して懐いてゐた嚴肅な歡喜の念が再び歸つて來た。

『カチューシヤ、僕は前に云つたことを、もう一度云はなければやならない。』と、彼は非常に眞面目な顔で云つた、『何うが僕と結婚してお呉れ、お前が厭やなら、お前が承判するまでいつまでも僕は、お前の後に食付いて行くよ。お前が行く所へは何處へでも行く。』

『ではお勝手になさいませ、わたしはもう何も申し上げません。』と、彼女は答へたが、彼女の唇はまた顫ひ出した。ネフリユードフも亦、もう何だか口が利けなくなつたやうな氣がして、黙つて了つた。

『僕は、これから田舎へ行つて、それからベテルブルグへ行くんだ』と、彼は心が落ちついてから云つた。『お前の……いや私達の事件を再審して貰ふのに全力をあげたいんだ。前の判決は屹度取り消すことが出来るよ。』

「ですけど、取り消しが出来なくつても、もう決して御心配なさいませぬ。今度の事件には関係しなかつたにしても、考へると、色々な事で、わたしがかうなるのは當然だと思ひますから。」と、彼女は涙を堪へようと、非常に苦心しながら云つた。

「それから、メンシヨーフに御會ひ下さいましたか。」突然かう云つて、彼女は悲しい自分の心を隠さうとした。「本當に冤罪だつたでせう。」

「さうだ、さう思ふね。」

「本當にあのお婆さんだつて善い人ですもの。」と彼女は云つた。

ネフリユードフは、メンシヨーフの事に就いて調べたことを皆話した。そして、もう他に何か用はないかと尋ねた。

「マースロワは、何も用はないと答へた。」

二人は再び黙つて了つた。

「それから、あの病院へ行くことは何うになりましたでせう。」と、彼女は突然斜視の眼でじつと男の顔を見詰めながら云つた。「行つても宜しいのでしたら、わたしはもうお酒なんか少しも飲みませんわ。」

ネフリユードフは、女の眼を見入つた。二人は思はずニツコリした。

「それは實に結構だ。」ネフリユードフはたゞかう云つただけで他に言葉が出なかつた。やがて彼は其處を別れて立ち去つた。

「さうだ、全く人間が變つて了つた。」と、ネフリユードフは思つた。前の疑ひはすつかり晴

れて、これまで経験しなかつた或物が感じられた——戀は、何うしても打ち勝ち難いものであることを。

マースロワは、面會を済ましてから、悪臭の流れてゐる自分の檻房へ歸り、上衣を脱ぎ捨て、兩手を前垂れの上に組み合せながら、板張りの寢臺の上の自分の場所へ腰かけた。檻房には肺病患者の女とウラヂミルの女とその赤兒と、メンシヨーフの年寄つた母親と、線路番の嬢とがあるだけであつた。教會執事の娘は、精神に異状を呈したと云ふので、前日病院に移されたのであつた。他の女囚達は皆洗濯に出拂つてゐた。婆さんは眠つてゐて、檻房の扉は開け放しのまゝであつた。線路番の嬢の子供達は外側の廊下で遊んでゐた。赤兒を抱へてゐるウラヂミルの女と、器用な手附きで靴下を編んでゐる線路番の嬢とがマースロワの傍へやつて來た。

「あの、會つて來たかエ？」と、二人は尋ねた。マースロワは高い寢臺の上に腰かけたまゝ床までとどかない足をぶらぶらさせて何とも返事をしなかつた。

「何だつてシクシク泣いてるの？」と、線路番の女房は云つた。「氣を腐らせちや駄目だよ。え、カチューシヤ、元氣をお出しよ。」彼女は、尙ほかう云つて、手速こく、編物の指を動かした。

マースロワは矢張り何とも答へなかつた。

「他の者はみんな洗濯に行つてゐるんだよ」と、ウラヂミルの女は云つた。何でも今日は、話によると、大變な施し物があるさうだよ。しこたま持ち込んだつてからね。」

「フキチーシカ」と、線路番の女房は廊下の方へ聲をかけた。何處へ行つたんだな、あの兒は」  
 彼女は、編針を、編みかけの靴下と毛糸の玉とに突き刺して、廊下へ出て行つた。この時、女囚達の聲ががやく、廊下から聞えて、部屋仲間が何れも素足に半屋靴を穿いて這入つて来た。名々巻麵麩を一つ宛持つてゐるが、中には二つ持つてゐる者もあつた。フイヨードーシヤは素早くマースロワの所へやつて来た。

「何うしたの、何か悪い事でもあるの」と、涼しい青い臍でマースロワを柔しく見詰めながら「これは、お菓子よ」と云つて、それを柵の上に置いた。

「何うしたの、婚禮するなんて云つて置いて、あの方が屹度心變りしたのだらう。」と、コラブリヨワが訊ねた。

「いえ、あの方ぢやないの、わたしが厭やなんだよ」とマースロワは呟いた。「わたしがさう云つてやつたのよ、あの人に」

「まあ、何と云ふ馬鹿だね。」と、コラブリヨワはひどく驚いた調子で云つた。

「だつて一緒に暮せなければ婚禮したつて何にもならないわね。」と、フイヨードーシヤが同じた。

「でもお前さんの亭主を御覽よ——何處までもお前さんと一緒に行くんぢやないか」と線路番の女房が口を入れた。

「それやさうともさ、私達はもう婚禮して了つたんだもの」と、フイヨードーシヤは答へた。「だれど、最初から一緒になれないと判つてゐる者と婚禮したつてつまらないわ」

「だつて、本當にまあ、そんな馬鹿をお云ひでないよ、あの方と婚禮すれば、お金が澤山出来るぢやないかね。」と、コラブリヨワは云つた。

「あの方は、「お前が行く所へは、何處までもついて行く」つて云んだよ」とマースロワは云つた。

「来たけれや來ても宜いし、來たくなけれや、來ないが宜いわ。わたしは何もそんなことを自分で頼みなんかしないんだから。今からペテルブルグへ行つて、事件の片をつけるんだつてよ。あの方は大臣さんなどゝみんな心易いのだからね、だけど、何だつて同じ事さ。わたしはもうあの人には用はないんだから。」と、彼女はかう續けて云つた。

「それやあ、もうさうだとね」と、コラブリヨワは、自分の袋の中を檢べながら、何か他の事を考へてゐたらしく、突然かう合槌打つた。

「一杯やらうぢやないか？」

「お前さんお飲みよ」と、マースロワは答へた。

「わたしはもうお酒は飲まないの。」

...

...

...

...

譯

郎

太

清

館

活

中

復

葉  
原  
藏



## 第貳編

一

マースロワの再審は、二週間内に元老院で開かれるらしかったので、ネフリユードフはそれまでにペテルブルグへ行つてゐて、控訴状を起草した辯護士が勧告した通りに、若し元老院への控訴が棄却されたら、更に陛下に上奏しようと思つた。此の事件は辯護士の言によれば、控訴の理由が甚だ薄弱であるから、前もつて、その用意をして置くが宜いと云ふことだつたし、それに、マースロワ初め多くの囚徒等は、六月の初め頃になると、西伯利亞へ護送されるかも知れなかつたので、ネフリユードフは豫て決心してゐる如く何處までもマースロワの後からついて行く覺悟であるから、そのための準備にも、各領地を一巡見廻はつて色々處分して置かねばならなかつた。彼は先づ最初に、彼の収入の大部分を穫てゐる豊沃な大領地で、一番近くもあるクスミンスキー村へ行つた。

ネフリユードフは、子供の時分から青年時代までは此の村にゐた。それから後も二度ばかり行つたことがあつた。一度は、母の吩咐で獨逸人の執事を連れて、その男と共に損益収入の清算をしに行つた。

土地の事情や、百姓と管理者(即ち地主の)との關係などは以前からよく知つてゐた。地主に對する百姓はまるでその支配に壓しられてゐる奴隸の有様であつた。その當時大學生であつた彼は、ヘンリー・ジョーヂ主義を主張し、その教理に基いて、父から直接相續した土地を百姓達に呉れてやつたことなど

もよく覚えてゐた。所がその後軍隊生活に入つて、一年に三萬ルーブリも浪費するやうな習慣になつてからは、以前の主張はけろりと忘れて了つて、母から送つて来る金の出所を尋ねようともせず、そんなことは、なるだけ考へまいとさへしてゐたことは事實である。けれども、母の死後、財産が自分の手に入つて、その處分をしなければならなくなると、再び土地所有に關して自分の態度を何う決めたらいかと云ふ問題が起つて來たのである。これが、一ヶ月前の彼だつたら、到底自分には現狀を變へることは出來ない、土地を管理してゐるのは、自分ではないなど云つてゐられもしたらうし、又さうでなくとも、領地から遠く離れた所に住んでゐて、金だけを送つて貰つて安閑としてゐられたかもしれない。が、今はもうそんな香氣である譯にゆかなくなつた。監獄との關係が愈々複雑に面倒になつて來て、西伯利亞へも行かなければならない場合であるから、それには、社會的地位や、特別に金の必要もあるのだが、それでも尙ほ、敢へて自分に不利な手段を取つて改革しようと思つた。それは、これまでの如く自分の方で直接に支配して田圃の耕作をするやうなことはせず、廉い地代で土地を皆百姓達に貸しつけて、地主の關係なしに、自由に耕作させるやうにしようと思つた。だがネフリユードフは、僞うした場合の地主と、奴隸所有者とを比較して、地主が小作人を雇つて耕作させる代りに百姓に土地を貸し與へると云ふことは、奴隸所有者が、奴隸に働かせて、その賃銀を自分で引奪るのと同じやうな古い爲方であると、幾度か考へた。で、これでは、まだ宿題の本當な解決にはならないが、それでも解決の一步を進めたので、慘酷な奴隸制度を幾分か破る一つの運動になるのだ。で、彼は此の方法で處分しようと思つた。

ネフリユードフは丁度正午頃クスミンスキーの村に着いた。彼はこれから萬事に費用を省かうと思つてゐるので、電報も打たずに停車場で二頭立ての百姓馬車を雇つた。馭者は南京更紗なんきんさらの上衣を着て、長い胴たねの下の方に帯を締めた若者だつた。此の男は、お客と話をするのが好きで、殊に、せい／＼息切れのする白い馬と、瘦せこけた關節病の馬とをノロ／＼歩ませながら、絶えず話するのが好きであつた。

馭者は、今この土地の「主人公」を乗せてゐるとは夢にも知らずに、クスミンスキー村の管理人の噂をしてゐた。ネフリユードフは、故意と自分が誰であるかを打ち明けなかつた。

「あの腹黒な獨逸人奴は」と、都會に住んで、小説などを讀んだことのある馭者は、馭者臺に斜めに腰かけて、長い鞭を頭から手元まで扱いて、その熟練振りを見せながら云つた。

「あの奴郎は、栗毛の馬車馬を三匹も買ひ込んで、夫婦合ひ乗りで飛ばしますぜ、へっ／＼！。クリスマスクリスマスの時なんざ大きな家の中へ、クリスマスクリスマスの樹を飾り立てるんですぜ。俺アお客を其處へ送り込んで行きましたがね、その樹に電氣がついてるだからおつたまけたね。此處らぢや何處を探したつて、そんなエ贅澤する奴アありませんよ。奴ア、こたま金をチヨロマカしやがつたつてエ話でやす。ふてエ奴郎でやすよ。そんなエこと、奴にアあんでもねエこんでやす。立派な土地を買ひ込んだつてエ話もありやすが。」

ネフリユードフは、管理人が土地を何處風に處分してゐるやうと、又それから何處利益を得てゐるやうと、自分はそんなことには一向無頓着である筈だつたが、胴の長い、その馭者の話を聞いてゐると、

矢張り好い心持ちはしなかつた。

非常に天氣の好い日だつたので彼はうつとりとなつた。厚い眞黒な雲が時々陽を遮つた。野良では百姓達が彼方彼方で若い燕麥あわむぎを刈つてゐた。青々とした牧場の上では雲雀が舞つてゐた。芽立ちの遅い樫かしの木きの他は、森の梢は皆、もうすつかり、滴るやうな若々しい緑で蔽はれてゐた。牧場のあちこちには斑點をおいたやうに、家畜や馬の群れが草を食ひ歩いてゐた。眼路の限り野は耕されてゐた——けれども、ネフリユードフは、時々何とも知らず一種不愉快な氣持ちに襲はれた。それは不圖氣付くと、あの獨逸人が此の領地を自分勝手に切り廻してゐると云ふ馭者の話が心の底に響つてゐたからであつた。でも愈々領地に着いて、豫ねて思つてゐた通りに處分する段になると、そんな不愉快な感じはなくなつて了つた。

事務所の帳簿を調べてから管理人の話を知ると、百姓自身の所有地が小さくて、而もそれが地主の畑の中にあるので、非常に利益が上ると云ふやうな事を露骨に話すので、ネフリユードフは、これは何うしても自分の方で耕作することはやめて、土地は皆百姓に貸してやらなければならぬと決心した。

帳簿と管理人との話に依つて、一番豊沃な耕地の三分の二は、一定の賃銀を出して労働者を雇ひ、新案の機械を用ひて耕し、他の三分の一は、一デシヤーチン凡そ我が一町一歩を、五ルーブリで百姓に耕させてゐることが分つた。つまり百姓達は、この五ルーブリのために、三度鎌を入れ、三度藪を刈り、蒔いたり刈つたりして、それを束にからけて、麥打場へ運んで行かねばならなかつたのだ。

これを賃銀の定つた労働者の爲事高に比べると、少くとも十ルーブリだけの價值はある。なほまた百

姓達は、此の領地から何によらず色々な物を取つて費へば、それだけ高い労働で辨償せねばならぬことになつてゐた。牧場の草や、森の木や、芋の葉などを費つても、それに對しては皆労働して辨償せねばならなかつたので、百姓は大方皆、事務所に労働の負債があつた。慙うして、耕地以外の土地は、この代償の労働で耕されるから、普通なら五分の利益にほかならないものを、約四倍にして百姓から取り上げる事になるのだつた。

ネフリユードフは以前からこの事は知つてゐたが、今明かにその事實を知ると、今迄何うして自分や又自分と同じ地位にある他の人達は、恧不都合な條件に氣がつかなかつたのだらうと思つて自分やなかつた。管理人の説では、今土地を百姓達に貸しつけて了ふ事になると、農具などが殆ど不用になつて、賣つた所で元價の四分の一にもなるまいし、それに百姓達は無闇と土地を荒らして了ふだらうし、つまりはネフリユードフが大變な損をする事になるのだと云ふのであつたが、それを聞くとネフリユードフは愈々百姓達に土地を貸しつけて、自分の収益の大部分を減らして、善事を行はねばならぬと堅く決心して了つた。で、自分の滞在中に、テキパキと整理して了はうと思つた。現在の作物の刈り入れや賣り方や、又不用な農具や建物などは、適當な時機を見計つて處分して呉れるやうに、管理人に委託した。そして兎も角も、百姓達に自分の意向を述べ、土地の貸し付け條件を定めて置かうと思つたので、クスマンスキー村の中心になつてゐる近隣三ヶ村の百姓達を呼び集めて呉れるやうに管理人に頼んだ。管理人の意見には少しも動かされずに自ら進んで犠牲にならうと堅く決心して、何とも云へない愉快な心持ちになりながら、ネフリユードフは事務所を出た。そしてつくづくこれから先きの自分の爲

事のことなどを考へながら、事務所の周囲をぶらついて、荒れ放題にしてある花畑——管理人の家の前には今年は澤山の花が植えてあるのに——を通り、蒲公英が一杯生え廣がつてゐるテニスコートの方へ行き、それからよく煙草を喫みに行つたことのある、そしていつぞや母を尋ねて来たあの美しいキリーモワ嬢と巫戯け廻つたことのある菩提樹の並木などを歩いた。百姓達に聞かせる話の筋道を簡単に心の中で組み立てると、彼は再び事務所へ歸り、管理人と相談をして、それからお茶の後、もう一度考へを纏めて置いて、かねて寢室に用意してある母家の部屋へ行つた。此の小綺麗な狭い部屋には、壁にベニスの風景畫が幾枚も懸かり、二つの窓の間には、姿見があつた。彈機仕掛けの蒲團のついた清潔な寢臺の傍には小さいテーブルがあつて、それには、水指しや燐寸や消燈器などが載つてゐた。姿見の傍にあるテーブルには、化粧箱やら、露西亞文及び英獨文などの刑法書類を入れた靴が開いたまゝ置いてあつた。これ等の書類は、此の田舎への旅行中に讀むつもりで持つて来たのであつた。然し今晚はもう書類を讀むには遅いし、また明朝は早く起きて、百姓達と面會する用意もせねばならぬので、直ぐ寢床へ這入つた。

部屋の隅には、古風な嵌め込み細工の花桃心木製の脇掛け椅子があつた。それは嘗つて母の寢室にあつたので、不圖それを思ひ出すと、ネフリユードフは、今迄思ひもしなかつた妙な感じに捕へられた。いつか此の家も取り毀はされて、庭園は荒れ果て、林は切り倒されて了ふのかと思ふと、尙ほ又、たとひ自分は携はらなかつたにしても、これまで造り上げるには、餘程の金がかゝつてゐるに相違ない地所や、厩や、物置きや、農具や、馬や、牛などもすつかり失くして了ふのかと思ふと、追に名残

り惜しいやうな情けない気がせずにもられなかつた。つい先程までは、こんな物を捨てるのは何でも  
ないやうに思はれたが、今は又、捨てる所ではない、土地を貸して、自分の収入半分を減すると云ふ  
ことさへ中々容易でないやうな気がして来て、兎に角百姓達に土地を貸しつけて財産を失つて了ふや  
うなことは、何うしても不心得なことであると思はれて来た。

『自分は土地を所有してはならないのか。けれども若し土地を所有してゐなかつたら、自分は一家  
の經濟を維持して行く事が出来ないのだ……然し自分はやがて西伯利亞へ行かうとしてゐるのだから、  
もう家も土地も必要はない筈である』と、或聲が云つた。とまた、他の聲がそれに答へた。『それは  
さうだ。然し、西伯利亞で一生を送る心算ではあるまい。やがて結婚もするだらう、兒も出来るだ  
らう、さうすれば矢張り親から譲り受けた時と同じやうな有福な状態で、子供達に土地を譲つてやらね  
ばなるまい。又、土地に對しても義務がある。捨てたり失くしたりするのは何でもないことだが、又  
新しくそれを手に入れるのはなかく困難だ。尙ほ又先き／＼のことをよく考へて、自分の腕一本で  
確かに生活して行けると云ふ覺悟がついてからでない、うかく／＼財産の處分などは出来ない。それ  
から實際の所、本當に自分の良心に訊いてからそんなことをしてゐるのか、ひよつとしたら世間へ誇  
りたいためにやつてゐるのではないか。』

ネフリユードフは慙うやつて、自問自答して見たが、何だか自分は、矢張り世間の人の思惑に動か  
されてゐるやうに思はれてならなかつた。そして考へれば考へるだけ疑問が起つて来て、容易に解決  
がつかさうになかつた。

兎に角まあ今晚は一先づ眠つて、このこんがらかつた考へから逃れ、明日の朝新しい頭で解決しよ  
うと思つて、彼は清潔な寢床の中に入つた。併し中々眠付かれなかつた。すが／＼しい空氣と訝え／＼  
しい月の光とが窓から射し込んで、蛙の聲がグワツ／＼と鳴きしきつてゐた。それに交つてまた、公  
園の方からと窓近い花盛りのライラックの茂みからと、一つがひのナイチンゲールが互に鳴き合つて  
ゐるのが聞えて来た。これ等のナイチンゲールや蛙の聲を聞き入りながら、典獄嬢の音楽や、延い  
ては典獄その人のことなどを、ネフリユードフは思ひ出してゐた。また、マースマロフが唇を顫はして  
蛙の啼くやうな聲で、『何うか見捨てゝ了つて下さい』と云つたことなどを思ひ出した。と、獨逸人の管  
理人が蛙の方へ行かうとするので、それを呼び返さうすると、其の途端管理人の顔は、忽ちマースロ  
フの顔に變つて、『あなたは公爵様、わたしは罪人ですの』と、云ひながらこちらへ詰め寄つて来た。  
『いや、自分はこんなことでめけてはいけません』と、ネフリユードフは考へて、不圖眼を覺ました。  
そして又自問した。

『一體自分のやらうとしてゐることは善いことか悪いことか、自分には判らない。またそんなこと  
は何うでも可いのだ。結局同じことだ。何よりもまあ眠らなければならぬ』

その中にまたうと／＼として、管理人とマースマロフとが降りて行つた後から自分もついて行かうと  
したが、それから先きは全くの夢になつて了つた。

ネフリユードフは、朝九時に眼を覺した。「主人」の身のまはりに注意をしてゐる事務所の若い書記は、ネフリユードフが起き上つたと知ると、今迄こんなに磨いたとがな程念入りにてか／＼光らせた靴と、冷たい澄み透つた清冽な井戸の水とを持つて来て、百姓達は、もう早くから集まつて待つてゐますと告げた。ネフリユードフは、寢床から飛び起きて、彼の考へを纏めた。昨夜は財産を失くして了ふと云ふことが莫迦に氣遣はれてゐたが、今朝はもうさうした心持ちは痕跡もなく消え去つてゐた。何うして昨夜はあんなに未練がましい心持ちになつたのだらうと、彼は寧ろそれを不審に思ひながら、今は自分の前途に横たはつてゐる仕事に光明を認め、喜び勇んで、思はず一種の誇りをさへ感じるのであつた。

窓から覗いて見ると、蒲公英の一杯生え廣がつた古いテニスコートには百姓達が次第に集まつてゐた。昨夜は蛙が頻りに鳴いたが、果して今日は、どんよりとした雨曇りの天氣であつた。風は少しもなく、しめやかな生温い雨が朝から降り出して、木々の梢や、葉末や又は叢などにしと／＼落ちてゐた。若々しく新芽の萌え出た草木の香ひと、もつと雨を欲しがつてゐる濕つほい土の香ひとが、窓からぶんと這入つて夜た。

ネフリユードフは衣服を着更へながら、幾度も窓から覗いて、テニスコートに集まつてゐる百姓達を見てゐた。彼等は一人／＼寄つて来ては、帽子を取つて、互に挨拶をかはしてゐたが、やがて圓く輪になつて、各自杖に凭りかゝりながら何か話し出した。と、緑色の立て襟と大きな鈕釦の附いた短い脊廣を着たが、しりとして健全さうなまだ年若い管理人が、ネフリユードフの部屋へやつて来て、百姓

達は皆集まりましたが、お食事の済むまでは待たせて置きますから——お茶なり珈琲なり、どちらでも御命じ下さい、兩方とも用意してありますと告げた。

「いや直ぐ行つて會つた方が可いと思ふから」と、ネフリユードフは云つた。が、これから愈々自分の考へを百姓達に話すのだと思ふと、何となく氣怏れがして、恥かしいやうな、思ひがけない一種妙な感じがした。彼の考へは百姓達の願ひを満足させてやらうと云ふのにあるので、即ち、ごく廉い地代で、土地を貸さうと云ふのであるから、つまりこれまでの百姓達に取つては、望んでも得られない喜ばしい事で、突然一大幸福が授けられる譯であつた。さうした恩恵を施さうとしてゐながら、尙ほネフリユードフは、何となく心に恥ぢるやうな氣がしてならなかつた。彼はやがて百姓達の集まつてゐる所へ行つて、綺麗に撫でつけてあるのや、縮れてゐるのや、禿けてゐるのや、灰色になつてゐるのやなどの色々な百姓達の頭を眼前に見ると、俄かにどきまぎして何とも口が利けないやうな氣がして來た。雨はますますしと／＼と降り續いて、百姓達の髪の毛や、鬚や、粗つほい外套の綿毛に水玉を作つてゐた。百姓達は、一體「主人」は何を云ひ出すのだらうと待ち構へながらその顔を見詰めてゐたが、ネフリユードフはたゞわく／＼して何とも云ひ出せなかつた。と、この白け切つた沈黙は、自分から露西亞農民の適當な支配者であると己惚れ、又巧みに露西亞語を使ふことの出来る、イヤに落ち着きましたした傲慢な獨逸人の管理人に依つて破られた。このが、しりとして肥りすぎた獨逸人の管理人と、ネフリユードフ彼自身と、瘦せこけた皺だらけの顔の、怒り肩の、粗末な外套を着てゐる百姓達とは、奇妙な對照を現はした。

「公爵様は、今度お前達を仕合せにしてやらうと思つてお出でになつたので——つまりお前達に廉い地代で土地を貸してやらうと有仰るのだよ。お前達には、實はその資格はないのだが」と、管理人は云つた。

「何うして資格がなかつたんエだよ。ワシイリー・カルリイチさま、俺達ア怠けて居ると云はつしやるのでムエますか。亡くなられた大奥様にや、えれい御恩になりましたと——後生を祈つて居りますだ。今度の若主人様も、俺達を見殺しにさつしやることは、なかんべエ。有難いこつてムエます」と、赤毛のお鱈舌りの百姓が云つた。

「俺達アこれまで御主人様に逆エ申したことはありましねエが、たゞ地面が足りねエのには、本當にみんな困つとりますだアよ」と、もう一人他の肩幅の廣い百姓が云つた。

「生活が立つて行けねエでがすよ」

「さうだらう。それで俺はお前達を皆呼んだ譯なんだ。で、お前達が承知なら、土地は皆お前達に貸して上げようと思ふが何うだね。」

百姓達は、何だか判らないやうな、信じられないやうな顔附きをして、皆黙つてゐた。

「何でムエます、土地を呉れしやつしやるのかね。何だかよく判かんねエが」と、中年の男が訊ねた。

「お前達へ土地を貸さうと云ふんだよ。廉い地代でお前達の自由に使へるやうに」と

「それはまア有難エこんで」と老人が云つた。

「俺等の困らねエやうに地代せエ廉けれや」と、もう一人が云つた。

「もと／＼地代を拂つて地面が借りられねエと云ふ道理はなかんべエよ」

「さうとも、地面を掘ちくつて生活を立てゝる俺達だからね」

「その方が地主様の方でも安心だんべエ。地代せエ取つとれば、何にもしねエで済むべエからよ。だけど、今まで散三罪作らつしやれたことは考へて貰へてエだ」と、云ふ壁が、チラホラ聞えた。

「罪はお前達の方にある」と獨逸人の管理人は云つた。「お前達が切々と働いて、きまりをよくつけてくれれば……」

「そんなこと俺達には出来ねエ相談だんべエ」と、鼻の尖つた老人が云つた。「何で穀倉へ馬を入れたんべエと、俺がわざと引き入れたやうに、お前さまは云はつしやるけど、ふんでも俺ア、一年よか長エ氣のする此の日ながに、日がな一日大鎌や何か振り廻はして働き疲れてゐるだから、夜になれや、ぐつすり寝込んで、馬の番なんかしてゐねエでがす。その間に馬が麥べエ食ひに行つたからつて、さうが／＼お前さまのやうに云ふもんでねエ」

「きまりをちやんとつけて置けば宜んだ」

「きま／＼つてお前さまの方では何でもねエかしんねエが、俺達の方では、ちよつ／＼のこつてねエからね」と、脊高い、色黒の、毛むくじやらの中年者が云つた。

「だから垣根を拵へると云つてゐるぢやないか」

「ふんなら、垣根を拵エる材木を呉んなせエ」と、小柄な、正直さうな百姓が云つた。

「俺ア去年、垣根を拵エベエと思つて、若木を切つてたら、お前さまはすぐとつかめエて、三月も半

へ打込んで、虱に食はしたでねエか、垣根を拵れエたお蔭はそんなもんでがすからね」

「あの男の云つてゐる事は何かね」と、ネフリユードフは、管理人に訊ねた。

「あいつは村一番の大盗賊で」と、管理人は獨逸語で云つた。「毎年、森の木を盗んでは捕まる奴です」

それからその百姓の方へ向いて、云ひたした。「お前は、人の物を大切に心掛けなくちやいけない」

「俺達がお前さまを大切にしねエことがありましたかね」と、一人の老人が云つた。

「俺達は無理にもお前さまを大切にしなければならねエのでムエますよ、やたらと人をフン縛らつしやるからなう。俺達は、皆お前様の好いやうに何うでもなるのですがすからノウ。」

「何を云ふんだ。お前達を好いやうになんか出来るものか、お前達こそ、私達を何うかしようといつも謀らんでるぢやないか」と獨逸人は云つた。

「お前さま達をですかい。冗談でがせう。お前さまは俺イ願を打ちくちいたことを覚えてなさらうが、俺ア泣き寝入りで何うすることも出来ねエだつた。金持ちには道理が通らねエ世の中でムエますから仕方がねエだ。」

「何でも、お前達は、自分の方から法律に従ふやうにしなけりやならん」  
 慥うした口争ひがガヤ／＼と次第に募つて行つたが、それは仲間以外の者には何のことだかよく判らなかつた。けれども、百姓達の方は何と云つても矢張りビク／＼してゐるのに、管理人の方は、地位と権力を盾にしてそれを壓へ付けようとしてゐることだけは明かで、何だか苦しい光景であつた。で、ネフリユードフは、これ等の話を聞いてゐるのが堪へられなくなつたので、土地貸借の條件を決

める話に移らうとした。

「そんな話はもう止めて、さあ、土地の相談をしようぢやないか。お前達は土地を借りたが好いと思ふかね。そして全部土地をお前達に貸すとしたら、どの位の地代を拂ふかね？」

「あなた様の地面でがすもの、地代はあなた様がおきめなさつたらよかんベエ。」

そこでネフリユードフは他代の額を云ひ聞かせた。それは近隣の地代に比べると遙かに廉かつたのだが、それでも百姓達は餘り高いと云つて、彼等の間には習慣になつてゐる掛け引きをやり出した。ネフリユードフは、自分の申し出は屹度百姓達に喜ばれるだらうと思つたのであるが、百姓達は少しもそんな氣色を見せなかつた。

だが、この申し出が、百姓に取つては確かに有利であると云ふことだけはよく解つた。

話は、土地を借りる人々の問題に進んで行つた。村全體の者が借りるのか、それとも、特別な仲間の者だけが借りるのかと云ふ事になつた。そして、體力の弱い者や、地代をきちん／＼と拂はないやうな怠け者を除かうと主張する連中と、何だかその除け者にされさうな連中との間に烈しい論争が始まつた。遂に管理人が仲裁に這入るやうになり、それでやつと貸借條件が結ばれたので、百姓達は、がやく／＼話しながら、丘を下りてそれ／＼自分達の村の方へ歸つて行つた。その間にネフリユードフと管理人とは、約定を取り定めるために事務所へ入つた。萬事が、ネフリユードフの思ふまゝに、又望んでゐた通りに定められた。百姓達は、他の何の村の地面よりも三割方廉い地代で借りることが出来るのだつた。で、ネフリユードフは、土地からの収入の半分を失くしたのであるが、それでも尙ほ

彼には十分であつた。その上、林を賣つたり、農具を賣つたりして入つて来る金もあつた。かうして何も彼もうまく片がついたのであるが、まだ彼は何となく心に恥ぢることのあるのを感じた。百姓達は、言葉でこそ有難さうなことを云つてゐたが、あれで本當に満足してゐるのではなく、もつと以上のことを望んでゐるのがよく判つてゐた。それで實は、自分の収入の大半を捨て、了はうと云ふ心になつたのであるが、然し百姓達の望みは、まだそれでも満足させられてゐなかつた。

ネフリユードフは、その翌日約定書の調印を済ますと、總代に選ばれて来た四五人の年取つた百姓達と一緒に、何かまだ爲残した事があるやうな不愉快な感じを懐きながら、事務所を出て、管理人の素的な馬車(停車場から途々馭者が噂してゐたやうな)に乗つて、不満足さうな失望したやうな顔をして、首をひねりながら立つてゐる百姓達に「左様なら」と別れを告げて、そして停車場へ向つた。ネフリユードフは、何故だか知らぬが、絶えず情けないやうな、何となく心に恥ぢる所があるやうな感じがして、自分自身でも不満足でならなかつた。

## 三

ネフリユードフは、クスマンスキー村から眞直ぐ、伯母達から譲り受けた領地の方へ行つた。其處は、彼が始めてカチューシヤに出會つた村である。此處も、クスマンスキー村と同じやうな處分をしようと思つた。尙ほ又此處では、カチューシヤやその子供の事に就いても出来るだけ探つて見たいのであつた。子供が死んだと云ふ事は、果して眞實であるか、何うかを。

朝早くペノーヴォ村に行つて、伯母の家へ馬車を驅つた時、何よりもまづ驚いたのは、建物の多くが、殊に母家がひどく毀はれて、古び果てゝゐる光景であつた。鐵板の屋根は赤く錆びて、多分暴風雨のためであらうが、四五枚薄板がめくれたりしてゐた。下葺きの板は、數箇所破れてゐて、それを打ちつけてある赤錆の釘を引き抜いたら、わけもなくばらばらになりさうであつた。

入り口は兩方とも、殊にネフリユードフには忘れられない横手の入り口は、朽ち毀はれて、たゞ根太だけが残つてゐた。幾つかの窓は板で張りつけられて、執事のゐる部屋や、臺所や、厩など、何處も此處も皆剥け煤けて、壊はれかゝつてゐた。たゞ庭だけは荒れないで、こんもりと茂つた木々は、花の眞盛りであつた。櫻や林檎や梅などが咲き亂れて、丁度白雲の棚引くやうに垣根越しに見えた。生垣になつてゐるライラツクの茂みも、丁度十二年前、ネフリユードフがその時丁度十六だつたカチューシヤと一緒にゴレールキー(鬼子つこ)をして遊んで、その茂みの陰の葛麻の中に倒れて、手を引掻いた時と同じやうに、一杯に咲き匂つてゐた。又、伯母のソフイヤが、母家の近くに植えて置いた落葉松は、あの時はまだほんの短い杖程しかなかつたのが、今はもう、棟木にしても好いやうな大木になつて、その枝々は、丁度明け方のやうな、柔い黄緑色の針葉で蔽はれてゐた。庭添ひの川は今も土堤も崩れて、水車場の堰の方へ、靜かに流れてゐる。川向ふの牧場には、黒や白や飴色の牛が點々として見えた。

神學校を卒業せずに廢めた學生上りの執事は、にこ／＼しながらネフリユードフを中庭まで迎へに出た。彼は矢張り微笑みながらネフリユードフを事務所へ案内して、何か餘程嬉しいことでもあるやうにいそ／＼として戸の陰へ行つた。ちよつとの間、誰かとひそ／＼話してゐるのが聞えたが、やが



て、ステーションからネフリユードフを乗せて来た辻馬車の脚者が酒代を貰つて、から／＼鈴を鳴らしながら歸つて了ふと、あとはひつそりとなつた。と、刺繡のある百姓の仕事服を着て、耳環の代りに絹の房を下けた娘が、素足で窓の傍を通りすぎた。その後から又、一人の男が、紙裏の長靴で凸凹道を蹴立てながら追つて行つた。

ネフリユードフは、小さい窓框に凭れてその傍に腰を掛け、庭園をじつと眺めながら耳を傾けてゐた。和かな新鮮な春風が、新たに堀り返された土の香を運んで、窓から流れ入つて、汗ばんだ額に垂れかゝつてゐる髪の毛や、ナイフで切り裂かれた窓框の紙をひら／＼と弄んでゐた。

『トラ・パ・トロップ、トラ・パ・トロップ』

布を洗つてゐる女達が、間拍子を取つて、打ち棒で布を叩いてゐる響きが、川下の方から聞えて来た。その響きは、キラ／＼光る水車の貯水池の水面を渡つて遠く展がつて行き、水車場からは、ざあ／＼と落ちる水の音が聞え、惜えたやうな蛇が、ぶん／＼唸りながら、あはただしく耳の端を掠めて飛んでゐた。

ネフリユードフは、ずつと以前、まだ若い盛りの無邪氣だつた頃のことを不圖思ひ出した。

あの頃も矢張り、ざあ／＼云ふ水車場の水音や、女達が濡れた布を打ち棒で叩く響きなどが聞えた。春のそよ風は矢張り今日と同じやうに、汗ばんだ額に垂れ下る髪の毛を弄つたり、ナイフで切り裂かれた窓框の紙をひら／＼と吹き亂したりした。丁度今も飛びたつて行つたやうに、蛇がぶん／＼と耳の端を掠めて行つた事もあつた。今自分自身をあの頃の十九の少年として思ふことは何うしても出来な

かつたが、然し彼は、その時分と同じく、矢張り自分は、若々しく純潔で、自分の未来は、高遠な希望に充ちてゐるやうに感じた。と又、何だか夢でも見てゐたやうな気がして、それはもう皆過ぎ去つて了つたことではないかと思ひ返すと、彼は思はずどつとするやうな悲しさに襲はれるのだった。

『御食事は幾時頃なさいますか』と、執事は矢張り笑顔をして訊ねた。

『何時でも君の方の都合の好い時。私はまださう餓じくない。まあ村を一巡りして来よう。』

『何うか母屋の方へ御出で下さいますやうに、すつかり室内の整頓は致してありますから。外廻りがお済みになりましたら、何うか御見分を願ひます。』

『御苦勞だつた、いづれ後で行かう。所で君は、マトリヨナ・ハーリナと云ふ女を知つてゐるなら教へて呉れないか。』(これはカチューシャの伯母のことである)

『はい存じて居ります。此の村で、あの女は酒の密賣をしてゐます。私はそれを知つてゐますので、忠告したり、小言を云つたりもしましたが、取り押へるのは、何だか可哀さうですからそのまゝにして居ります。御承知の通りもう老婆でして、それに孫達もあるのですから、』と、執事は、出来るだけ主人の機嫌をとるやうに、そして、色々な自分の手落ちを許して貰はうと願つてゐるやうな表情をして、相變らず微笑みながら云つた。

『何の邊に住んでるかね、私は行つて會ひたいんだが。』

『村端れで、一番端れの家から三軒手前です。左手に煉瓦作りの小舎がありますが、それを越すと婆さんの家になります。御案内申してもよございませうが。』と、執事は柔しい笑顔をして云つた。

「いや、有難う、それには及ばない、すぐ判るだらう。それから君は、百姓達を呼び集めて置いて呉れないか、地面の事に就いて私が少し話したいことがあるからとさう云つて呉れ。」  
と、ネフリユードフは云つた。此の村でもクスミンスキー村でしたと同様に百姓達と土地の契約を結ぼう。そして、出来るなら、なるべく今夜の中に片をつけて了はうと、彼は慙う思つたのであつた。

## 四

門を出ると、ネフリユードフは、銀房の耳飾りを附けた娘が、酸模スラシヤや車前車オレバコなどの一面に生え茂つてゐる牧場の間を縫つてゐる道を歸つて来るのに會つた。娘は、長い派手な色合ひのエプロンをかけて、ムツチリした素足のまゝで、元氣よく小走りに歩みながら、左の手を前の方で打ち振つてゐた。右の手では、胸の所へ鶏を一羽抱へてゐた。鶏は、赤い肉冠トウカを顫ふるはせながら、おとなしくじつとして、眼ばかりクリ／＼させながら、黒い脚を一本出したり引込めたりして、娘のエプロンを蹴つてゐた。娘はネフリユードフの近くへ来ると、走るのを止めて、徐かに歩み出した。

そして、その前へ来ると、足をとめて、頭を後ろへ妙な風に振つて、おじぎをした。ネフリユードフが通りすぎると、彼女はまた鶏を抱へたまゝ、家の方へ駆け出した。

ネフリユードフは、とある井戸の方へ下りて行くと、粗末な汚れた百姓の仕事服を着た一人の婆さんと出會つたが、水の一杯入つた二つの桶を擔ひ棒にかけて、曲つた脊中で擔いで運んでゐた。ネフ

リユードフを見ると、その婆さんも、手桶を下ろして、前の娘と同じやうに、後ろへ妙な風に頭を振つておじぎした。

井戸を通りすぎて、ネフリユードフは村へ入つて行つた。この日は、まだ朝の十時位にしかならないのに、カン／＼した暑い日ヒツ和で、蒸し／＼と頭が抑しつけられるやうであつた。時々黒い煙が集まつて来て太陽を隠した。強い、けれどもさう氣持の悪くない肥料の臭ひがあたりの空氣を充たしてゐた。それは、丁度坂を上つて行く肥料車からも臭つて来るのであつたが、それよりも、今ネフリユードフが通りすぎようとした開けつ放しになつてゐる百姓小舎の門内にある掻き亂した肥料の堆積から殊に鋭く臭つて来るのであつた。襯衣シヤツも股引も肥料だらけになつてゐるは、だしの百姓達は、つい見かけない絹リボンの巻いてある鼠色の帽子を被つた、脊の高いどつしりした紳士が、きら／＼光る握柄ニグヒのついたステッキをこつ／＼と突きながら、村の街道を歩いて行くのを振り返つて見た。空車をがら／＼急がせながら野良から歸つて来る者は、何れも帽子をとつて會釋しながら、こんな片田舎を立派な人が通つて行くのを如何にも不思議さうに見送つた。女達は、門から飛び出して來たり、入り口の所に佇んだりして、互に指さし合つて、彼が通り過ぎるとじろ／＼と見てゐた。

ネフリユードフは、四軒目の門前を通り過ぎようとした時、丁度其處から肥料を山のやうに積んで、それに蓆をかけて結びつけてある荷馬車が、車輪をひどくがたつかせながら出て來たので、立ち止まらねばならなかつた。はだしになつた六つ位の男の兒が、それに乗るのだと云つて騒ぎながら後から追つて來た。樹皮で編んだ靴を穿いた百姓が大股に歩みながら、中庭から馬を引き出して來た。すると又、

脚の長い、灰色をした仔馬が一匹、門から飛び出して来たが、ネフリユードフを見ると、荷馬車の方へ身體を寄せた。そして、車輪に脚を擦りつけると、喫驚りして飛び上り、重い荷を引いて丁度門を出たおとなしい母馬を追ひ越して向うへ駆けて行つた。その後から又、汚れたシャツに縞の股引を穿いつて灰色になつてゐる肥料を其處等に振り落しながら、街道へ出て行つたが、やがてその老爺さんは何と思つたか門へ引き返して来て、ネフリユードフにおじぎをした。

「あなた様は、先の地主の奥様の甥御様ではあらつしやらねエか？」

「さうだ、俺はその甥だよ。」

「ようまあ来てくらしやれました。御見巡りでムエますか。」と、お饒舌りの老爺は訊ねた。「その心算で来たんだが、何うだね近頃は。」と、ネフリユードフは、ちよつと何と云つて可いか判らなかつたのでかう云つた。

「何うだつて有仰れますか？、何うにもかうにも宜エことアありませんねエでムエますよ」と、老爺はネフリユードフの機嫌をとるやうにして云つた。

「何うして宜くないのだい。」ネフリユードフは、門内へ入りながら問ひ返した。

「俺らに何で宜エことがありますべエ。年が年中悪イことばかりですア。」と、老爺は、ネフリユードフの後からついて、家の屋根下になつてゐる庭の一隅に入りながら云つた。ネフリユードフは、その屋根下に佇んだ。

「それ、あそこに居りますが、俺らは十二人の生活でムエますだ。」頭を包んだハンケチの、落ちかゝてゐるのを知らずに、裾を捲り上げて、眞黒く汚れた素足の脹脛を出して、汗を一杯かきながら、熊手で肥料の堆積を掻きならしてゐる二人の女を指さし「六ブート（一ブートは英斤三十六磅）の麥を買つても一ト月とはありませんねエが、その金が、且那樣、何處から出て來ますべエ。」

「御前の畑ではそれだけの麥は出來ないのかね。」

「俺らの畑ででがんとす？」嘲るやうな笑ひを浮べ「俺らの畑では、やつと三人口ほか出來ました。去年などは收穫つたものがクリスマスまで足りませんでしたねエだつた。」

「その時は何うしたい。」

「何うしたつて、仕方がねエから、悴を一人日備ひに出しやして、それで事務所からお金を借りやしたよ。所が、そのお金も精進祭の前にはもう費つて了やしたよ。それで今だに税金を納める事が出來ねエでゐますだ。」

「税金と云ふのは幾何なんだい。」

「俺らの家は十七ルーブリでござエます。まあ且那樣、こんねエ悲惨な生活は、自分でやつて見ねエことには判りませぬエよ。」

「お前の家に行つて見ても可いかい。」と、ネフリユードフは、中庭を横切り、熊手で掻き廻されて強い臭氣を放つてゐる黄ばんだ焦茶色の肥料の上を歩みながら訊ねた。

「宜エ所ぢやありませんねエ、何うぞいざらつしやつて下せエまし。」と云つて、老爺は、肥料の上を

裸足のまゝで素早く歩いて、足指の間から穢い液汁をじくじくと踏み出しながらネフリユードフより先きへ行つて家の戸を開けた。

女達は、頭のハンケチを直し、捲し上げてゐたリンネルの裳を下ろして、純金の袖釦鈕を附けた立派な紳士が、自分達の家に這入つて行くのを喫驚りして見ながら立つてゐた。粗末な下着一枚ツきり着てゐない小娘が二人、家の中から飛び出して来た。ネフリユードフは帽子を脱いで身を屈めながら低い入り口を潜つて内へ這入ると、すえた食物の臭ひがむつととして来て、如何にも穢いせゝこましい所であるのに、更に又、機械器が二臺までも愈々以つて所狭く据ゑつけてあつた。暖爐の傍には、袖を高く捲り上げて、瘦せた筋だらけの茶色の腕を出した婆さんが一人ゐた。

『旦那様が見巡りに来てくらつしやつたよ。』と老爺は云つた。

『ようまあござらつしやつて下せエました。』と、老婆は捲し上げてゐた袖を下ろしながら、物柔しく云つた。

『お前達がどんな風に暮してゐるか知りたいと思つて来たんだよ。』

『御覽じの通りの生活でござエます。家はぶつ倒れさうで、いつ人死にが出来やすか知んねエが、そんなでも、えんちの爺さまア、こんで澤山だべエと申しやんすで、それでまあ、みんな王様みてエに氣樂でゐますだアよ。』と、勝ち氣な婆さんは、景氣よく頭を振りながら云つた。『晝飯の支度をしますだ。働エてる衆が饑じかんべエから。』

『晝飯の御馳走は何だい。』

『俺らの晝飯だんべエか？ それや旨エもの食べますだアよ、第一番に黒麵麩と裸麥酒でやしたら、その次ぎは裸麥酒と黒麵麩でやす。』と、老婆は、半分腐れ落ちた齒を露き出して云つた。

『いや冗談でなしに眞面目にだが、お前達の食ふ物を見せてくれないか。』

『俺等が食ふものかね。』老爺は笑ひながら云つた。『俺等の食ふ物ア、ふんとに手のかゝらねエあつさりしたもんでやす。見せてあげたらよかんべエ、婆さん。』

老婆は頷いて見せた。

『旦那様は、俺等みてエな百姓の食ふ物が見なさりてエのかね。旦那様も餘程物好きだんべエ。何でもかんでも知りてエなんて。黒麵麩と裸麥酒は今申しましたど、それにお汁があります。村の女が痛風草を持つて来て呉れましたんべエ。それでお汁を拵れエました。それから馬錦薯でやす。』

『それだけかい。』

『もつと何か無エかと有仰るのかね？ それやミルクも少とべエ飲みますが』と、老爺は笑ひながら扉口の方を見ながら云つた。扉は開け放されてあつたが、屋外には男の子や女の子や赤ん坊を抱いた女などが一杯たかつて、百姓の食物を見たがる此の見馴れない紳士を見ようと込み合つてゐた。老婆は自分が慥慥風立派な紳士と語り合つてゐるのが誇らしかつた。

『まあ、俺イ等の暮しは、こんな鹽梅にみじめなもんでやす。とてもお話しにはなりましたねエよ。』と、老爺は云つて、『其處で何をしてらだアお前等は』と、屋外に集つてゐる者等を叱りつけた。

『では、左様なら。』何故か知らないが、妙に氣恥かしいやうな落ちつかないやうな氣持ちがしながら

ら彼は憐う云つた。

『こねエな汚エ所へ来てくらつしやれやして、有難エこんで御座エました。』と老爺は云つた。屋外に集まつてゐた連中は、路を開くために押し合ひながら片寄つた。ネフリユードフはその間を通つて、それから街道の方へ行つた。裸足になつてゐる二人の男の兒が、扉口の所からネフリユードフの後に隨いて来た——年嵩さの方は、始めは白かつたのが汚れて了つてゐるシャツを一枚着たなりで、年下の方は、擦り切れて色の褪めたピンク色のシャツを着て居た——ネフリユードフはその子供達を振り返つた。

『をぢさんは何處へ行くんだねエ。』と、白いシャツを着た兒が尋ねた。

『マトリヨーナ・ハリリナの所へ行くんだが、お前達は、あの女の家を知つてゐるかい？』

『ピンク色のシャツを着た兒は、何か笑ひ出した。でも年嵩さの方は眞面目な顔で問ひ返した。』

『どつちのマトリヨーナだんべエ、お婆さんの方けエ。』

『さうだ、お婆さんの方だ。』

『あア、あア、』と、彼は聲を長く引つ張つた。

『あれかね。あ、婆さんとこは、此の村の端だんべエ。伴れてつてやるべエか。なあフェードカ、一緒に伴れてつてやるべエぢやねエか。』

『あア、だけんど、馬は何うするだ。』

『馬、人せよだんべエよ。』

フェードカは領いた。三人は一緒に街道を歩いて行つた。

五

ネフリユードフは、大人よりも子供と一緒にの方が気が置けないやうに思はれて、連れ立つて歩みながら彼等に話しかけた。ピンク色のシャツを着た小さい方の兒も、笑つてばかりゐたのを止めて、年嵩さの男と同じやうに、際立つてはきくした詞で物を云つた。

『村で一番貧乏な人達を知つてゐるかい。』

と、ネフリユードフは訊ねた。

『一番貧乏してるもんかね。ミハエルが貧乏してるべエ。セモヨン、マカロフ、それからマルタ。マルタはひでエ貧乏だんべエ。』

『アニーシヤがもつと貧乏してるだんべエ。アニーシヤは、牛一匹も持つてねえぞ。あの家の者ア乞食してるでねエか。』と、小さいフェードカが云つた。

『アニーシヤは牛を持つてねエけんども、家の者ア三人こつきりでねエか。マルタの家イは五人ゐるだよ』と、年嵩さの兒は反對した。

『だけでも、アニーシヤは後家だぜ。』ピンク色のシャツを着た兒は、アニーシヤに味方して云つた。

『アニーシヤが後家ちうなら、マルタだつて後家と同じでねエか。』年嵩さの兒は云つた。『同じだよ——享主があつても、家にゐねエんだもの』

「その亭主は何處へ行つてるのだい。」ネフリユードフは尋ねた。

「半屋で虱飼つてるだ。」と、年嵩さの兒は云つた。これは、百姓仲間に一般に云はれてゐる詞であつた。

「去年、地主様の林から赤楊樹を二本盗んだ罪だんべエ」ピンク色のシャツが急いで説明し出して「そんで牢へ打つ込まれて、もう半年にもなりますべエ。おかみさんは乞食してゐるだアよ。子供が三人と、病人のお婆さんが一人ゐるだからね」と、詳しく話し續けた。

「その家は何處だい。」とネフリユードフは訊ねた。

「あの家だよ。」と、今ネフリユードフが通つてゐる街道に沿つた小徑の向うにある家を指さして子供は云つた。その家の前には、亞麻色の髪の毛をした小ッほけな幼兒が、ひよろ／＼した危ツかしい足付きで、身體の調子を取りながら立つてゐた。

「ワーシカ、まあこの餓鬼は何處エ行くだね」と呼びながら、その家から一人の汚れ切つた鼠色の百姓の爲事服を着た女が出て來た。そして喫驚りしたやうな容子で駈け寄つて來て、ネフリユードフがその子供を何うかしてはしないかと怖れでもしたやうに、ネフリユードフが近づかないうちに子供を引つ抱へて家の中へ逃げ込んだ。

これが赤楊樹を切つて牢へ入れられた男のかみさんであつた。

「よし判つた。それからね、マトリヨーナ婆さんも矢張り貧乏かい？」と、やつとマトリヨーナの家近くに來た時ネフリユードフは訊ねた。

「婆さんかね？」インにや。貧乏なんかしてゐねエよ、酒を賣つてゐるだからね。」と、瘦せた、ピンク色のシャツを着た方が、きつぱりとはねつけるやうに云つた。

愈々その家の前に來ると、ネフリユードフは、子供を屋外に残して置いて、自分だけ扉の内へ入つて行つた。家は十四呎の奥行であつた。大きな暖爐の後ろには、脊高なものは身體を十分伸ばせない程な小さな寢臺があつた。「この寢臺の上で」と、ネフリユードフは思つた。「この上でカチューシヤは子供を産んで、それから尙ほ産後の肥立ちが悪くてゐるのだ」部屋の大部分は機械で占められてゐた。婆さんとその總領の孫娘とが丁度經絲を揃へてゐるところへ低い入り口で額を打ちつけながらネフリユードフが這入つて行つた。すると彼の後について、もう二人の別な孫娘が、外から駈け込んで來て、入り口の鴨居に掴まりながら立ち停つた。

「誰に用があつて御座つたんべエ。」と、婆さんは突つ慥食に云つた。婆さんは、經絲がうまく揃はないので不機嫌であつた。それに、酒の密賣をしてゐるので、かねてから、知らぬ人が入つて來るのをひどく怖れてゐた。

「俺はこの邊の地主だが、お前に少し訊ねたいことがあつて來たんだ。」

婆さんは、ネフリユードフをじつと見詰めながら、暫く黙つてゐるが、俄かに容子を變へて、

「まあ飛んでもねエ、旦那様でムエましたか。俺イ粗忽者で、つい通りがりの人べエ思ひましたアだ。何うかまあ、勘辨ノウサツしやいませ。」と、婆さんは猫撫で聲を作つて云つた。

「實は内々で話したいことがあるんだが。」と、入り口の方をちらりと見てネフリユードフは云つた。

其處には子供達の後ろに、背せこけた蒼褪めた赤ん坊を抱へながら、力のない笑顔をして、補綴つぎはぎの小さな帽子を被つた女が一人立つてゐた。

「何を見てるだア？ まご／＼すると打つ食はずぞ。」と入り口の方へ向つて叫んだ。

「戸を閉めて出て行かつせエ。」

子供達は逃げて行つた。赤兒を抱いてゐた女が戸を閉めた。

「實は誰様かと思つてやした。それが旦那様でムエましたんで、まあ勿體ねエ。よくまあ来てくらしやれました。さア腰を掛けてくらしやれ。」と、云つて婆さんは自分のエプロンで席を拭きながら「俺わしいふんと、何處の奴郎が來せをつたかと思ふてやしたら、旦那様で御座りやした。あの御慈悲深けエ、いつも御世話になる旦那様でありました。勘辨してくらつせ。俺わしもう龜碌かめろくベエしました。もう眼もよく見えねエやうになりました。」

ネフリエードフが腰をかけると、婆さんは左の掌てのひらで右の腕の尖つた肘を支へて、その右の手に頬杖突きながら、彼の前に立つた。

婆さんはキン／＼した聲で云つた。

「旦那様もモウお年よられましただよ。雜菊ざくのやうに美エ若衆わかしよで御座らつしやれたが、それがまあ今ぢや！ 矢張り苦勞くろうノウなさりましたと見えますだ。」

「實はその苦勞くろうのために來たやうな譯だがね。お前はカチューシャ・マースロフを知つてゐるだらう」「カチリーナでやすか。知つてます所かね、何んでも俺わしの姪わらわでがすもの。覺えてゐねエで何うし

ますベエ。あの女のためには俺わしやハア、どれ位いくばくエ涙なみだベエこぼしやしたか。あの女のこんななら何なんでも知つてやすだ。旦那様だんなさまえナ、神様の前まへでは、誰も罪つみのねエもんはありましねエだ。ツァーリ様へ何か悪わるイことしねエもんはありましねエだ。若けえ時には、少ちとベエ惡戯わるごア誰たれでもしるだ。旦那様だんなさまアも、茶ちやや珈琲かほひばかり、あがつてゐらつたからノウ、それで魔まがさしたんベエ。魔まの奴郎やつらは何なんうかするとなか／＼強つよエもんでやす。魔まに捕つかエられたら何なんうにもなんねエだ。でも旦那様だんなさまは、あの女おんなに惡戯わるごベエなつたからちうても、百ルーブリてエ金をおやんなされましたで、帳消ちやうしょうしになつてやすだ。所ところがあの女おんなはヘエ、何なんてえこんだんベエ。何なんたら不ふ料簡りょうけん者ものだんベエ。俺わしが云いふ事ことせエきイてれば、眞直まことぐ暮くして行いけましたんベエに。俺わし姪わらわだけんど虚言うそは云いひましねエよ。あれはよくねエ女おんなでやす。俺わしいえらア宜よろエ口見くちみ付けて世話してやりイしたアだ。所ところがあの女おんなはちつとも云いふこときかねエで、おまけに御主人ごしゆじんを毒どくづいたさうでやす。俺わし等の身分身分でヘエ、立派りつぱな人ひとベエ毒どくづくてエ法はふはなかんベエ。到頭とうとう追おひ出でされました。それから山林さんりん係けいりの役人やくにん様の家うちエ奉公ほうこうしましたけれど、矢張り辛棒しんぼう出來きねエで、イヤはや、手てにおへましねエだよ」

「子供は何なんうしたい。たしか此こゝの家うちでお産うぶをしたと云いふことだつたが。何處どこに子供こどもはゐるんだい？」

「子供こどもでやすか。ヘエ實じつは、あの女おんなが産後さんごの肥立ひだちちがよくねエで、迎むかも直ちりさうにもねエでやしたから、赤あかン坊ぼうは、俺わし洗禮せんれいさせやして、育兒院よくにんえんへ送りやした。阿母おとこがおッ死しにさうな時ときイ、何なんの罪つみもねエ赤あかン坊ぼうをほつたらかしては置おけねエでやすよ。世間よこではよくそんねエことをしやしてね、赤兒あかごをほつたらかして、乳ちも飲のみませずに見殺みころしにしますだ。だけん俺わしには出來きましねエ、少ちとベエ面倒めんたうを

かけてもとおもやして、育兒院へ送りやした。金もまだ澤山ありイしたから、一層それがよかんべ  
エと——』

『すると、育兒院の登録番號はあるかね？』

「へエ、番號は解つてやすが、赤ん坊はおツ死んぢまやした。」と彼女は云つたよ。「あの女が連れて  
行きますとすぐおツ死んぢまやした。」

『あの女ツて誰だい？』

『長らくスコロードノエ村に住んでやした女で、赤ん坊を預る商賣をしてやした。マラーニヤと云  
ふ名前前でやしたが、それもモウおツ死んぢまやした。太らア伶俐な女でやした。まアあの女が何ねエ  
なことをしたとおもやすか。赤ん坊を預ると、育兒院へ連れて行くに都合の好エやうになるまでは自  
分の家イ置いて育てやした。三人が四人になりイすと、すぐ育兒院へ連れて行きイした。そして兒を育  
てるになかく、巧エ工夫をしましたもんでやすよ。普通の倍もある太エ搖籃を拵エやして、そん中へ  
巧エ鹽梅に幾人も一緒に入れやした。それにや把手もちやんとついてやした。四人も一緒に入れやし  
たが、足と足とは附着けて頭だけは打ち合はねエやうに鹽梅よく離してありイした。さうして一度に  
四人の赤ん坊の守イしてやした。可愛い奴等を靜かにさせとくやうにと襁褓にくるんで乳首を含ま  
してやつてやした。』

『む、夫から』

『そんで、カチリーナの赤ん坊も矢張りこねエな風に育てられやしたが、二週間ばかりで病みつ

やした。』

『そして、好い兒だつたかい』と、ネフリユードフは訊ねた。

『それはへエ、どんねエに探しても無エやうに綺麗な兒でやした。旦那さアに酷肖でやしたよ。』婆  
さんは眼をパチクリさせながら云つた。

『何うして病みついたのだい。食ひ物が悪かつたのかね。』

『食ひ物ツたつて、食ひ物なんかほんの假托にしかありませんエだ。自分の兒でねエと爲方のねエ  
もんで、たゞ生きてせエるれば宜エと云ふ育て方でやすからね。丁度莫斯科へ連れて行く手筈をし  
て、愈々其處へ行きイした所で、おツ死んだとへエ云ひましたよ、證明書を持つて來やしただ——  
何も彼も手ぬかりありませんエよ。ふんとに太エ女でやした。』

ネフリユードフが、自分の子供に就いて知り得たのはこれだけであつた。

六

またもや、部屋の扉口と外部の出入り口との鴨居で頭を打ちながら、ネフリユードフは街道へ出て行  
つた。白シャツとピンク色のシャツとの二少年が待つてゐた。別に三四人新しい顔の人も立つてゐた。  
赤ん坊を抱へた數人の女の中に補綴の帽子を被つた赤ん坊を抱へた瘦せこけた女がゐた。その腕に輕  
るく抱へられてゐる血の氣のない赤ん坊は、そのしなびかへつた小さな顔一杯を妙な具合にこ  
くさせて、そしてそのひん曲つた拇指を絶えずむすく動かしてゐた。



ネフリユードフは、その笑顔は何か苦痛を現はしてゐるのだと知つた。で、あの女は誰だと尋ねた。

『あれが、俺が話したアニーシャだべエ』と年嵩さの兒が云つた。

ネフリユードフはアニーシャの方へ向いた。『お前は何うして暮してゐる』と彼は訊ねた。『何麼事をして暮してゐる。』

『何うして暮すつて？俺イお貰エしてやすよ。』と云つて、アニーシャはシクシク泣き出した。

しなび切つたやうな赤ン坊は、顔一杯に笑つて、殆ど蚯蚓程しかないやうな足をもがくさせてゐた。

ネフリユードフは、紙入れを取り出して、十ルーブリ札を一枚その女に與へた。そして彼が二三歩行きかけると、矢張り赤ン坊を抱へてもう一人別の女が追ひ縋つた。するとまた年寄りの女が、それからまた別の若い女が、やがて其處にゐた女達は皆、彼に縋りついて自分達の貧乏を訴へながら、慫みを乞ふのであつた。ネフリユードフは、自分が持つてゐただけの——皆小札で——六十ルーブリの金をすつかり女達に與へて了つた。そしてたまらない程氣持が悪くなつて執事の家へ引返して行つた。

執事は相變らずの笑顔でネフリユードフを迎へて、晩方百姓達が集まる由を告げた。ネフリユードフは禮を云つて、庭へ出て行つた。林檎の花が咲き散つて、雜草が一杯生えてゐる小徑を歩みながら、今日出會つた色々の事をつくつく考へて見るのだつた。

暫くの間は、あたりは森として靜かだつた。と突然執事の家の方から、互に唾み合ふ二人の女の瘡高い怒り聲が聞えて來た。折々、いつもにこくしてゐるあの執事の聲も交つて聞えた。ネフリユードフは聞き耳を立てた。

『俺イ力では、もう何うにも慫うにもならねエだ。何しるだアね、頸の十字架まで引奪らねエでもよかんべエ。』一人の女が腹立ち聲で喚いた。

『少とべエ牧場に這入つたばかりでねエか。』と、別の聲が云つた。『さあ牛イ返してくれさつせエ、何だつてそねエに畜生を虐めるだア、牛の乳欲しがる子供まで泣かすことアなかんべエ。』

『だから牛が荒らしただけの罰金を出すか、それとも働いて返すかすれば宜いぢやないか。』と、執事の聲がした。

ネフリユードフは庭から玄關の方へ行つた。髪を散ばらにした女が二人其處には立つてゐた。一人は妊娠して、たしかにもう臨月に近かつた。玄關の段の上には、和蘭木綿の衣服のポケットに手を突き込んで執事が立つてゐた。ネフリユードフを見ると、女達は口を噤んで、頭のハンケチを直し始めた。執事はポケットから手を出して、またにこくし出した。

事件は慫うであつた。執事の云ふところによると、とかく百姓達は、轎や又親牛までも、事務所の所有になつてゐる牧場へ這入り込ませて荒らす弊があるので困ると云ふのであつた。今日も此の二人の女達の家の飼ひ牛が二匹牧場に這入り込んでゐるのを見附けたので中庭へ追ひ込んで了つた。そして執事は、牛一頭に就いて三十カペイカか、それとも二日間の勞働で牧場荒らし代を辨償せよと云つてゐるのだつた。けれども女達は、牧場には牛が勝手に這入つて行つたので、何も自分達が故意と入れた譯ではないと云ひ、金は持たないから、後でそれだけの勞働をして辨償せねばならぬとしても、兎に角今日は食物もなくて、朝から炎天にさらされながら、あのやうに悲しげに啼いてゐるから牛を

返して呉れと頼んでゐるのだつた。

「だから俺は、もう幾度も『お前達に頼んで置いたぢやないか』と、笑顔を作つた執事は、此の事實をよく見て置いて下さいと云ふかのやうにネフリユードフを振り返りながら云つた。

「正午、牛を伴れて歸る時は眼を離さないやうによく注意して行つて呉れと云つてゐるぢやないか」

「ちよつくら子供の所（所）行きイした間に、牛が逃げたんだんべエ」

「何も牛の番をしてゐる時行かなくても可いんだらう。」

「そんだったら誰が子供に食はせるだア。さア牛を返して呉れさせエ。」と、もう一人の女が云つた。

「それも、ほんに牧場を荒らしたもんなら懲んねエに愚痴を云はねエだが、ほんのちよつくらべエ入エつたばかりでねエか。」

「いえ、牧場中荒されたのです」と、執事はネフリユードフへ向つて云つた。「それで嚴しく罰金でも取り上げて置かないと、牧場の草は無くなつて了ひます。」

「そんねエに、罪をきせねエもんだ。俺イ牛、これまで一度も捕まつたことありましねエだ。」と、姪娘してゐる女が叫んだ。

「今までは捕まらなくつても、今度は捕まつたんだ。罰金を出すか、働いて返すかするんだ。」

「え、働（た）エて返しますべエ。そんで、牛べエ返して呉れさせエ。餓じがらせて、虐めねエでもよかんべエ」と、彼女は腹立たしく云つた。「こんねエにして、俺イ夜も晝も休む暇ねエだ。阿母（あは）ア病

んでるし、亭主は飲んだくれてるし、俺イ一人で何でもかんでも引（ひ）背（せ）負（お）つてゐるだ。俺イもう性も根も無エだ。一層俺イ喉を締めて殺して呉れさせエ、そしたら、お前さんの仕事も減るべエ」

ネフリユードフは、女達に牛を返してやるやうに執事に命じた。そして、この問題を考へるためにまた庭へ行つたが、然しこの問題は、何も考へる程のことではなかつた。

何も彼もが今彼には餘りに明かなことになつて來た。寧ろ多くの人が何うしてこれを知らずにあるのか、又、自分も長い間これ程明瞭なことに何うして気がつかかなかつたのか不思議でならなかつた。彼等は常に瀕死の状態だ。然もその瀕死の状態に馴れ切つてゐるので、その瀕死の状態に適應した生活の習慣を形造つてゐる。子供の夥しい死亡率、婦人の勞働過重、村民一般の——、殊に老人の營養不足が著しいけれども、貧民達はいつかそれに馴れ切つて了ひ、それを恐ろしいとも思はず、又不平も云はなくなつたので、随つて自分達の方でも、彼等の境界を自然な當然なことのやうに考へてゐる。然し、彼等の底知れぬ貧乏の主な原因は、彼等自身でも知つて居り、又それを指摘してもゐる通り、彼等自ら耕して養つて行くだけの土地を地主に奪はれてゐるからで、今やこの事は、一點の疑ひもない明々白々なことであつた。

子供や老人が無闇と死ぬのは牛乳がないからで、牛乳のないのは、牧場がなく、又麥や牧草を作る土地がないからだと云ふことは如何にも明瞭なことである。彼等の悲惨な生活の最も大きな最も直接な原因は、彼等を養ふ所の土地が、彼等自身の権利に屬さないで、彼等の勞働の御蔭で生活し、その土地の所有權に依つて利益を得てゐる地主と云ふものゝ手にあるからだと云ふことも明かである。こ

れを奪はれたら死なねばならぬ程、彼等百姓に取つては一大重要なこの土地が、地主と云ふ者の手に歸してゐるばかりに、土地からの收穫は皆外國に賣り拂はれて、杖とか、帽子とか、馬車とかブロンズなど云つた地主達の贅澤物の代りになつて、そのために百姓達は、自分達は殆んど飢餓に瀕しながら切々と耕作しなければならぬのだ。現在の地主と百姓との關係は、譬へば馬がその飼はれてゐる埒内の草を悉く食ひ盡して了つたので、食料のあるもつと他の場所へ連れて行かれない限り、段々瘦せ衰へて遂には飢死にしてふより外はないと云ふのと同じ状態である。ネフリユードフは、今やはつきりとそれを了解することが出来た。

これは恐ろしいことだ。このまゝ續いて行つてはならない。これを改革する手段を看出さなければならぬ。でなければ少くとも恚怒事に關係を持つてゐてはならない。

『自分は改革の手段をつけよう』彼は、赤楊樹の下を往つたり來たりしながら考へた。

『學術社會でも、政治社會でも、又は新聞紙等でも、之等百姓達の貧乏な原因に就いて、或はその境遇の救済等に就いて喋々してゐるけれども、然し彼等の境遇を本當に救済する唯一の手段、即ち、彼等が渴望してゐる土地を返してやることに就いては誰も語らないのだ。』

ヘンリー・ジョージの根本思想が、まさしくとネフリユードフの心に蘇つて來た。彼は曾て、その思想に何麼に感動したことのおつたかと思ひ出した。そして又、あれ程感動してゐたのを何うして忘れて了つてゐたのだらうと驚かれもした。『土地は何人の私有ともなり得ない。水、空氣、日光などゝ等しく、賣買する可きものではない。土地が與へる利益に對しては、何人も同等の權利がある。』と云ふの

であつた。クスミンスキー村でやつた處分の事を思ひ出して、尙ほ何となく心に恥ぢるやうに思はれた理由が始めて判つた。自分は自分自身を欺いてゐたのだ。人間は皆土地を私有すべきものではないと知りながら、尙ほ自分のものゝやうな顔をし、そして心の奥底では、その當然の權利の幾分かを百姓達にも分けてやるやうなつもりでゐたのだつたが、今度はもうそんな方法を取る事は出来ぬ。スクミンスキー村の處分法もモウ一度改革しなければならぬ。で、土地は百姓達に貸して、その地代も彼等の財産として認め、それは、税金や、自治的共產の費用に向けさせようと云ふ計畫を心に組み立てた。勿論此の方法も、まだ純粹の單稅組織とは云へないが、然し現在の状態の下に行はれ得べきものとしては、殆どその組織に接近したものであつた。兎に角、彼の考への主點は、此の方法を取つて、土地所有から這入つて來る利益を、これからはもう自分のものにはしないと云ふ事である。

ネフリユードフが母屋へ歸ると、執事は殊更笑顔を作つて、彼の妻が房の耳飾りをつけた娘の手を借りて支度した折角の御馳走が不味くなつてはと氣遣ひながら、今直ぐ食事をして呉れと頼むのであつた。

テーブルの上には、粗末な薄汚ないクロスが掛けてあつて、ナプキンの代りに刺繡をしたタオルが置いてあつた。柄の折れた大きなソップ皿には、芋汁が一杯這入つてゐた。

それには又、今朝その黒い脚を出したり縮めたりしてゐた鶏が、まだ所々に毛のついたまゝ細切りに刻まれて汁の實となつてゐた。スープを取つた残りの同じ毛だらけの鶏は、その他焼肉になつたり、砂糖澤山の脂ッ濃い乳餅になつたりしてズラリと並べられてあつた。然し、こんなに澤山御馳走が並

んでゐる程には、食慾がないので、ネフリユードフは、殆ど何に手をつけて可いか判らなかつた。彼は、村から歸つて来た時の苦悶を、一瞬の間に一掃して了つた土地處分の考案で心が一杯だつた。

執事の妻君は、扉口の所から覗き込んでゐた。耳飾りを下げた娘はおづ／＼皿を運んで行つた。執事は自分の妻の調理の手際を窃かに自慢しながら、愈々嬉しさうにニコ／＼してゐた。食事の後ネフリユードフは、執事を無理に席へつかせて、自分の考へを矯正するために、又、他の者にも之を打ち明けるために、百姓達に土地を貸しつける彼の考案を説明し、それに對する執事の意見は何うかと訊ねた。執事は、自分も早い以前からさうした考へであつたかのやうに、そしてそれを聞くのは實に喜ばしい事であるかのやうに微笑んでゐたが、然し實際は、全るで解つてゐないのであつた。ネフリユードフの説明が十分でない所もあつたが、兎に角彼の云ふ通りな方法に従へばネフリユードフは自分の利益を捨て、他の者の利益をばかり謀ることになつて了ふのだから、執事には中々解らなくなつたのであつた。總ての人間は、他の者を害つても、自分の利益になるやうなことをばかり考へる者であると云ふ考へが、執事の頭には深く染み込んでゐたので、土地からの収入全部を百姓達の共有資金に提供しようとして云ふネフリユードフの話は、一體何を意味するのか薩張り解らなかつた。

「あゝ判りました。では勿論あなた様は、その共有資金の中から歩合を御取りになる御心算で。」と執事は、はれ／＼しく云つた。

「いや、さうぢやないよ。ねエ君、全然土地を與つて了ふんだ。」

「しますと、あなた様は、土地の収入は少しも御取りにはならないので御座いますか。」執事は矢張

りニコ／＼しながら云つた。

「取らない、全部與つて了ふんだ。」

執事は、驚いて深い嘆息をついたが、やがて又ニコ／＼しだした。始めて本當に解つたのである。ネフリユードフは、確かに氣が狂つたのだと執事は思つた。それで早速土地を捨て、了はうと云ふネフリユードフの計畫を幸ひ、自分も何か一儲けしてやらうと、一寸その見込みをつけて見た。然しその見込みは逆もたさうにないことが判ると、彼は失望して了つて、もうそんな計畫などは、面白くもなくなつた。

そしてたゞ「主人公」の機嫌を取らうとするばかりに笑顔を續けてゐた。

ネフリユードフは、執事が自分の考へを了解し得ないのを見ると、彼を部屋から退けた。そして、小刀の痕だらけなのをインキで塗り隠してある窓框の傍に腰掛けて、自分の考案を紙へ書き始めた。

太陽は、鮮かな滴るやうな縁に蔽はれてゐる菩提樹の彼方に沈んで、蚊の群れが、部屋の内へぶ／＼舞ひ込んで来て、ネフリユードフを螫し始めた。

丁度考案を記し終ると、村の方から牛の鳴き聲や、門の扉の軋る音や、それから今夜の會合に集まつて来る百姓達の聲などが聞えた。ネフリユードフは、自分から村へ出掛けて行つて、會合の場所すべてに會はうと思つたので、わざ／＼百姓達を事務所呼び寄せるには及ばないと、前以つて執事に命じて置いたのであつた。で、執事の待遇の茶を急いで飲み終つて、彼は村へ出掛けて行つた。

村長の家の前に集つた百姓達はガヤ／＼云つてゐたが、ネフリユードフが来ると、皆黙つて了ひ、クスマンスキー村の人達同様に帽子を脱つて丁寧におじぎをした。此の村の百姓達は、クスマンスキー村の人達よりも更に一層貧乏な階級であつた。何れも樹皮製の靴を穿き、手織りのシャツや上衣を着てゐた。中には、爲事歸りらしく、裸足で、シャツ一枚の者もゐた。

ネフリユードフは勇氣を出して、自分の土地を皆百姓達に分配して了はうと云ふ計畫に就いて語り始めた。百姓達は黙り込んでゐて、別段顔の表情を變へもしなかつた。

「俺は、人間は皆誰でも、平等に土地を使用するの権利を持つものだと思つてゐるし、又さう堅く信じてゐるから……」と、ネフリユードフは、顔を赧らめながら云つた。

「さうだつベエとも、ほんとにさうだんべエよ。」と、一三人の聲がした。

ネフリユードフは更に語をついで、土地からの収入は、平等に皆へ分配されねばならぬこと、そしてそのために彼は土地を皆へ提供する事、皆は協議の上で地代を定め、それに依つてそれ／＼土地を借り入れる事、地代は共有資金として、各々平等に使用すべき事などを話して聞かせた。感服したり賛成したりする聲が其處此處に聞えないことはないが、然し百姓達の生眞面目な顔は愈々生眞面目になつて、皆じつとネフリユードフを見詰めてゐた眼を伏せて了つた。それは丁度、皆がネフリユードフの瞞着手段を見貫いて、その手は食はぬと云つた意氣込みで、眞正面から彼を見詰めて恥ぢ入らせるの

も好ましくないからと云ふやうであつた。

ネフリユードフは、判り易くはつきりと説明した。百姓達も相當に譯の判る頭は持つてゐた。然し彼等も矢張り、執事が了解し得なかつたと同じやうな意味で、ネフリユードフの云ふことを本當に理解することが出来なかつた。

彼等も矢張り、人間と云ふ者はすべて、自分の利益になることを考へるのが當然であると、堅く信じ切つてゐた。これまで代々の経験で見ても、地主は皆、百姓を虐めて自分等の利益をのみ計る者だと云ふ證據が十分示されてゐた。それで、地主が會合を開いて、何か新たに申し出をする時は、屹度それは、以前より一層狡猾な方法で、偏に彼等を欺かうとするためであつた。

「そこで、地代などはどの位に定める心算かね。」と、ネフリユードフは訊ねた。

「俺らが地代を定める譯はなかんべエ。且那樣の地面でムエやすで、且那樣が勝手に定めたら宜かんべエ。」群集の中から三四人の聲が答へた。

「いや、さうぢやないんだよ。お前達の共有財産を作るための地代だから、それはお前達が好いやうに定めなければならぬ。」

「そんなことは出来ましねエだ。共財は共財でやす、土地は土地で別物でやす。」

「お前達は判らんのだな。」と、執事はニコ／＼して云つた。(彼はネフリユードフの後からついて會合に來たのであつた)「公爵様は、地代を定めてお前達に土地をお貸しになるんだ。そしてその地代も亦、お前達の共同財産として下さると云ふ思召しなんだ。」

「ようくり判りやしたよ。」と、意地悪さうな、齒の抜けた老爺が、眼を伏せたまゝ云つた。「つまり銀  
行のやうなもんでやせう。俺等は日を定めて金を拂ひ込まねばなんねエのでやせう。そんなエこと眞  
平御免でやす。今でせエ難儀のし通してムエますに、此の上取られやしたらおツ死ぬべエ外ムエまし  
ねエだ。」

「さうだんべエよ、俺等アもと通りの方が宜かつベエや。」と、二三人の不滿さうな聲がし始めた。  
荒々しい聲さへ交つてゐた。

ネフリユードフが契約書を出して、それに記名調印しよう云ひ出すと、皆の反抗は益々激しくな  
つて来た。

「何だつて印ベエ捺くだア？俺ら今迄通りに働ませエすれば宜エでがんす。そんなエ事知んねエだ。  
俺ら無學文盲でやすから。」

「出来ねエとも、そんなエ妙な話聞いたこともねエからのう。まあ今迄通りにして貰ふべエ。たゞ  
種だけは地主持ちにして貰エてエもんだ。」

現在の組織では、種は百姓の方で都合せねばならなかつたが、これからは、更めて地主の方から供  
給して貰ひたいと云ふのであつた。

「では、お前達は土地を貰ふのは厭やだと云ふのだね。」と、ネフリユードフは、快活な顔をした中  
年配の、裸足になつてゐる百姓に向ひながら云つた。その男は、ほろ／＼の上衣を着て、丁度兵士が  
脱帽の命令を受けた時するやうな特別な直立の姿勢をして、左の手に破れ帽子を持つてゐた。

「左様であります。」と、長い間兵役に服して来て、まだ兵隊臭味の抜け切つてゐないその男が答へ  
た。

「それでは、お前達は十分に土地を持つてゐると云ふのだな。」と、ネフリユードフは問ひ返した。

「いゝえ、持ちましねエだ。」と、兵士上りの男は、わざとらしい快活な顔をして、目上の人には誰  
にでもさうしつけてゐるやうに恭しく破れ帽子を前に捧げながら云つた。

「それならば、鬼も角も、俺が云つた事をよく考へて見たらよからう。」

ネフリユードフは、皆の判らなさに少々驚きながら、再び同じことを繰り返して聞かした。

「俺らもう考エる必要はねエだ。今も申しやした通り、今迄通りで結構でやす。」と、性急な、齒の  
抜けた老人が云つた。

「俺は明日一杯逗留してゐるから、お前達が思ひ直すことが出来たら、誰か知らせにやつて呉れ。」  
百姓等は何とも答へなかつた。

こんな鹽梅で、ネフリユードフは遂に、此會見に依つて、何の結果をも得ることが出来なかつた。

「私がお口添へしまして」と、家へ歸つてから、執事は云つた。「逆もあの百姓達と御相談の纏ま  
りツこはありません。實に頑迷なんで御座いますからね。會合でも一つ意見を決めたら、もう容易なこ  
とでは動きはしません。一體がすべての事に恐ろ氣ついてゐますからです。でも中には——あの頼りに  
不服を云つてゐました白髪の老人や色の眞黒い男などは、中々譯が判つてゐます。事務所に来た時な  
ど、お茶でも飲んで話などします時は、それや實に巧いことを言ひますよ、——全く外交官です。」と

執事はニコ／＼しながら續けた。「何れよく、すっかり考へ直して見るでせう——會合の時には、全く變つた人間になつて了つて——同じ事ばかり繰り返してゐますが——」

『では、その譯の判る男達を呼んで呉れないか。』と、ネフリユードフは云つた。「そしたら、もう一度よく判るやうに説明したいと思ふから。』

『呼ぶのは何でもありません、すぐ参ります。』と、笑顔の執事は云つた。

『さうか、では明日呼んで呉れ。』

『はい、承知致しました。』と、云つて、執事は益々ニコ／＼するのだつた。「明日呼び寄せることに致しませう。』

『まあよく聞いて見さつせエ、あの方は悪謀ノウさつしやる人ぢやなかつてエ。』と、鬚のもぢやく／＼生えた眞黒な髪の毛の百姓が、肥つた牝馬に乗つて左右に揺られながら、自分と同じく馬を並べて行く襤褸衣服の老人に向つて云つた。此の二人は、夜になると、百姓達の馬を伴れて、道傍の草を食はせたり、或はこつそり地主の山林の中へ伸れ込むのであつた。

『印せ、擦せばたゞで地面を呉れるべエなんて、そんなうめエ手で幾度もとられたでねエか。さうはもう騙されねエだよ。今ぢや俺らだつても少とべエ脳味噌があるだ。』と、つけ加へて、路にはぐれた仔馬を呼び始めた。

馬を付めてあたりを見廻してゐたが、仔馬は、何うしても戻つて來なかつた。路傍から牧場へ紛れ

込んだのらしかつた。

『トルコ馬の仔の畜生、また地主の牧場に這入りやがつたな。』と、髪の毛の眞黒なもぢやく／＼鬚の百姓はその仔馬が嘶きながら、草の香のする牧場に駈け込んだあたりに、酸模の莖の折れる音を聞きながら云つた。

『あれ、あの音を聞かツせエ、休み日に若エ女子でもやつて、あの草を抜かせて了うべエ。』と、ほろ衣服を着た瘦せた百姓が云つた。「でねエと、俺らの鎌の刃が鈍つて了うだ。』

『印を擦せつて、云つたが。』と、もぢやく／＼鬚の男は、地主の話に對する自分の意見を述べ續けた。「印を擦したらそれこそ、俺ら生きたまゝ丸呑みにされて了ふべエ。』

『さうともお前。』と老人の方は答へた。

それきり二人は黙り込んで了つた。道を辿つて行く馬の蹄の音だけが聞えた。

八

ネフリユードフは歸つて見ると、事務所に自分の寢所が支度してあつた。部屋には、高い寢臺のに羽蒲團を敷き、大きな枕が二つ置いてあつた。ベッドには頗る精巧な刺繡をした大きな眞紅の褥が掛けてあつた。これは確かに執事の妻君の嫁入り道具の一つに違ひなかつた。執事は午餐のお残りを持つて來て薦めたが、ネフリユードフは手も着けなかつたので、執事は、饗應の行き届かなかつたのを詫りながら、其處を出て行つた。

百姓達の拒絶はネフリユードフにはさのみ不快でもなかつた。クスミンスキー村で、自分の提案が受け入れられ、又感謝までされたよりも、この村で疑心と敵意とを以て迎へられたのを、ネフリユードフは却つて満足にも愉快にも思ふのであつた。

餘り清潔でない此の事務所の中は息苦しかつた。ネフリユードフは、中庭へ出て庭園の方へ行きかけたが、ふと、其の或晩の事を憶ひ出して歩み止まつた。女中部屋の窓、横手の入り口、——などを憶ひ出すと厭やかな感じがした。罪の記憶に汚れてゐる所を通るのは好ましくなかつた。で、戸の上り段に腰かけて、樺の木の若葉の強い香りの薫する生暖い空気を呼吸しながら、眞暗な庭園の方をじつと見詰めて、水車の音や、ナイチンゲールや、ツイ近くの灌木の茂みに唄けに啼く馬の聲に耳をすましてゐた。執事の家の窓の灯は消え、物置き小屋の後ろの東の方から、月の昇つて来るのが見えた。電光が強く閃いて、荒れさびれた建物や、樹木の生ひ茂つて爛漫と花の咲き亂れた庭園を時々ぱつと照らし出した。遠くでは雷が鳴り出して、眞黒い雲が上空の三分の一程も擴がつて來た。ナイチンゲールや、その他の鳥なども、啼く音を潜めて了つた。水車場の方から水の咽ぶやうな音に交つて、クワツク〜と啼く鶯鳥の聲が聞えた。すると、村の方からと、執事の家の中庭とから、愆んな生暖い雷の鳴る晩にはよくあるやうに、何時もよりは早く、一番鶏が啼き始めた。鶏の早く鳴く夜は樂みのある日だと云ふ俚諺があるが、ネフリユードフには、今夜は樂みのあると云ふよりもつと、幸福な愉快な日であつた。まだ無邪氣な若者だつた時、此處で過ぎたあの幸福な夏のことが新たに思ひ浮べられた。今迄の生涯中、最も幸福な瞬間であつたあの當時に返つたやうな心持ちがした。十四才の時、眞理を示して下さいと神に

祈りを捧げた事と、幼児の時母と別れることがあつた際、自分はいつても善い人間となつて、決して母には心配はかけないと誓つて、母の膝に泣き頼れた事なども思ひ出し、その時感じたやうな感じに打たれた。又、ニコレンカ・イルチーニエフと共に、互に助け合つて、善良な生活を送るやうにし、凡ての入々の幸福になるやうなことをしようと思つたあの頃と同じやうな心持ちをも感じた。クスミンスキー村では、何うしてあんなに心がぐらつき出して、家や森林や畑や土地などが急にまた惜しくなつたのかと思ひ出し、今でも矢張り惜しく思つてゐるはしないか何うかと自分自身に尋ねて見たが、あの時それを惜しく思つたのが不思議にさへ思はれるのだつた。それから彼は、今日目撃して來たことを、また思ひ浮べて見た。亭主は自分の(即ちネフリユードフ所有の)森林から樹を切り取つたために入牢させられてゐると云ふ子供持ちの女や、己等の分際では高貴な人達の駢弄となるのが當然であるかのやうに思ひ、少くともさう思つてゐると話したあの恐ろしいマトリヨーナやを思ひ出した。尙ほ又、子供に對する彼女の心掛けや、育児院へ送るその仕方や、餓ゑて死にかゝつてゐるあの可哀さうな、しなび切つた、氣味の悪い笑ひ方をする補綴帽子を被つた乳飲み兒や、臨月の身體になつて、餘りに働き疲れ、ツイ餓ゑた牛を見張りするのを怠つたために、その罰金に勞働を強ひられてゐた女やなどを思ひ出した。すると突然今度は、監獄や、髪を剃り落された頭や、檻房や、濕つほい臭氣や、鎖や、それから又一方には、彼自身もその一人である所の、まるで狂氣染みた贅澤三昧をしてゐる都會に於ける金持ち連の生活やを思ひ出した。

満月に近い、皓々とした月が物置き小屋の上に昇つた。黒い物の陰が中庭に一抔落ちて、廢家の鐵屋



根は、きら／＼と輝いた。この月明を徒にするのを惜むかのやうに、ナイチンゲールは再び聲を顔はして啼き始めた。

ネフリユードフは又、愈々自分の思惑を實行しようとして決心した。その前の晩、クスミンスキー村の庭園で、如何に自分の生涯と云ふことをつく／＼考へて見たか、そして、自分の頭は如何に混亂したか、如何に自分は躊躇して一つの決心をもつけ得なかつたか、如何に難問題が交々起つて来たか、などを思ひ出した。彼は今此の問題を考へて見ると、凡てが餘りに單純であるのに驚かされた。その單純だと云ふのは、今自分には、自分の身に振りかゝつて来る結果のことなどは考へずに、たゞ爲なければならぬことをしさえすれば可いのだと云ふ決心がついたからである。尙ほ、不思議なことは、自分のために爲なければならぬことには、決心がつかなくなつて、他の者のために爲なければならぬことは判然と判つて来た。彼は、カチューシャを見捨てゝはならないこと、何處までも彼女を救ひ出し、彼女に對する自分の罪を償はねばならないことを確然と知つたのである。又彼は、自分と他の人々と見解を異にしてゐるやうに思はれる所の裁判や刑罰のことに關して、色々研究し、考査し、證明し、了解せねばならぬ事も確かに知つたのだつた。これ等の事柄が何うした結果になるのかは知らなかつたが、然し是非爲なければならぬのだと云ふことを確然と知り得たのであつた。そして、この確固不動の覺悟が嬉しかつた。

眞黒な雲は大空に擴がつて了つた。電光は物凄くひらめき渡つて、中庭や、入り口の傾いた古家をはつきりと照らし出し、雷は頭の上で轟々と鳴りはためいた。鳥は皆聲を潜めたが、木の葉がざ／＼と鳴り騒いで、風が横さまに、ネフリユードフの腰掛けてゐる階段を襲つて、彼の髪の毛を弄つた。すると雨がポタ／＼と落ちて来て、やがて次第に激しくなり、辛の葉や屋根の鐵板にざ／＼と音を立て、降り注ぎ、空中には、電光が縦横にきらめき渡つた。そしてネフリユードフが一、二、三と數へきらいの中に、恐ろしい勞くやうな響きが頭上に鳴りはためいて、轟々と響きながら大空を傳はつて行つた。ネフリユードフは家の内へ入つた。

「さうだ、さうだ」と、彼は考へた。「我々の一生に於ける仕事、その仕事の全體、その意義、それは自分には判らない、又判り得べくもない。伯母達は何のために生存したか。ニコレンカ・イルチーニエフは何故死んだか——そして自分は何故生きてゐるか。カチューシャは何故伯母の家にゐるか、自分は何故狂人のやうになつたか。何故戦争があつたか。何故自分はあの後ら不規律な生活をしたか。これ等を理解し、神の攝理を理解しようとするのは、自分達の力に及ばないことだ。併し自分の良心に刻まれてゐる神の意志を行ふことは自分の力で出来る。そして、それが何であるかと云ふことも今自分は判然と知ることが出来た。それを實行し得た時、自分は、始めて安心立命が出来るのである。」

雨は篠つくやうに降りしきつて、屋根の上から水桶へ籠のやうに流れ落ちた。建物や中庭を照らし出してゐた電光は途切／＼になつた。ネフリユードフは部屋へ入つて、衣服も脱がずに寢床へ潜つたが、煤けた汚ない、壁紙が、何だか其處に蛇でもゐさうに思はれて、不安でならなかつた。

「さうだ、主人ではなくて下男のやうに自分を考へねばならぬ」と、彼は思つた。そしてさう思ふ

やうになつた事を喜んだ。

彼が恐れたのも満更無理ではなかつた。蠟燭を消したかと思ふと、もう蚤がそろ／＼出て来て食ひ始めた。

『土地を捨て、西伯利亞に行けば——蚤と蛇と塵埃とだ！然しそれが何だ。我慢せねばならないならば、自分にも我慢は出来る。』彼は恚う思つたが矢張り我慢が出来なくなり寢床から起き上つて、開け放した窓際に行つて腰を掛け、退散して行く雲の群れや、再びさつと雲間から洩れ出て来る月の光を恍惚と眺めやつた。

九

明け方近くなつてやつとネフリユードフは睡ることが出来たので、随つて眼覺めたのは遅かつた。正午頃、執事から呼ばれた百姓達の總代が七人、果物圃へ来て、かねて執事が林檎の木の下に、杭を地に打ち込んで、それに板を張りつけて拵へて置いたテーブルと腰掛けとのまはりに集まつた。けれどもその百姓達を、脱いでゐる帽子を被らせて席に着かせるまでには可なり時間がかゝつた。今日は樹皮の靴をはき込んで來てゐた兵士上りの男は、殊に頑固に堅くなつてゐた。彼は葬式の時の軍隊の禮式に習つて、帽子を手に持つたまま、眞直ぐ突ツ立つてゐた。ミケランジェロの描いたモオゼのやうな銀色の鬚が縮れて、禿け上つた褐色の額に灰色の縮れ髪の垂れた、肩幅の廣い、押し出しの立派な老年の百姓が、大きな帽子を被つて、上服の塵埃をはたきながら、テーブルの後ろへ廻つて腰掛けに腰を下ろ

すと、他の百姓達もそれに習つた。百姓達が席について了ふと、ネフリユードフは、彼等と向ひ合ひに腰掛けた。そして、テーブルに凭れながら、自分の計畫を書きつけて置いた草稿を廣げて、説明し始めた。

この日は百姓達の人數が少なかつたせゐか、それとも自分の利益を顧みず一圖にその計畫の實行のことをのみ思ひ詰めてゐたためか、ネフリユードフは昨日のやうにどきまぎとまごつきはしなかつた。彼は何氣なしに、銀色の鬚の白く縮れた肩幅の廣い老爺さんに賛成か反対かを訊ねた。然しネフリユードフの推察は違つてゐた。此の押し出しの立派な年長者は、一々合點が行つたやうにその見事な頭を傾かせてゐたが、その實、餘りよく判つてゐないので、たまさか判つた所で、他の者が反対意見を述べたり、又彼等がネフリユードフの説明をもう一度自分等の言葉に繰り返してゐるのを聞いたりすると、首を振つて顔を澁くつた。この年長者の傍に補綴の南京木綿の上衣を着て、古長靴を穿いた、片眼で殆ど無髯な小柄な老人が居たが、この男は、ネフリユードフは後で電職だと聞いたが、可なりよく話が解つた。此の男は始終眉根をびく／＼動かして、熱心にネフリユードフの言葉を聞き入りながら、聽て他の者へそれを説明して聞かせてゐた。白い鬚のある、伶俐さうな眼をした頑丈な一人の爺さんも、非常に了解が早く、然もそれを見せかけるやうに、急所を捕らへて皮肉な冗戯を云つてゐた。兵士上りの男も物の判る方ではあつたが、何さま馬鹿けた軍人社會の言葉に馴らされて了つてゐたので、やつと半分位しか判らなかつた。その中で最も眞面目になつて聞いてゐたのは小さつぱりした手織り木綿の衣服に新らしい樹皮製の靴を穿いた、髯の少ない、鼻の長い、太い聲の脊の高い男であ

つたが、この男は何も彼もよく判つて、必要な時だけ口を利いた。残る二人の老爺さん——昨日の集合で目立つてネフリユードフの提案に反対した齒の抜け落ちた老爺と、瘡せ脛をリンネルの布で巻きつけてゐる親切さうな顔附きの色白い背の高い跛の男とは、一心に聞き耳を立てはるたが、自分達は一言も物を云はなかつた。

ネフリユードフは、先づ最初に土地私有に關する自分の意見を述べた。

「僕の考へでは、土地と云ふものは、決して賣つたり買つたりすべきものではない。でない、金のある者が皆土地を買ひ占めて、何も持たない者を無闇とこき使ひ、土地を耕させて、自分等ばかり勝手な利益を貪るからだ……」

「それに違エムエません」と、鼻の長い老爺さんが太い聲で云つた。

「その通りであります」と、兵士上りの男も云つた。

「女つ子が牛に食はせる草をちつとべエ取つてせエ直ぐ捕まつて牢に打つ込まれるだ」と、白い鬚の男は云つた。

「俺らの地面は五里も先きにあるだ。此の村の地面を借りてエにも、地代を上げて了つたから拂エ切れねエだ」と、意地悪な齒の抜け落ちた老人がつけ加へた。「それで俺ら縛りつけられて仕様がねエだ。奴隷時分よりかもつと始末が悪いだ。」

「俺もお前達と同じやうな考へなんだ。土地を持つてゐることは一つの罪惡だと信じてゐる。だから俺は土地の所有權をすつかり捨て、了はうと思つてゐるんだ」と、ネフリユードフは云つた。

「へエ、それや結構なこんでムエます」ミケランゼロの描いたモオゼのやうな捲き毛の老爺は、ネフリユードフの意向は、きつと土地を貸し付ける事だと考へながら云つた。

「それで俺はもう土地を持つてゐたくないから、その處分をつけに此の村へ来たんだが、それには一體何う云ふ方法を取つたが一番可いか、皆考へなくちやならない。」

「たつた今、俺ら百姓へ下されや、それでよかんべエ」と、性急な、齒の脱けた老爺が云つた。

ネフリユードフは、この言葉を聞くと、まだ百姓達は自分の正直な計畫を疑つてゐるのだなと感じながら、尙ほ自分の熱誠の足りないのをちよつとの間に恥ぢたが、直ぐにまた思ひ返して、自分の本當に思つてゐることをなほよく説明した。

「勿論、俺は喜んでお前達に土地を渡すんだが」とネフリユードフは云つた。「然し誰に、何うして渡したらよからう。どの村の人達に渡したらよからう。お前達の村ばかりに與つて、隣り村のデイオミンスク村（非常に土地の狭い隣村）へはやらなくとも可いものかね。」

一同は黙り込んだ。兵士上りの男だけが「さうであります」と云つた。

「それぢや、土地を受け取つたら、お前達はどんな風に分配するつもりか、それを聞かして貰いたいが」と、ネフリユードフは訊ねた。

「みんな同じやうに一人々々に分けねばなりませんめエ」と、竈職が、肩を急に上げ下ろししながら答へた。

「さうするよか無かつべエ、これだけづゝと云つた鹽梅になあ」リンネルの白い布を脛に巻きつけ

た、人の好き、うな、跛の男がまた之に應じた。

一同は此の説に満足したらしく賛成した。

「一人々々に分けると云ふのか。さうすると人の家に雇はれてゐる雇人などにも矢張り分配する譯になるんだね。」と、ネフリユードフは尙ほ訊ねた。

「いえ、さうではありませぬエ。」と、兵士上りの男は大膽に磊落に打ち消した。然し、脊の高い分別臭い男は、それに同意しなかつた。

「一人づゝに分けるのなら雇人だらうが、何だらうがかまはねエ、みんな同じやうに分けてやらねばなんねエ」と、少し考へてから云つた。

「さうは出来ない」かねてからこんな説の出るのを豫期して考へてゐたネフリユードフは恚う遮つた。「皆がもし同じやうに分けるとなると、やがてまた自分で働くのが嫌いな人間——自分で鋤鋤持つて耕すことの嫌いな人間が出て来て、折角分けて貰つた土地を金持ちに賣つて了ふやうになるに違ひない。すると、土地はまた金持ちの手に歸して了ふことになる。さうなると、以前通り土地所有者が殖えて、百姓達の土地は減つて了ふ。金持ちは又、百姓達を勝手に苦めることになる。」

「その通りであります」と、兵士上りの男は大聲で同じた。

「地面を賣ることを禁じたらよかつべエ、鋤鋤持つて自分で働く者にだけ與れよよかんべエ。」と、

此の意見に對しては、ネフリユードフは、誰が鋤鋤持つて一所懸命に働くか、誰が怠け者であるかと

云ふことを今から見きはめる譯には行かないと答へた。

脊の高い一番物の判る男は、その整理の方法として、村全體の者が一致共同して土地を耕す事にし、鋤鋤取つて自ら耕した者にだけその收穫を分配し、鋤鋤を手にしなかつたものには何も與へないことにすれば宜からうと主張した。

此の共産的な意見に對しても、ネフリユードフは矢張り自分の考へを用意して置いた。さうした整理の方法を取るやうにすると、村全體の者はすべて耕作に従はねばならないし、各自耕作に遅れないやうに馬の數も同じに持たなければならぬし、結局鋤鋤、馬、禾穀器等の農具一切を共有にしなければならぬが、これには、村民が皆一人も不賛成のないやうに一致しなければならぬと説いた。

「人間なんてエものは、生涯他人と一致、べエ出来るもんでねエ」と、意地悪な老爺が云つた。

「喧嘩ばかりするだんべエ」と、ニコ／＼した眼附きの老爺も相槌打つた。

「それから地味の事は何うするかね？」とネフリユードフは續けた。「一人が上等の地所を取り、他の者が粘土や砂ばかりの下等な地面を取ると云ふ譯にもゆくまいから。」

「それなら小さく割つて、一人一人に同じやうに振り分けたらよかつべエ」と、竈職が答へた。

此の問題に對してネフリユードフは、これは、たゞ一村の問題ではなく、數ヶ村に渡つて考へねばならぬことだと答へた。もし此の土地を百姓達の云ふがまゝに任せたら、或者は良い土地を取り、或者は瘠せ地を當てがはれるやうなことになるはしないか。誰でも良い土地が欲しいに相違はあるまい。

「さうであります」と、兵士上りの男は云つた。

他の者は皆一同黙り込んで了つた。

「それで、此の問題は、表面で考へるやうにさう簡単ではない。」と、ネフリユードフは附け加へた。「我々ばかりでなく、多くの人が此の問題に就いては考へてゐる。亞米利加にヘンリー・ジョーヂと云ふ人がある。その人は恚う云つてゐる。俺もその説には賛成だが……」

「えエと旦那様、あなた様は御主人様でムらつしやるけエに、旦那様の好エやうに分けてくらすしやればよかつペエ。呉れるもんなら呉れると、呉れねエもんなら呉れねエと、有仰つてくらすせエ、何も愚圖々々なさるには及ばねエ、旦那様の思ひ通りになさらつしやれば宜エでやすよ」と、意地悪な老爺が云つた。

これを聞くとネフリユードフは、追にむつとしたが、此の餘計な差出口に不快を感じた者は自分一人でなかつたことを見ると、幾らか氣を安めた。

「まあ待ちねエよ、セミヨン小父さん、旦那様の云はつしやることをよく聞いたがよかつペエ。」と分別のある男が壓へつけるやうな太い聲で云つた。

ネフリユードフはこれに勇氣を得て、ヘンリー・ジョーヂの單稅組織論を説明し始めた。

「此の地球上の土地は皆人間のものではない、神の物である。」と彼は始めた。

「如何にも、さうでムエます。」と數人の聲が答へた。

「土地は何人にも共有のものである。何人もこれに對しては同等の權利を持つてゐる。然し土地には肥えたのも瘠せたのもあつて、然も人間は皆誰もその肥えた土地を欲しがらる者である。そこで如何

にすれば、最も公平に土地を分けることが出来るか。此處に一つの方法がある。肥えた土地を使用する者は、それを使用することの出来なかつた者に對して、土地使用の代金を拂ふ事にするのだ。」と、ネフリユードフは、自ら答へるやうにその説明を進めた。「所で、然らばその代金は、誰が誰に拂はねばならぬかと云ふことが中々困難な問題になるが、然し又、どの村でも、共同費用の金が要るのだから、肥えた上等の土地を使用した者は、その共同費用に、土地の使用代金を出すやうにすれば宜いだ。さうすれば、誰も皆同じやうに分け前を出すことになる。それで、お前達が土地を使用するならば、上等の土地を使用した者は、餘計に村費を出し、下等の土地を使用した者は、少しの村費を出すとしたら可い。土地を耕さない者は何も出すには及ばない。土地を使用する者だけが租稅と村費を拂ふやうにするのだ。」

「成程」と、竈職は眉を動かしながら云つた。「宜エ土地を使ふ者は村費を餘計出すだね。」

「剛巧な頭でねエか、そのジョーヂでエのは」と、縮れ毛の綺麗な年長者の老爺さんが云つた。

「でも、その村費が俺らの力で拂エる位なら宜エけんぞ。」と、脊の高い男は、どのやうにして取り立てられるのだらうと、考へながら、太い聲で云つた。

「村費は餘り高すぎてもいけないし、又餘り廉すぎてもいけない。餘り高いと拂はれなくなつて却つて損だ。廉すぎると、土地の所有權が賣買されるやうになる。土地賣買で儲ける者が出来る。」と、ネフリユードフは説明した。

「だから、其處をよくお前達と協議したいんだ。」と、彼は云ひたした。

「さうですがとも、さうに違エありませんねエ、ほんとうに道理でやす」と、やつと百姓達は合點がいつたので、元氣を出して云つた。

「何てまあ好エ頭でかんせう、そのジョーヂとか云ふ人は」と、捲き毛の肩の廣い老爺が云つた。「その人の云つたことをよく考へて見さつせエ。」

「所で、愈々さうなりますれば、私も少し土地が欲しいのですが如何で御座いますせう。」と、ニコ／＼顔の執事が割り込んだ。

「餘つた地が出来たら分けて貰つて耕したら可い。」とネフリユードフは答へた。

「何で地面が欲しいのでやすか。お前様太エ地面持つてるでねエか。」眼に笑ひをたゞへながら一人の老人が云つた。

これでまづ皆の協議は終つた。

ネフリユードフは自分の申し出をもう一度繰り返して、即答するには及ばないから、他の者ともよく相談した上で、その結果を知らせて呉れと云つた。

百姓達もそれではよく相談した上で返答しますと云つて、イソ／＼として皆歸つて行つた。道を歩みながら、彼等がガヤ／＼と聲高に話して行くのが聞えた。尙は夜遅くまでも、その話し聲が、村の方から川面を渡つて聞えて來た。

百姓達は、その翌日は仕事を休んで、地主の申し出のことに就いて一日相談した。意見が二派に分れた——一方はその申し出を受け入れても決して危険にならなず利益になるばかりだと云ひ、一方

はその申し出を本當に理解することが出来ないで尙ほ顛ひ恐れてゐた。けれども三日目には、村民一同漸く話が纏まり、兎に角申し出を承諾することにして、幾人かの者を總代としてネフリユードフの所へ使にたてた。

恚うして皆の話が首尾よく纏つたのは、一人の老婆が出て來て、ネフリユードフの人物を説明し、彼は決して人を欺くやうな恐れのある人ではないと云つたのが大に効力になつたのだつた。即ち「主人公」は近頃靈魂の問題に思ひ悩んで、今迄の罪亡ほしに善根を施さうとしてゐるのだと云ふのであつた。これは、パノヴオ村で、ネフリユードフが貧民達に澤山な金を施したと云ふことで確證された。事實、ネフリユードフは、これまで、貧民達の生活を直接に、あからさまに見たことがなかつたので、今日のあたりそれを目撃すると、思はず身震ひして、單に慈善と云ふことの無意味なことは知りながらも、つい金を施す氣になつたのであつた。彼は丁度クスマンスキー村で、昨年山林を賣り拂つた巨額の代金を受け取つてゐたし、尙ほその他材木や農具などを賣つた幾らかの金も持つてゐたので、それを施さずにはゐられなかつたのであつた。「主人公」が慈善金の施しをしてゐると聞くと、多くの貧民達は、主に女達が、諸方から憐みを乞ひに集まつて來た。何うして渡したら可いのか、どれだけの額を與つたら可いのか、何麼者に恵んだら可いのか、そんなことはネフリユードフには薩張り判らなかつた。云はれるまゝに無闇と金を施すのは餘りよくないこととは知つてゐたが、然し自分は澤山金を持つてゐながら、惨めな貧乏人達を見ても少しの施しもしないで知らぬ顔してゐるのは堪へられないことであつた。

パノワオ村滞在の最後の日、ネフリユードフは、伯母の家に遣つてゐる色々な道具を調べて見た。眞鍮の獅子頭に環の附いてゐる桃色心木の衣裳戸棚の抽き出しには、澤山な手紙があつて、その中に、又別に一枚の寫眞が交つてゐたが、それには、二人の伯母、即ちソフィヤ・イワーノウナとマリヤ・イワーノウナと、それから學生時代の自分と、まだ無邪氣な、可憐な、樂し氣に活々した頃のカチューシヤとが一緒に寫つてゐた。彼は、多くの家財道具の中から、その手紙と寫眞とだけを取つた。そして、殘餘は、いつもニコニコ顔をしてゐる執事の周旋で、——取りかはすなり、どうなりして呉れるやうに——水車屋の男に賣つて了つた。

ネフリユードフはクスミンスキー村に泊つた時、自分の財産を失くなすのが突然惜しくなつたあの心持ちを再び思ひ出しながら、何うしてあの時はあんな感じが起つたのだらうと不審でならなかつた。今彼は、其處事は何も考へないのみか、本當に重荷を下ろしたやうな限り無い自由な喜びを感じて、丁度旅人が、新しい土地を見つけ出した時に經驗するやうな、今までに覺えない或活々した愉快な感じに打たれるのだつた。

## 10

田舎から歸つて來ると、市中の光景が、まるで變つたやうにネフリユードフには物新しく感じられた。彼は、夕方、灯が點いてからステーションに着き、其處から馬車で家へ歸つたが、家の中は、まだ部屋々々がナフタリンの香ひで一杯であつた。アグラフェーナもコルネイも草臥れ切つて、そして一

人は妙に不愉快な顔をしてゐた。蟲干しのために綱に釣るしたり、空氣に曝したりして、そして又藏ひ込んで置くより外別に役に立ちさうもない品物のことから二人は喧嘩をしたらしかつた。ネフリユードフの部屋は空虚になつて取り散らけて、入り口のあたりは箱で塞がつてゐた。ネフリユードフの歸つて來たことは、習慣的にいつまでも愚圖々々とやつてゐる此の蟲干し仕事の邪魔になるのだつた。

百姓達の惨めな生活の状態に感動して來た心には、自分もこれまでやつて來た憊うした悠長な仕事之餘りに莫迦々々しく思はれたので、ネフリユードフは明日から早速下宿に引越さう、後始末は姉が來てして呉れるだらう。それまでは一切アグラフェーナのするまゝに任せて置かうと決心した。

ネフリユードフは、翌朝早く家を出て、監獄の直ぐ近くに、ごく質素な、餘り清潔でない部屋を二日間借りて、其處へ自分の荷物を運ぶやうに家の者に吩咐けて置いて、それからまた辯護士に會ふために家を出た。戸外はひどく寒かつた。春にはよくありがちな、雨が降つたり、風が荒れたりした後、氣候が急に寒さに變つたと云つたやうな日であつた。身軀な薄い外套では、ぞくぞくする程寒くて、おまけに風が切るやうに冷かつたので、彼は少しでも温まらうと思つて急いだ。彼の心は、百姓達の——女達や——子供や、老人やの——生れて始めて見た惨めな貧乏な生活、取りわけ、小さな細つこい足を伸ばしたり縮めたりして、奇妙な笑ひ方をしてゐたあの年寄り顔の乳飲み見のことなどを思ひ出して胸が一杯になつてゐた。そして夫等を一々街を通る人達と比べて見ずにはゐられなかつた。肉屋や肴屋や呉服屋などの店前を通り過ぎながら、其處等の多くの店員等が皆、垢抜けのした、血色の好い、小肥りした者ばかりで、田舎の百姓のやうな惨めな風をした者は一人もゐないのを見ると、今始め

て気がついたやうに、ネフリユードフは更に吃驚りした。此等の人間は、品物の善悪を知らないお客を騙すことに腐心してゐる。然もこれは無用なことではなく、寧ろ商賣には最も大切なことだと、信じ切つてゐる。が明かに見え透いてゐた。紐釦が二列についてゐる幅の廣い、腰部の垂れ下つた上衣を着た馭者や、金箔入りの帽子を被つた門番や、前髪を散らしてゐるエプロン掛けの下女や、殊に辻馬車の中にゆつたりと脊を凭せかけて、不躑な、人を莫迦にしたやうな眼付きで、通行人をじろんと眺めてゐる、頸元を綺麗に剃つた辻馬車馭者や——慙うした連中は、皆よく肥つてゐた。此等のうちには耕地の不足なため、止むを得ず都會へ飛び出して來た百姓達の幾人かがあることも考へて見ない譯に行かなかつた。そして此等の都會へ出て來た者の中には、巧く儲け出して、故郷の地主のやうに金持ちになつた者もあり、又中には、田舎にゐた時よりも、一層悲惨な境界に落ちて、田舎者にさへ憫まれる程零落してしまつたものもゐるのであつた。

下宿の地下室でネフリユードフが見た靴直しや、石鹼臭い湯氣の立つてゐる開け放しになつた窓の所で、髪をむしやくしやに振り亂して、瘡せ細つた腕を捲り上げて、腕斗をかけてゐた顔の蒼褪めた洗濯女や、又靴下を穿いてゐない素足やエプロンなどをペンキだらけにして、——ネフリユードフは丁度それ等に出會つたのだが——赤黒い瘡せ腕を眩の上までまくし上げて、ペンキ桶を下けて歩きながら、互に罵り合つてゐる二人のペンキ屋など、これ等は皆落伍者のやうに思はれた。彼等の顔は凄れはてゝ何處か性悪く見えるやうになつてゐた。荷馬車をがたくりさせて行く馭者の陰氣な顔付きや、辻々にぶつて物をひしてゐる襤褸の汚い姿をした男や女の顔付きなども、同じやうにやつれて性悪さうに險

しく見えた。かうした色々の顔付きが、とある居酒屋の前を通り過ぎた時、その開け放しになつた窓からごた／＼と澤山見えた。茶碗や徳利やを並べた薄汚い卓子に向つて、白いシャツを着た給仕人があちこちと忙しく動き廻つてゐる間に、うつけた面附きの男が眞赤く額に汗を滲ませて、怒鳴つたり歌つたりしてゐた。窓際に腰をかけてゐる一人の男は、眉を釣り上げ、口を尖らし、眼を据ゑて、頻りに何か思ひ出さうとしてゐるかの様子であつた。

『彼等は何故都會に集まつて來てゐるのか。』

ネフリユードフは、冷たい風に吹き煽られて來る塵埃や、腐つた油とか塗り立てのペンキとかの臭氣やで、息を塞がしながら、自分で自分に訊ねてゐた。

ある通りへ行くと、鐵板を積んだ荷車が幾臺も——一列になつてやつて來るのに出會つた。その荷車は、耳や頭が痛くなる程、凸凹道をがたびしと軌り鳴つてゐた。ネフリユードフは、荷車の列を早く通りぬけようとして足を速めると、突然その車の響きのなかから自分の名を呼びかける者があつた。立ち止まつてよく見ると、口髭を蠟油で塗り堅めて、ピンと光らした、チカ／＼した顔の士官が、辻馬車の上から馴れ／＼しく手を振つて、故意とらしく白い歯を出して笑ひながら

『ネフリユードフ君ぢやないか、オイ君?』

ネフリユードフは、ふと見ると、最初は矢張り懐しく思つた。

『やあ、シェインボック君だね』と、彼は嬉しさうに聲を上げた。が、その一瞬彼は、此の友達と出會つた所で、何も喜ぶことはないと思つた。



シエーンボックは、以前ネフリユードフの伯母の家にネフリユードフと一緒に泊つたことのある男である。その時分別れたなりで其の後まるで出會はなかつたが、相變らず借金で苦められながら、尙ほ騎兵隊に残つてゐて、何うか斯うか金持ち仲間仲間に潜り込んで可い加減なことをしてゐると云ふ噂は聞いたことがあつた。今眼の前にその元氣な得々とした容子を見ると、成程矢張り噂の通りだと頷かれた。

「好い所で君に會つたよ。此の街には知つた者がないんだからね。然し君も老けたね」と、彼は、馬車から飛び下りて、肩を伸ばしながら云つた。「君の歩きつきでやつと君だと判つたよ、まあ兎に角、一緒に飯でも食はう。何うだね、此處らに何かうまい物を食はせる所はないか。」

「いや、僕は、さうしちやゐられないんだ」  
ネフリユードフは、何うしたら、此の友達友達の感情を害害はないやうにして、うまく逃けることが出来るかと考へながら答へた。

「そして、君は何の用事で何處へ来たんだ？」と、彼は問ひ返した。

「御用でだよ、後見役と云ふ御用でなんだ。僕は今これでも後見役をやつてゐるんだぜ。君も知つてるあの金満家のサマノフ家の事務を支配してゐるんだ。あの男は人間は甘い、五萬四千デシャーチン（二デシャーチンは凡そ我が一町一反歩）からの地所を持つてゐるからね」と、彼は、さも自分が、その大地主になつたかのやうな得意らしい容子をして云つた。「所が、今迄その事務が全然なけりにしてあつたんだ。百姓達百姓達に地所などはすつかり貸しつけてあつたんだが、それが皆地代を拂つて

ないんだよ。それで、八萬ルーブリ以上も貸し越しが出来てゐると云ふ始末さ。然し僕が行つてから一年経たない中に、すつかり整理をつけて七十パーセント、或は、もつと多く収入を殖やしてやつたよ。何うだね、僕の腕前は」と、彼は、自慢らしく云つた。

此のシエーンボックは、自分の資産はすつかり費ひ果して了ひ、借金を重ねてゐた時、運よく或人の世話で、だらしもなく金を撒き散らす或金満家の老人の後見を託されたとか云ふ噂を聞いてゐるが、ネフリユードフは不圖そのことを思ひ出した。シエーンボックは今確かにその後見で飯を食つてゐるのであつた。「何うかして憤らせなくて逃げたいものだ」と、ネフリユードフは、腹の中で考へた。口髭を蠟油で塗り堅めた、幅の広いテカ／＼した舊友の顔を眺めながら、そして又、何處か旨い物を食はせる所はないかと云つたり、自分の後見の手際を自慢したりして、馴れ／＼しく機嫌よくお饒舌りしてゐるのを聞きながら、

「それでもまあ、何處かで飯を食はうぢやないか」

「いや本當に僕はさうしてはゐられないんだ」時計を出して見ながらネフリユードフは云つた。

「ではね、今夜競馬場で——君は來ないか？」

「いや、行かれさうもないよ」

「來給へよ。僕は今自分の馬は持つてゐないが、グライイシャの馬に賭けるんだ。彼奴はねえ、素敵な馬を持つてゐるよ。まあ君も來給へ、一緒に晚餐でもやらうぢやないか」

「折角だが、何うもその隙ひまがないんだ」と、ネフリユードフは微笑みながら云つた。

「それや、餘りひどいね。一體何處へこれから行くんだい。何なら馬車で其處まで送つてやらうか」  
 「いや、辯護士に會ひに行くんで、もうすぐそこなんだ——その角を曲るとすぐなんだから」  
 『お、さうだつたね。君は何か監獄のことで奔走してるさうぢやないか、囚人の願ひ人になつたと云ふ話だね。』シエーンボックは笑ひながら云つた。『コルチャーギン家で聞いたよ。コルチャーギンはもう田舎へ引つ越して了つたが、一體まあ何うした譯なんだい。話して聞かせないか。』  
 「うむ、さうだよ、僕が囚人のことで奔走してるのは事實さ」と、ネフリユードフは答へた。「然しこんな街中では話すことは出来ない」

「『それやさうだ。君は以前から少し變り者だつたからな。然し競馬場には來るだらうね?』  
 『イヤ、行かれない。實は行く氣もしないんだ。だが君、腹を立て、呉れては困るよ』  
 『腹を立てる?そんなことがあるものか、だが君は何處に住んでるんだ』と云つて彼は、突然眞面目な顔になつて、じつと眼を据ゑて、眉を擧げた。彼は何か思ひ出さうとしてゐるやうに見えた。ネフリユードフは此の時、此の男の顔にも、居酒屋の窓で見た、眉を釣り上げ口を尖らしてゐた男と同じやうな間の脱けた表情があるのに氣がついた。

「『莫迦に寒いぢやないか、君?』  
 『さうだね』  
 『荷物は持つて來たな』と、シエーンボックは辻馬車の馭者に向つて云つた。『では、左様なら、本當に久しぶりで會つて嬉しかつた。』恚う云つて、ネフリユードフの手をしっかりと握つて馬車へ飛び乗

つた。そして、白い手袋をはめた手を、てか／＼した顔の前で打ち振りながら、わざとらしく白い齒を見せて例のやうにニコ／＼した。

「『自分もあんな風だつたのかしら?』辯護士の家の方へ急ぎながら、ネフリユードフは考へた——  
 『さうだ。自分は、まるきりあんな風ではなかつたとしても、然しあんな風にならうとは思つてゐるんだ。あんな具合に世の中を渡るつもりではゐるんだ』

## 一

ネフリユードフは順番を待たずに、辯護士に面會することが出來た。辯護士はメンショーフの事件に關する書類を調べて、その告發の矛盾にひどく憤慨したとかで、すぐその事件に就いて論じ始めた。  
 「『この事件は實に忌まはしいことです』と、辯護士は言つた。『保険金が欲しさに家主自身で自分の家に火を點けたことは確かですが、それよりも肝要なことは、メンショーフの犯罪が少しも證據立てられてゐないことです。實際何等の證據も擧つてゐないんです。全く豫審判事の不注意と、檢事の殊更ら熱心なことで、無理に罪を負はして了つたんです。これが若し地方の裁判所でなく此所の裁判所で調べられることになれば、別に控訴するまでもなく、無罪放免になることは請け合ひです。それから次ぎの一件——ファイヨードーシャ・ポリニコワのことですね。陛下への上奏文はもう書いて置きました。若しベテルブルグへ御出でになるなら、これをお持ちになつて、あなた御自身の請願書と一緒に直接その筋の者に御渡しになるが宜いでせう。でない、たゞ形式に二三の審問があるだけで、何の

効果もありません。それから上奏委員の有力な者にそれ／＼運動なさるのが一番です。所で、御依頼の件はこれだけでしたね？」

「いや、もう一つ手紙で云つて来た事件が——」

「あなたはまるで管にでもなつたやうですね——監獄の中の不平がその管口を通じてすっかり流れ出て来るんだから何うも——」と、微笑みながら、辯護士は云つた。「だが、餘り多過ぎますね。終ひには何うにも手におへなくなりますよ」

「いや、然しこれは驚く可きことなんですから」とネフリユードフは云つて、或村の百姓に關する事件の概略を簡単に述べた。その百姓は、仲間の者と集つて、聖書の論議をやり、聖書に就いて議論をしてゐると、村の牧師達がそれを見咎めて、一つの犯罪としてその筋へ届けたのであつた。警官はその男を取り調べ、検事は告訴状を起草し、裁判官はそれを審問するために告發したのであつた。「實に驚く可き話だが、實際こんなことがあり得べきことでせうか」と、ネフリユードフは云つた。

「それは一體何故です。警官はまあ、たと命令に従つてゐるだけです。何事も不審はありませんが、然し検事がそんな事件を告發するなんて苟も教育のある人間が——」

「つまり其處があなたの誤解してゐる所です。吾々には一體、検事や裁判官等を自由思想の人間であるかのやうに思ふ習慣があります。成程彼等がそんな思想を持つてゐた時代もありましたが、今では大違ひです。彼等も矢張りたゞの役人で、月給日の心配ばかりしてゐるにすぎません。月給を貰

つてゐて、もつと餘計に貰ひたいと思ふ外、別に何の考へも主張もありませんよ。彼等は、誰だらうがかまはず勝手次第に、告發し、裁判し、宣告するのです」

「さうかも知れませんが、然し、仲間と一緒に聖書を読んでゐる者は、西伯利亞へ流刑に處すると云ふ法律が實際にあるのですか」

「ありますとも、教會の許可もなく、勝手に人を集めて聖書を読んだり講義をしたり、正教會の教義を批難したりした者があつた時は、その證據を捕まへて知らせる者があつただけでも、その人を集めた者は流刑に處せられるのです。公衆の前で、希臘正教を批難した者は、第九十六條に依つて西伯利亞へ流刑に處せられることになつてゐるのです」

「實に無法ですね」

「でも實際さうなんですからね、私はいつも裁判官達に……」と辯護士は續けた。「あなた方には感謝せずにはゐられませんと、慙う云つてやるんです。何故かと云ひますと、私でも、あなたでも、又その他の者達などが、監獄に入れられないのは、偏に裁判官達の厚意によるからです。若し裁判官達が私達の公権を剝奪して、西伯利亞の涯まで送つて了はうと思へば、それは造作もなく彼等の勝手に出来るのですからね」

「だが、もしそんな風に、検事の手次第で法律を勝手に施行する事が出来るとしたら、裁判の必要はないではありませんか」

辯護士は、面白さうに笑ひ出した。「あなたは中々奇問をお出しになりますよ、然しそれは哲學です、

そのことはまたいつかゆつくり御話させよう。土曜に御出でなさいませんか。學者、文學者、美術家などが私の家に集まりますから、其の時、恠うした抽象的問題に就いて論じようではありませんか」と、辯護士は、此の「抽象的問題」と云ふ言葉に皮肉な意味を含ませて云つた。「妻とはもうおちかづきでしたね、是非いらして下さい」

「有難う。参るやうにさせよう」と、ネフリユードフは云つた。そして好い加減な虚言を云つたなと自分で思つた。實を云ふと、この辯護士の所謂文學會なるものや、その仲間の學者や文士や美術家などと交はることを欲しなかつたのである。

若し裁判官が自分勝手に法律を行使することが出来ると思つれば、裁判の意味は全然なくなるではないかと云つたネフリユードフの言葉に對して、辯護士の與へた嘲笑と、「哲學」とか「抽象的問題」とか云ふ言葉を殊更らしく發音したその調子とに依つて、ネフリユードフは、自分とこの辯護士とは、恐らくまたこの辯護士の他の友達仲間とも、萬事に對して遙かに考へが違つてゐるだらうと思つた。そしてその考への相違はつい今し方會つた舊友のシェーンボックや、又その他の舊友達と、自分との間が遠く離れて了つたよりも、この辯護士やその友達仲間と自分との間に置かれた距離の方が更に遠いものであることを思ふのであつた。

一一一

監獄までは可なりの道程なので、それにもう時間も遅かつたので、ネフリユードフは辻馬車を雇ふ

こととした。小柄功な、人の好さうな顔付きをした中年配の馭者は、或街路にさしかゝると、丁度建築中の或大きな家を指さしながら、ネフリユードフを振り返り

「何うも大した普請ぢやありませんか」と、さも自分がこの普請の一部を請け負つて、それを誇りにでもしてゐるやうに云つた。

建物は如何にも宏壯なものであつた。様式も手の込んだ獨創的なものであつた。太い松丸太を鐵で止めて足場を組み、それで建物を取り圍んで、街路との境界を造つてゐた。足場の渡し板の上には漆喰まみれの大勢な職人が蟻のやうにあちらこちらと動めてゐた。煉瓦を積んだり、切つたりしてゐる者や、漆喰を入れた籠だの桶だのを運び上げたり空桶を持つて下りて來たりする者などがあつた。小肥りの身装の好い紳士が——多分建築技師であらう——足場の傍に立つて、上の方を指さしながらウラジミル縣あたりの百姓出らしい請負師に何か話をしてゐた。請負師は長つてそれを聞いてゐた。一杯荷を積んだ荷馬車や空馬車が、此の二人の前を通つて、門から出たり這入つたりしてゐた。

「彼等は皆安心してゐるのだ——仕事をさせてゐる者も、仕事をしてゐる者も——さうだ、安心してゐなければならぬのだ。併し彼等の家では、子供を抱へた女房達が精限り眞黒になつて働いてゐるのだ。繻綴の帽子を被つた小兒も、饑ゑて今にも死にさうにして、然も年寄りのやうな萎びた笑顔を作りながら、細い足をもがくさせてゐるのだ。こんな目に逢ひながらも、彼等はなほ、自分達の膏血を絞り取つて苦めてばかりゐる愚劣な無用の長物たる金持ちのために、愚劣な無用の宮殿のやうな家を建てゝやらねばならぬのだ。」